

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

真・女神転生デビルサマナー ～時と世界と魔法を超えて～

【作者名】

ナベリウス

【あらすじ】

かつて帝都を襲った数多の怪異から人々を守った男がいた。

その名は『14代目葛葉ライドウ』。悪魔召喚師《デビルサマナー》と呼ばれた彼は使役する悪魔、『仲魔』と共に強大な悪意に立ち向かっていった。

時は流れ、14代目の血を引く一人の少年が同居する少女とともに『悪魔』そして『魔法』と出会った。それは新たな悪魔召喚師伝説の幕開けであると同時に、多元世界を覆う悪意に命を賭して立ち向かう、終わり無き戦いの始まりでもあった。

この作品は私の処女作となる真・女神転生とリリカルなのはシリーズのクロスオーバー小説になります。20年来の女神転生シリーズのユーザーである従兄の協力を得て、どうにか頑張って完結を目指していきます。

主軸はデビルサマナーシリーズですが、他にも真・女神転生、if、デビルチルドレンシリーズ、ペルソナシリーズ等のネタや

要素等も入れていきたいと思っております。

第1話 始まりは地下室から

「あなたの！テレビに！時価ネットたなか〜 み・ん・な・の・
欲・の・友……………」

日曜日の昼下がり。テレビでは何時もの様にテレビショッピングが流れている。俺は特に見たい番組もなかったのでソファーに寝転びながら、母さんが何処からお土産として持ってきた“チャクラドロップ”を舐めつつテレビを眺めていた。すると、僕と同じくテレビを見ていた車椅子の少女がおもむろに、

「な〜兄ちゃん。前から地下室探検したいって言っとったやろ？今日は基さんも那緒実さんにタツ君だっておらへんから一緒に探検してみよか？」

「んあ？確かに父さんも母さんも出かけてるけどさ〜。何かあった時にバテて怒られたら嫌じゃんっ…」

「あー！ひょっとして怖気づいてるん？チキンやわあ〜」

「ちょ、おい！そもそも俺ははやての事を心配してだなあ。」

「そんなら階段を降りる時は背負ってもらえばええやろ？私は兄ちゃんが色々探してるのを見るだけで十分や〜」

「ダメなモノはダメ！それに父さんと母さんに怒られるのは自分なんだからな!!」

「ええそんなあ〜!!どうしてもダメなん？」

「はやて」と呼ばれた少女は俺に向かって近付いて来て、どうしても探検をしたい。という表情で懇願してくる。自分自身幼い頃から両親、特に母さんからは必要のない時以外は地下室に入ってはいけない。と強く言われており、ずっと地下室にどんな物が置かれているかとても気になっている。

それははやても同じ様で、以前父さんに訊いてダメだった時以来、両親がいない時を見計らってしきりに僕に対して地下室探検を誘ってきていた。

しかし、はやては足が不自由で車椅子に乗っている。もしも万が一の事があった時を考えるとその誘いに乗る訳にはいかない。

「これでもし、地下に怖い悪霊とか怪物を封印した道具とかあったらどうするんだよ。俺の先祖は陰陽師だったらしいから御札とか式神？だっけか、そういうモノが残っててもおかしくないだろ？」

「あはははは！悪霊ってそんなのおるわけないやろ。やっぱり兄ちゃんはチキンや〜」

はやてはそれまでの上目遣いから一転して俺を小馬鹿にした表情を見せる。く、くそつ……もつこつなったら行くしか無い。行かねばしばらくの間チキン呼ばわりされるのは間違いない！

「むぐぐ……解った！やってやるつじゃないの！此処でやらねば男が廃る!!」

「やった〜さすが兄ちゃん！チャクラドロップでSP全快や〜」

「意味不明な事言っていないでさっさと行くぞー」

以前の記憶を頼りに父さんの書斎から地下室の鍵を持ち出して、先に階段の前で待っていたはやてを背負い、誤って踏み外したりしない様、薄暗い中を慎重に下っていく。

「やっと着いたな。これでこのドアを鍵で開ければ……ちょっと降ろすぞ。」

「了解や！はよ開けて中を見させて〜な」

父さんや母さんの見よう見まねで鍵を開けようとするが中々開かない！

「うーん、なかなか開いてくれそうにないなあ。なあはやて、やっぱりやめ「兄ちゃんのチキン」クソッ！」

鍵を挿した鍵穴を左右に廻したり揺すってみたり試行錯誤するが一向に開く気配が無い。

「下手くそやなあ。ちょっと私にもやらせてくれへん？」

俺ははやてに鍵を渡し、ドアの前まで担いで連れて行くとまるでそれに反応したかのように鍵が仄かに光り出した。

「に、兄ちゃん、なんで鍵が光つとるんやあ!？」

「お、俺に訊かれたって困るぞー！」

2人で驚いている内に光は収まり、何も無かったかの様に元の薄暗さに戻る。

「ふう、やっと収まったか。いったい何だったんだよ今の光は……まるで魔法じゃないか」

「魔法だなんてアホな事ある訳ないやろ！取り敢えず気い取り直して開けてみよか」

するとさっきまでの苦勞がウソだったかのようにすんなり鍵が開いてしまった。若干、いやかなり唾然としたけれど、そうしている時間も惜しいんでさっさと地下室の中に入り電灯のスイッチを入れ、折り畳まれていたキャンプ用の椅子を広げてはやてをそこに座らせる。

「さあ兄ちゃん！私はここで見とるから頑張って色々探してみてや」

「よし！じゃあまずは目の前の本棚からだ」

「どんな面白い本があるんか楽しみやー」

早速本棚を漁ってみると、父さんの生まれた頃から大学生頃までの写真を集めたアルバムや母さんの高校時代の卒業文集などが見つかった。他にも我が家の先祖が陰陽師であることを裏付ける様に、陰陽術についての書籍や古文書集なども見つかり、はやてに手渡すと喜んで読み始めた。

「よし。次の本棚を調べてみよっか」

「……………ふむふむ陰陽師ってこつこついう事をやってたんやな。勉強になるわ」

（はやては本当に本を読むのが好きなんだな。きっと学芸員とか司書

みたいな研究職に向いているんだろっ)

2番目の本棚は俺の通知表や幼稚園と小学校低学年の時に描いた絵があったが、はやてにネタにされるのが嫌で読書に熱中しているのを良い事に元の場所に戻した。そして次の棚に移ろうとした瞬間、足元の段に鎖で嚴重に封じ込められた黒くて分厚い本を発見した。

「ん、なんだコレ？なあはやてーお前この本見たことあるか？」

「んん？あ！その本ってそんな所にあっただんかー。それ私のなんよ」

「しっかし鎖で縛った本とか趣味悪いなあ。ひよっとしてグリモワールとか!? エロイ〜ムエッサイム エロイ〜ムエッサイム」

「なはは、”悪くん”とかいつの時代の人なんよ。ってその本は気付いた時から私の家にあった物なんやけど、兄ちゃんの家に来てから何時の間にか無くなっててずっと探してたんや」

「(軽く凹んだ)……まあいいか。はいコレ。久々のご対面だな」

「おおおきー」

はやてにその”分厚い本”を手渡すと、まるで我が子のようにそれを抱きしめた。彼女にとってあの本はきつと想い出深いものなのだろう。その後再び陰陽師の本を読み始めた。さて、俺も他にどんな物があるか色々探してみよう。

その後は特にコレと違ってめばしい物はなく、本を見つける度にはやてに渡し、今度は読み終わった本を元の場所に戻すということは何度も繰り返した。しばらくして地下室の一番奥に行くと、隅に高級そうなタンスが置かれていた。何故かこのタンスを目にした時、何故か何者かに呼ばれた気がして引き出しを開けてみると、そこには不思議

な形状の鈴と陰陽師が使うような御札に巻かれた"何か"が数本置かれていた。

「あ、なんだこれ？」

「兄ちゃん何か見つけたのー？」

「ああ、コレだよコレ。この管っぽいヤツに巻かれてるのって御札だよな？」

俺は"何か"の内の1本を持つと、はやての元に行ってそれを見せた。そして巻かれている御札を剥がすと黒光りする管の様な物が出てきた。

「この御札、さっきの本に写真が載ってたヤツやな。それにしてもこっちの黒い管の様な物は何なんやろか」

「御札の種類が判ればコレが何か解るんだけど」

「兄ちゃんさっきの本取ってや」

「おう」

「うーんと……あつたコレや！えっと、悪霊や物の怪を封印する御札みたいやね」

「(!!)マジかよ……ひょっとしてコレにはこの中に怪物が封印されてるってのか!？」

「んなアホな、もし怪物が入っておつたら御札を剥がした瞬間に襲われとるわー」

「おいおいビックリさせる事言っんじゃない!!」

「堪忍してえな兄ちゃん〜」

そんな事を言い合っていると、はやての側に置いてある“分厚い本”と俺の手にした管のような“何か”が、先程の鍵の様、それぞれ“分厚い本”は紫色の光を、管のような“何か”は緑色の光を発し始めた。

それに2人して呆然としていると“何か”の先端が捻れながらせり上がっていき……

「ちよ、に、兄ちゃん！右手右手!!」

「え？あ！管が……うわああああっ!!」

「ふう、ただいま」

玄関でパンプスを脱いだ瞬間、地下室の方から魔力が流れってくるのを感じた。まさか勝手に晃祐とはやてちゃんが地下室に入り込んだ訳じゃ!?でも鍵には封呪を掛けておいたから2人には入ることが出来ない様になっているはずなのに……とにかく2人の身が危ない。もし封魔の札を巻きつけて桐ダンスに入れた“管”からアレが外に出たら無事では済まないわ!!

「晃祐！はやてちゃん!!」

私はバッグから“管”と符を取り出し、地下室へ急行する。

『アオオオオオオオオオオ！』

「うわああああああ！ば、化け物ッ……」

「う……ウソ、やる」

「お、お、おいはやて！」

俺とはやての目の前には白いライオンの様な、それでいて狼のような巨大な化け物が姿を表した。それを見たはやては意識を失い、俺自身も腰が抜けて全く動けなくなってしまう。

『グルルルル……礼ヲ言ウゾ、ニンゲン。ヨウヤク外ニ出ラレルコトガデキタ』

「あ、あ、あ……」

『オレサマノ姿ヲ見タヤツラハ皆殺シ！オレサマオマエラマルカジリ』
『!!』

化け物が雄叫びを挙げた瞬間、ドアが勢いよく開け放たれた。

「そこまでよ“魔獣ケルベロス”!!」

次回に続く

第2話 ソーマ神、権現

「そこまでよ」魔獣ケルベロス!!」

開け放たれたドアの方を向くと、其処には母さんが立っていた。

『グルルアアアアアア……キサマー！オレサマノ餌ヲ横取りスル気力
!?!』

すると「ケルベロス」と呼ばれた白い化け物は、鋭い爪が生えた右前脚を振り上げた。俺はもうダメだ。と思って顔を背けた……が、次の瞬間、はやての大切に使っていた「あの本」が再び光り、何か壁のようなものが見れてその一撃を弾いた。

「……私の子ども達を餌扱いだなんていい度胸ね。お仕置きしてあげるわ！出でよ」ソーマ!!」

(?!?)

何かが炸裂した様な轟音が地下室に響き渡り、背けていた顔を前に戻す。と、目の前には、まるで月明かりの様に光り輝く衣装を纏った人らしきものが、また俺に向かって攻撃して来ようとする化け物の一撃を防いでいた。

「二人共怪我はない!?!」

「あ……母さん。「じゅん、はやては……」

「話は後で！とにかくはやてちゃんを背負って早く上に戻りなさい

「！」

「え？でも母」私の事なら心配要らないわ」でも、化け物なんだよ!?どうしてそんなに冷静でいられるの!!」

「それも後で話すからさっさと上に行きなさい。いいわね!」

俺は失神していたはやてを担ぐと、階段を上がるうとするが、ほんの数十段しか無いはずの階段が、恐怖心からかとても長く感じてしまった。どうにかリビングに逃げこむとはやてをソファーに寝かせ、俺も床でしゃがみこんで膝を抱えてガタガタを震えてしまう。

あんな恐ろしいものが何で俺の家なんかに？

それにあの化け物は一体何なんだ？

そもそも母さんは何で化け物の事を知っているんだ？

俺はおもむろに地下室の方に目を向けた。母さんは本当に大丈夫なんだろうか……

その頃地下室では

「いい加減になさいケルベロス！幾らお祖父様と共に怪異に立ち向かったとはいえ、私の子どもに襲いかかるのは親として見過ごせないわ。」

『オレサマヲ外ニ出サナカタ、貴様ガ悪イ!』

『くっ……主よ、これ以上私の力では此奴の力を食い留める事は不可能です！』

私はすぐさまスマートフォン状COMPから、祖父“14代目葛葉ライドウ”が愛用し、私自身も悪魔討伐に使用する赤光葛葉《しゃっこうくずのは》を呼び出し鞘から一気に刀身を抜き、それまでケルベロスの攻撃を受け止めていたソーマが避けて体勢を崩した瞬間に、ガラ空きになっていた右脇腹へ突きを放つ。

『グワアアアアアアアアアッ!!』

(右の肺を潰した！これで動きを止められ……ッ!?)

ケルベロスの身体から赤光葛葉を抜こうとした瞬間、身体を大きく振るわれ壁に叩きつけられてしまう。幾ら私が“絶対無敵のデビルサマナー”の異名を持っていようが所詮は女、イザとなった時の力は男性デビルサマナーには劣ってしまう。

「っ……！ソーマ、あいつの動きを封じて！」

『心……』

ソーマは瞬時に凍結呪文“ブフ”を放つ。ケルベロス位の悪魔なら更にその一つ上の威力を持つ“ブフーラ”を使うべきだけど、地下室という場所を考えるとそれは無理ね。でもさすが私と20年以上共に戦い続けてきた仲魔だけあって、ただのブフでも十分効いたみたい。四肢が氷漬けになって身動きが取れなくなった。私は立ち上がるとソーマに、

「“ブフ”だけじゃ不安ね。“シバブー”もお願い」

『応。死にたく無くば大人しくせよ！』

全身を鎖の様な光で縛り付けられたケルベロスはさすがに観念したのか、身体を伏せて動くのを止めた。さっきの脇腹への一撃が相当効いているみたいね。私はケルベロスの身体に刺さったままの赤光葛葉を抜き、そのままソーマに指令を下す。

「ソーマ、ケルベロスを回復させてあげて」

『しかし宜しいのですか？此奴は主を騙そうとしておるかも知れませぬぞ』

「大丈夫よ。もしそうだったらシュウヤアンリ・マンユも召喚して跡形も無く消し飛ばすから」

(コレハ、逆ラワヌ方ガ身ノタメダナ……)

『……承知。"ディアラハン"』

ソーマが両手をかざすとケルベロスの身体を眩い光が覆い、一瞬にして跡形もなく傷口が消えた。

「ありがとう。もう戻っていいわ」

『応。それではまた』

ソーマに封魔管を向けると光となって吸い込まれてゆく。そして再びケルベロスの方に向かい、これからの事について話し始める。

「さて、ケルベロス。あなたのやったことは許されないのは解ってい

るわね？まあ、私の方も今まで気が回らずに長い間管に閉じ込めておいたから余り強くは言えないけれど、コレに懲りたらもう二度と人を襲う様な事はしないで」

『ガLLLLLLLL……解ッタ』

「よしいい子ね。それでねケルベロス、貴方に大切なお願いがあるの」

『マサカ、アノ坊主ノ事力？』

「坊主って……まあいいわ。いずれ子ども達を守るために貴方の力が必要になる時が来るわ。その時は力を貸して欲しい」

『ドウセ坊主ドモハマタ、オレサマノ姿ヲ見テ腰ヲ抜カスニ違イナイ』

「あはは……詳しいことはその時に話すわ。一度戻って頂戴」

するとケルベロスも光になって封魔管に戻った。それを回収した後一階の方に顔を向け、

「さてどうしようかしら。はやてちゃんの“あの本”が光って障壁を出したのも気になるわ……もしかして力が目覚めようとしているのかも知れない」

私はしばらくの間、今後の事について思考を巡らせるのだった。

「一方リビングでは

」ひひひ……」

「(！)は、はやて!？」

「うん、兄ちゃん。あ、あれ？何でリビングにおるん!？」

気付くと何時の間にか私も兄ちゃんもリビングにおった。たしか地下室で突然黒い管みたいなのから、ジャン　ル大帝みたいに真っ白いライオンが現れて……と、突然兄ちゃんが私の事を抱きしめてくる。ちょ！苦しい苦しい!!

「良かった、目を覚ましてくれて。もし起きなかつたら俺……」

「もう、兄ちゃんってばホンマ心配性やなあ」

兄ちゃんはホツとした表情を浮かべて私を見つめてくる。イヤやわあ、そんなに見つめられたら惚れてまっやる。ま、そんなことあらへんがな!!

「……今、何か余計な事考えなかつた？」

「ナンデモナイヨ？」

「ナズエ！カタコトニナルンデイス!!」

「ニーチャンコスオ、ナズエオンドウルゴニナッテルンデイスカー!？」

「ウエーイ!!」

「ウエイ!!」

「……もうやめとこか」

あんな事があったのに、まったく気が抜けてもった……でもありがとな、兄ちゃん。

「そついや那緒実さんはどうしたんやろか？」

「俺ちよっと見てくるよ。はやてはこのまま休んでて！」

「あ、兄ちゃ」その必要は無いわ「って那緒実さん!？」

リビングのドアが開けられて那緒実さんが入ってくる。

「晃祐、はやてちゃん……後で話があるわ」

アカン、地下室に入ったので怒られる！でも私が兄ちゃんにけしかけた事やし、なんかごっつい大事になってもったから此処は素直に謝っとこ。

「那緒実さん。ホンマゴメンなさいー」

「母さんゴメン!!」

「もういいの。遅かれ早かれいずれは本当の話すつもりだったから

……」

「え!？」

「え!？」

「取り敢えずお父さんと匠真が帰って来て、晩御飯を食べてから話し

てあげるわ。あの化け物や私の力、それに“あの本”についても。とにかく今は休んでなさい」

そう言うとな緒実さんは何事も無かったかのように晩御飯の準備を始めてもつた。私は兄ちゃんの方を見ると、なんとも言えない顔で見返してきた。いったいどんな話をされるんやろか……それに“あの本”の事についても何か知ってるって事も気になるし、これからどうなってまうんやろ。

次回に続く

第3話 悪魔召喚師《デビルサマナー》

俺とはやてが地下室で化け物と遭遇して数時間後、父さんと匠真が帰宅し晩飯を食べた。何時もなら匠真とはやてがおかずの取り合いをしたり、皆でテレビを見て盛り上がったたりするところなんだけど、今日は終始重々しい空気が流れていた。

母さんが食器を片付けた後、ソファーに座る俺とその横で車椅子に座り居心地悪そうにしているはやてに向かって近づき、口を開き始めた。

「晃祐、はやてちゃん。さっきの事だけど」

「那緒実。2人がどうしたっていうんだい？」

「私達が家を空けている間に地下室に入ったのよ」

「まさか！あそこには俺か那緒実と一緒にの時以外入っちゃいけないとあれほど言っていたのにか？それに鍵には“仕掛け”がしてあったのよ……」

「そのまさかよ。“仕掛け”を解いて入るだなんて思ってもみなかった。それに一番奥のタンスに入れておいた“管”も開けてしまつて……私があの時偶然帰ってきてなかったらどうなつてたことか」

父さんと母さんのやりとりを聴いていたはやては顔を軽く俯かせていて、よく見ると目尻には涙を浮かべている。

「那緒実さん……崇さん……ホンマごめんなさい。私のせいで皆に迷惑をかけてもつて……」

「2人共ごめん。つい出来心で……まさかあんなモノが地下にあるだなんて思いもしなかったから」

2人で揃って頭を下げる。はやては眼を真っ赤にして鼻もグズグズさせている。

「謝って済む問題じゃない！たまたま那緒実が帰って来たから良いものの、もし帰って来なかったら死んでたんだぞ解ってんのか!？」

「……もう過ぎたことは仕方ないのよ。怒鳴った所でどうにかなる問題じゃないわ」

父さんの怒号ではやてが肩をビクリとさせ、更に顔を下に向けてしまったので俺はおもむろに肩に手をかけて安心させようとする。

「……解ったもついい。後でどうなるのが俺は知らん!!!」

「ちょっと父さん！それはあんまりだよ!!」

匠真の言葉を無視して父さんはドアを乱暴に閉めてリビングから出て行った。父さんは怒ると何時も物を乱暴に扱う。幾ら学校で子ども達や保護者からは評判の先生でも、家庭では積もりに積もった鬱憤を晴らすかのような言動が多く、母さんはそれをなだめるのに何時も苦労している。はやてが家に引き取られるまでは、家に帰ってくるのを酒を煽っては俺や匠真に対して虐待紛いの暴力を振るったりしてその都度母さんからキツくたしなめられていた。俺はあんな大人げない人間なんて絶対なりたくない。

「もつ、仕方ないわね。匠真も椅子に座りなさい」

「……解った」

「はやてちゃん」めんね。はやてちゃんが来てからあの人は余り怒鳴り散らす事をしなかったから驚いたでしよっ？」

「うっん……元はと言えば私が悪いんやし怒鳴られてもしやあないんや」

「大丈夫、もう大丈夫よ。さあ、顔を上げて頂戴。私は絶対怒ったりしないから」

母さんははやてのそばに来て頭を優しく撫で、安心させようと微笑みかけ、皆で落ち着くまで待つことにした。

「それで母さん、兄さんとはやてちゃんが地下室に入ったってことは」

「それならまだしも“管”や“本”にまで手を付けてしまったみたいね」

母さんと匠真は俺の横に置いてある鎖で閉じられた“例の本”に眼を向けた。ちよつとまてよ、何故俺とはやての知らないことを匠真が知っている？

「母さん。なんで匠真がそれを知ってるの？」

「それは半年位前、匠真が家に友達を連れて来た時にも同じ様な事があったからよ。その時は私が家にいたから何ともなかったし、結局「アレ」を見たのは匠真一人だけだったから口に出さないように言っ
て聞かせておいたの。それから地下室の鍵に「仕掛け」をして私と父さん以外は入れない様にしたらって訳」

「で、その「仕掛け」ってのは？」

「それは一種の「おまじない」みたいなものよ。ゲームとかに良くあるでしょっ？」

「いやでもそんな「魔法」みたいなものある訳「それがあるのよ」え
!？」

「だって「悪魔」が居るんだもの。「魔法」が有ったっておかしくな
いわ」

「……那緒実さん。ちょっと聞かせて貰えへん？」

はやてが母さんに向かって顔を上げると、母さんは立ち上がった

「夕食前にも言った通り、あなた達にはこれから本当の事を話すわ。
ただし絶対に他の人に言ってはダメ。まあそんな事を言ったとしても変人扱いされるだけでしょうけど」

そう言つと椅子に座つて言葉を続けた。

「それじゃあまずはこの「管」と、これから出てきた「化け物 悪魔
」について話そうかしら。「悪魔」ってのは所謂「神教、つまりメシ
ア教の教典なんかで出てくる一般的なイメージの悪魔と違って、精霊
や妖精や天使 悪霊 神などといったものも全部引つ括めたものを指

すの」

「それってなんかおかしいんとちゃう？たとえば天使って人の味方を
して悪魔と戦うんやろ。まるで正義の味方を敵と言ってるようなも
んや」

「それは違うわ。メシア教の天使は人の味方じゃなくて“唯一神”の
味方なの。例えば“メタトロン”っていう最高位の天使なんかは、“
メシア教を信仰しない人間を皆殺しにする”っていう残虐極まりな
い存在なのよ？」

「……つまり人間にとって敵とも味方とも限らないから“悪魔”とい
う事？」

「一般的な天使や悪魔って言うものの考え方は“あくまで人間からの
一方的な視点”で見ただけに過ぎない。だから敢えて“悪魔”とい
う言葉を使っているのよ」

「そしてその“悪魔”を召喚して使役するのが“悪魔召喚師”デビルサマナーなんだ
よ！母さんもその悪魔召喚師の1人なんだ」

「ホ、ホンマなんか那緒実さん!？」

「もう匠真、それは私が言つとこるよー!」

それからは母さんが“悪魔”と“悪魔召喚師”、そして母さん自身
の事について話してくれた。要点を掻い摘むと、悪魔召喚師は飛鳥時
代には既に存在しており、それが奈良時代から平安時代へと歴史が
移って行くに従ってかの有名な陰陽師へと変わっていったのだとい
う。陰陽師が使役する式神もまた悪魔の中の一つであるという事も
教えてくれた。

俺が地下室で見つけたあの管は、「封魔管」というその名の通り使役する悪魔を封じておく入れ物で、所有する悪魔召喚師の「生体マグネタイト（略称MAG）」というエネルギーの様なものを使ってコントロールしているけれど、長期に渡って手放している時は暴走を食い止めるために呪符を巻きつけて封じ込めておかねばならないという。しかしここ30年位は「悪魔召喚プログラム」をインストールした特殊なPC（通称COMP）による自動制御が可能となった事から、封魔管による召喚も一気に廃れてしまったそうだ。

そして母さんは、物心ついた頃から悪魔召喚師としての道を歩むために色々な修行をしていて、一人前となってからは全く信じられない様な数多くの困難と直面し、その度に乗り越えて生きてきたという。時には悪魔召喚師同志の争いで仲間を殆ど殺されてしまったり、またある時には強大な悪魔と戦って生死の境の彷徨ったり……俺もはやっても、そして以前話を聴いているはずの匠真さえも信じられないといった顔をしていた。

「……でもさ、PCで制御できるなら、初めから悪魔をそっちに移しておけばこんな事にならなかつたんじゃない？」

ふとした疑問を口に出す。すると母さんはハンドバッグからスマホの様な物と封魔管を取り出して、

「私も確かにスマホ型のCOMPを持っているけれど、あくまでそれは補助にののために過ぎなくて召喚師を始めた頃から今までずっと召喚には管を使っているの。人間ってのは便利な物があるといついに頼りがちになってしまう。でもそれでは召喚師として色々な意味で鈍ってしまうと思ってね」

「でも「まぐねたい」と「やっけ」毎回使ったら那緒実さんの身体が持たへんのちゃうっ？」

「そのためのCOMPなのよ。COMPにはMAGを圧縮格納しておくことの出来る機能が付いているわ。そして私の封魔管は、見た目こそ地下室にあるそれとはあんまり変わらないけれど、召喚に反応してPCの無線LANの様に格納されている物を飛ばして、私自身のMAGの消費を最低限に抑える事ができるのよ。頼らないといけない所は頼って、自分で出来る事は自分でやらないと本当にダメな召喚師になっちゃダメよ」

「COMPもPCだから故障とかで使えなくなるって事？」

「ええそうよ。それに地下室にある封魔管と悪魔は召喚師をしていたお祖父様　晃祐と匠真のひいおじいさんに当たる人の遺したものだから、もし悪魔を逃してしまってたくさんの人達に迷惑をかけてしまう事を考えるとそのままにしておくしか無くて。お祖父様の事についてはまた別の機会に話してあげるわ」

「んなら私の本」ああっもうこんな時間!!」「は？」

時計を見た母さんが急に声を張り上げたのにビックリした。なんだかんだで時計は22時になっていたのだ。

「本」については明日皆が学校から帰ってきたら話してあげるから、今日はもう寝なさい」

「ええ〜そんな殺生な事せえへんで今聞かせてえなあ〜！」

「朝寝坊したら困るのははやてちゃんでしょう？楽しみを取っておいてもう寝ようよ」

匠真になだめられて仕方無くはやては部屋に戻って行く。俺も明

日は部活の朝練があるからさっさと寝ないと。でもその前に、

「……母さん、明日もちゃんと話してよ。はぐらかすのは勘弁してくれな」

「……解ってるわ」

台所で朝食の下準備をしている母さんの背中を見ながら、俺は自室へと戻った。でも今日一日で起きた怒涛の出来事に全く寝られずに朝を迎えることになる。朝練と授業辛いなあ。

次回に続く

第4話 闇の書

地下室での衝撃的な出来事から一晩明け、結局一睡もできずに俺は中学で所属している剣道部の朝練に出たものの、案の定集中力が足りないと何度も先生から注意を受けただけでなく、1時間目から最後まででの大半を居眠りして過ごし、毎時間先生たちに叩き起こされてはクラスメイトたちから笑われてしまった。俺は放課後にある部活を休ませてもらい、そそくさと帰宅の途につくのであった。

「ただいま」

「あ、兄さんお帰り」

「お帰り兄ちゃん！今日は早う帰ってきたんやな」

「あ、ああ。結局朝まで眠れなかったから、体調が悪いつて言って部活休ませて貰ったんだ」

匠真とはやてが玄関まで出てきて俺に声をかけてくる。俺は靴を脱いで2人とリビングに行くとき既に母さんも帰っていて、夕飯の準備をしていた。

「ただいま母さん」

「晃祐？荷物は自分の部屋に置いて来なさい！」

「……………解ったよ」

洗面所で手洗いとうがいをした後、2階の自室に戻ってスウェット

に着替え、再びリビングへ。

「そついや父さんは？」

「お父さんは今日から職場の研修で3日間いないわ」

「そつか。まあいない方が色々と楽ししいか」

「……もう。其処の戸棚の中に煎餅が入ってるから食べてなさい。お茶は飲むんだつたら自分達で入れて」

「ういー。2人ともお茶いるか？」

「私はいるで〜」

「じゃあ僕も」

母さんが指差した台所の戸棚を開けると、そこには“ピーナッツ入り南部煎餅”が入っていた。それを袋から出して皿に移した後、お茶を淹れる準備をする。まずはポットのお湯を一度湯呑みに入れて、温度が80 位になるまで冷まし、その後ゆっくりと急須に入れて1分ほど葉が開くのを待つ。こうすることで渋味が抑えられ、なおかつ旨味を引き立たせることが出来る。そして急須から湯呑みに移すときは少しずつ均等に注ぎ分けて美味しい煎茶の完成だ。

因みにこれは若干高級な煎茶の入れ方で、一般的に市販されている煎茶は湯冷ましをする必要が無く、ポットからお湯を急須に入れて30秒程で湯呑みに移した方が美味しく飲めたりする。

「前々か思ってたけど、兄ちゃんってやけにお茶の淹れ方に詳しいよねえ」

「兄さんはお祖母ちゃんから何回も教えて貰ってたからね」

「よし出来た。さーて食べようか!」

俺達3人は煎茶を飲みつつ南部煎餅を口ににする。煎茶の味と煎餅に入ったピーナッツの香ばしさが一体となって口一杯に広がる、正に至福の一時だ。匠真もはやても幸せそうな顔をして口にしているのを見て更にほっこりとする。

「兄ちゃんテレビつけてやー」

「おっ」

俺はリモコンに手を伸ばして電源を入れる。すると、

「いらはいいらはいーヨーこそサトミタダシへ〜おじちゃんのことサートちゃん」ってよんでねえ〜!!」

ちょうど「僕らの街のお薬屋さん」こと「サトミタダシ」のCMが流れはじめた。CMはおろか、店に行ってもエンドレスで流れ続けているこの曲は「電波ソング」と名高く、一部店舗では演歌バージョンやテクノバージョンといったアレンジを加えたものまである始末。俺達の住む海鳴市や近隣の珠間瑠市でこの曲を知らない者はいないと言われる位の知名度を誇る。

すると2人は声を合わせ、曲に合わせて歌い始める。俺もそうだけど、この2人も完全に洗脳されてしまっているのだ。

「石化回復ティーストーン」

「匠真君そこはSP回復チュイ〜ンソールやで!」

「ディストーンだよ！」

「チューインソウルや！」

「まあまあ2人も……」

「兄さんは黙ってて!!」

「兄ちゃんは黙ったときや!!」

「……はい」

匠真とはやてはこのCMが流れる度に“ディストーン”か“チューインソウル”かで言い合いをする。CMやほとんどの店舗では“チューインソウル”で流れているんだけど、創業店のある御影町の全店舗やその他の街の一部店舗では“ディストーン”で流れていたりする。俺達は5年前に海鳴市に引っ越すまでは御影町に住んでいたから“ディストーン”の方が馴染み深い。

最終的にはいつも言い合いをしていたはずの2人は気付くと、

「サト〜ミタダシはおくすりや・さ・ん！」

「サト〜ミタダシはおくすりや・さ・ん！」

と、3番の最後までデュエットしている。仲良き事は美しきかな。煎餅を食べ終わると皿と湯呑みをお盆に乗せて台所に持って行き、その後は夕飯が出来るまで3人でテレビを見ながら色々と話をした。夕食後、母さんが皿洗いを終えて戻ってくると俺たち3人をテーブルの所に呼び、昨日の話の続きを始めるのだった。

「……3人もいいわね？昨日の話の続きだけど、はやてちゃんの持っている“あの本”は、所謂グリモア魔導書マジックブックの一種で、“闇の書”と言われる強大な力を持ったものなの。」

「マジで？地下室ではやてに冗談でエロイムエツサイムって言ったけど、あれって本当だったのかよ！」

「正確には“エロイムエツサイム我は求め訴えたり”っていう呪文ね」

「ほな、この本には悪魔を召喚したり魔法の使い方が載ってるってことなんやな？」

「見ての通り鎖で封じられてるから正確な内容は解らないけれど、この間の書は転生を繰り返しては主を換えて、“魔導師の魔力を奪い取って蓄積し、一定のレベルにまで達すると暴走を始める”というものらしいわ」

「ええっ！それってとんでもなく危険なものなんじゃ!？」

「そうね、そしてこの本のもう一つ質の悪い所は、一定期間魔力の蒐集を行わないと主の命を脅かす」

「じゃあ、はやての半身不随はこの本のせいって事なのかよ」

「それは断定できないけれど、このまま放置しておくと同様でなく危険に晒されるわね。だから解決策が見つかるまで地下室に置いておいたのよ」

「なんで那緒実さんはこの本の事を知ってるん？」

「それは私達悪魔召喚師が所属する“ヤタガラス”という組織があるのだけれど、はやてちゃんのご両親が亡くなられた頃にその本の情報を持って接触してきた人がいたのよ。その人は闇の書の概要と危険

性、そして“闇の書を狙う組織”について私達に教えてくれた。それで闇の書の主 即ちはやてちゃんをその“組織”から守るために白羽の矢が立てられたのが、ご両親と顔見知りだった私だったという訳

「それなら闇の書だけ渡してしまえば一件落着じゃ？」

「そうはいかないからこうしてるんじゃない!“組織”の連中は主であるはやてちゃんもろともこの本を消すつもりらしいの。何が何でも絶対に阻止しなくちゃいけない。年端もいかない女の子の人生を奪うだなんて絶対に許すわけにはいかないわ」

「那緒実さん……いくら父ちゃんと母ちゃんと顔見知りやったとしても、わざわざ引き取る必要なんて無かったやん。私迷惑やる……？」

はやては昨日と同じく目尻に涙を浮かべ、顔を俯かせてしまう。それを見た母さんもまた昨日と同じく隣に来て頭に手を乗せて語りかける。

「いいえ……私は若い頃からずっと“幸せな家庭”に憧れていた。私も両親を早い内に亡くして、ずっと悪魔召喚師として辛い道を歩んできたから、ご両親の代わりにたくさん愛情を注いであげようと決意してあなたのことを引き取ったのよ？ 私には、私達“ヤタガラス”の悪魔召喚師には“力”がある。例えばどんな相手であろうと守ってみせるわ。絶対に。」

母さんはその場で立ち上がる時、その眼はまるで鋭利な刃物を彷彿とさせるかのような眼光を放っていて、こう言葉を続けた。

「何か方法はあるはず。だから絶望なんてしないで。必ず、救ってみせるから」

母さんは今までも時折鋭い眼光を見せる時があったけれど、今思うとそれは悪魔召喚師としての仕事が舞い込んできた時だったのかも知れない。また同時に、「自分じゃはやてや母さんの役に立たないのでは無いか？」という事を認識してしまい、何とも言えない気持ちになる。そりゃあ、俺が悪魔や悪魔召喚師について知ったのは昨日だけど、ここまで聞かされると今までの自分が馬鹿馬鹿しくなってくる。どうすりゃいいんだよ……

「兄さん、何そんな気難しい顔してるの？」

「……なんでもない」

「??」

匠真は気楽な奴だ。こんな話をされて何も思わない方がおかしいだろ。

話が終わると、そそくさと風呂に入って自室に戻るが明日の準備も進まない。こんなどうしようもない事で悩むだなんて自分らしく無い！って事は解ってるつもりだけど、上手く切り替えることなんて出来る訳が無い。

「晃祐……もう寝た？」

「いいや、まだ起きてる」

ドアがノックされ、母さんが中に入ってくる。

「晃祐、自分は無力だと思っているんでしょっ？」

「図星だった。」

「……あなたと匠真ははやてちゃんの側にいるだけで十分私の力になっっているの。勘違いしないで頂戴」

「でも母さんが昨日みたいに家にいない時はどうすんだよ。その間にはやてを狙う“組織”の連中が来たら意味なんて無いじゃないか」

「昨日はたまたまだったけれど、長く家を空ける時は私の“仲魔”を出して守らせて置いてるから心配要らないわ」

「でも相手が“仲魔”より強かったらどうするんだよ？」

「私の“仲魔”は絶対に負けない」

「でも“デモは機動隊が鎮圧しました！”」

「悩んでないでもう寝なさい。明日もマトモに授業を受けられなかったらどうするの」

「ちよ、なんで知ってんのさ？」

母さんは部屋から出て行くこととしてこっちを振り返り、

「私に解らない事は無いわ」

全く、母さんには敵わないな……もういい加減寝よう。

それでもほとんど一睡も出来ず、翌日また学校で先生達に怒られたのは別の話。

次回に続く

登場人物設定 その1

相原 晃祐（あいはら こうすけ）

この作品の主人公で1月11日生まれの14歳（第5話より中学3年生）。

学校では剣道部に所属しており副部長もしている。

性格は表面上ポジティブでおちゃらけている様に見せているが、根はネガティブでクソ真面目である。不測の事態が起きるとパニックになりやすく、所属する剣道部の試合で突然逆転負けを喫する事が多々ある。要は本番に弱いタイプ。

容姿も頭脳も平凡であるが、弟・匠真が父親譲りの頭脳と母親譲りの容姿を持つため、常に周囲からは比較されており、内心は常に（周囲は疎か匠真にも）不満と嫌悪感を募らせている。

また、家庭を半ば顧みずに仕事に没頭する父親とは軋轢があり、那緒実不在時には虐待紛いの暴力を度々振るわれた事もあって母親以外の大人に対する不信感も強い。

機嫌が悪くなると父親に似て口調が乱暴になるが、本人はそれを全く自覚していない。

はやてが引き取られて来た時には「妹が出来た」と喜び、心の傷が癒えない彼女の世話を進んでやった結果、家の中でも外出時にもほとんど常にはやてと一緒にいるくらい非常に仲が良くなった。そのためクラスメイトからは「シスコン野郎」というありがたくない渾名を付けられる羽目となる。

悪魔と悪魔召喚師そして闇の書の内容を知った彼は、これからどのような道を歩んで行くのだろうか。

八神 はやて

ご存知リリカルなのはシリーズのヒロインの1人で、この作品のも

う一人の主人公。

両親の死後、"とある人物"によってもたらされた情報によって闇の書の存在を知った"ヤタガラス"によって保護され相原家に引き取られる。病の度合いも原作よりは若干軽めで、学校にも通学できる程度のものであり、匠真と同じ海鳴市内の公立小学校に通っている。引き取られたばかりの頃は両親を失った事から無口で暗かったが、晃祐が甲斐甲斐しく身の回りの世話をしたりした結果、生来の明るい性格に戻り同時に実の兄の様に慕うようになった。

闇の書の主となってしまうことから海鳴市に巣食う悪魔と、闇の書を狙う"組織"の巨大な陰謀の渦に巻き込まれていく。

相原 那緒実(あいはら なおみ)

主人公の母親にして悪魔召喚師。

かつて帝都を幾度と無く襲った悪意と戦った"14代目葛葉ライドウ"の孫で、"絶対無敵の悪魔召喚師"の異名を持つヤタガラスのエース的存在。はやて同様幼い頃に両親を失いつつも"幸せな家庭"を夢見、祖父譲りの不屈の精神で数多くの修羅場を乗り越えて遂に念願を果すことが出来た。しかし現在は夫・崇と長男・晃祐との軋轢に頭を悩ませている。

40歳を越えているが非常に若々しく、20代と言われてもおおかない美貌を誇り、同じく20代近い美貌を持つ"翠屋"の高町桃子と共に海鳴市ではちょっとした有名人となっている。

若い頃の髪型はロングヘアだったが現在はショートボブにしている。

巨大な渦に巻き込まれた晃祐とはやての2人の主人公を時には母親として、そして時には悪魔召喚師として導いていく事になる。

好物はマンゴープリン。

相原 匠真(あいはら たくま)

主人公の弟。4月27日生まれの11歳(第5話より小学6年生)。
晃祐 はやてよりも先に悪魔と悪魔召喚師の存在を知ったが、「病弱な自分では何も出来ない」と言っつて那緒実の言い付けを守り、2人には秘密にしていた。

晃祐曰く「呑気な野郎」との事だが、小学生とは思えないほどの落ち着きを持つしっかり者で、常に学年でトップ5に入るくらいの頭の良さに女の子と言われてもおかしくない程の華奢な体型と容姿を持つが、生まれつき病弱で運動は苦手。

周囲からは兄・晃祐と常に比較されているが、内心ではその事に晃祐が不満を持つているだけでなく、自身に対しても嫌悪感を持つている事を理解しており、「如何にして兄弟仲良くやっていくか」を常に考へて行動している。

はやてが引き取られて来た最初の頃は「匠真兄ちゃん」と呼ばれていたが、ムズがゆく思つたため無理矢理「タツ君」と呼ばせるようになった。彼女より年上で頭の回転が早いにも関わらず、何かと言ひ合ひをする辺りはまだ子どもである。

相原 崇(あいはら たかし)

主人公の父親で、海鳴市内の公立中学校で教師をしている。

那緒実とは共通の知人の紹介で知り合つたが、最初は悪魔召喚師であることを知らずに付き合ひ始め、知つた時には直ぐ様辞めるように猛反対したものの、彼女の覚悟を知つたことで逆にそれを支える様になる。

保護者や生徒たちからは非常に評判が高いが、それら全ては家庭を蔑ろにして得たものであり、仕事に没頭するが余り2人の子供(特に長男)からは嫌われていることを知りつつも見て見ぬ振りをし続けている。

頑固で我が強過ぎる性格をしているため日頃から同僚との衝突が多く、それで溜まつた鬱憤を晴らすかのように酒に溺れては那緒実不在時に晃祐と匠真(特に平凡な学力の晃祐)に虐待紛ひの暴力を振

るっていた。しかし彼女がはやてを引き取ってきた時にそれを知られ、大目玉を食らってから陰で物に当たる事で解消している。

崇は教師一族・相原家3代目にあたり、その事に高いプライドを持ってることが彼を歪な性格の人間へと変えてしまった。彼が息子達に本当の意味で向きあつ日は来るのだろうか。

14代目葛葉ライドウ

大正時代に帝都を襲った怪異に立ち向かった悪魔召喚師。高等師範学校の書生時代は黒猫（業斗童子）を何時も連れていた事から築土町周辺では有名人であった。

時代が昭和に移ってからは探偵事務所を開いて悪魔召喚師との二足の草鞋をしつつ引き続き悪魔と戦っている。

結婚後に2人の子供を儲けたものの、封魔管と愛刀"赤光葛葉"を残し行方不明となり後に2つの稼業を継いだ次男が15代目ライドウを襲名した。

尚、那緒実は長男の娘に当たる。

第5話 苦悶の口々

“世界を一変させる出来事”から1ヶ月が経過した。

期末試験と春休みを終え、遂に中学3年へと進級したが未だに俺は頭の中で“あの事”について一杯だった。数ヶ月後には中体連があるというのに、ここの所部活の練習に全く力が入らず練習試合でもほとんど勝ち星を挙げる事が出来ないでいる。この事は勉強でも同じで、授業に集中出来ない状態を見かねた担任からは、このままだと1年後に志望校への進学は絶望的だとも言われた。また教師の伝手を使ってその事を聞いた父さんからは、いつも以上に教え子や匠真と比較されて罵倒された。

あの時母さんは、はやての側にいるだけで良い」と言っただけで、そんなんじゃない駄目だ。でも陰で“相原家の穀潰し”と言われる無能で無力な俺に一体何が出来るっていうんだよ……

今日も今日で夕食後、部屋に戻った俺はまた“あの事”について頭を悩ませていた。すると、

「兄さん。ちょっと良い？」

「あ？ああ……」

ドアがノックされ匠真が中に入ってくる。

「最近全然元気が無いみたいだけどどうしたの？」

「……匠真には関係ない事や」

「テストや部活の成績が良くないって父さんが言ってたし、土曜日にはやてちゃんが図書館に行く時もこの所付いて行ってあげてないから心配だっつて母さんが……」

「だから匠真に関係無え事だっつて言っつてんだろ！それならがオメエが付き添ってやりゃあ良い事だろうが!!」

「兄さん……ひょっとして、『闇の書』の事ですつと悩んでる？」

「(!!)なんでそう思うんだよ」

母さんといいコイツといい、どっつてここまで人の思っていることをズバズバ当てて来るんだよ。特に匠真は小学生で普段は呑気なクセに無駄に鋭い所があるし、何より優等生だけあって全てが平々凡々な俺が陰からバカにされる。本当に腹が立つぜ全く。

「兄さんは思っていることが顔に出やすいんだよ。幾らいつも『呑気だ』と言われてる僕でもそれくらい解るよ」

「流石は天才少年、凡人の考えなんざ全部お見通しってか？流石だねえ〜」

俺はいつもの調子で戯けてみせるが、逆に匠真の顔が険しいものになる。

「兄さんは自分自身を見下し過ぎだよ。どっつて僕が兄さんよりも先に『事実』を知ったのにこっつしていると思っつ。」

「知るか」

「僕は身体が弱いし、何よりいつも通りはやてちゃんの側にいてあげれば、それだけであの子が幸せそうな顔をしてくれるからだよ」

「身体なんざヤタガラスで治して貰えば良いだろ。そんで“組織”とやらからはやてを守ってやれば良いじゃねーか。お前みたいな頭脳明晰・容姿端麗な男が悪魔召喚師をやったらさぞかし画になるんだろーな」

「全く、兄さんは父さんと同じだね」

「あ？お前もっ一回言ってみろや!!」

「父さんと同じで変に頑固で責任感が強いんだよ！嫌いなら嫌いであんならない様に気を付ければ良いのに最近ますますそっくりになってきた!!」

「いい加減にしゃがれ畜生!」

俺は匠真の「父親に似てきた」という言葉で怒り心頭に発した。

「兄さんこそいい加減にしてよ……そんなことでウジウジ悩んでないで少しは周りの事も考えて！どれだけ迷惑掛けてると思ってるのさ!!」

「周りの事考えてっからこうして悩んでんじゃねえかクソが!!」

怒りの余り襟首を掴んで殴り飛ばそうとして椅子から立ち上がったその時、突然しゃがみ込んで苦しそうにしまった。感情が昂ったのが災いしたのか発作が起きてしまった様だ。その姿を見た俺は、それまで全身の血液が沸騰していたのが一転して瞬間に凍りついて行くのが解った。

「お、おい！大丈夫か？」

「だ、大丈夫……酷いものじゃないから」

「横になってな、薬取ってくるわ」

急いで匠真の部屋に行くと薬の入った袋を出し台所でコップに水を汲みに行く間、大人気なく怒鳴り散らした事を悔やんだ。俺を怒らせたあいつも悪いが、穏便に済ませようと一切考えなかった自分に一番の責任がある。本当に俺はどうしようもない人間だ。

頭が良くて将来はイケメン確定 性格も良くて友達も多いが、唯一天から与えられなかったのが健康な身体だった。天は二物を与えずとは上手く言ったものだと思う。

「……持ってきたぞ」

「うん」

薬袋とコップを乗せたお盆を、ベッドの横にある本棚の上に置くと身体を起こして薬を口に含み、水と共に飲んでいく。その後落ち着くまで2人の間に言葉は無かった。

「……すまん。大人気なかった」

「いいよ……ただでさえ中学3年になってピリピリしてるのに、あんな事があつたらそれどころじゃ無くなるってのも解るし。でも本当に兄さんは自分自身を見下していると思う。それって絶対良くないよ」

「卑下してる件については触れないでくれ。お前に絶対解る事じゃないからな」

「……そうするよ。それじゃ、部屋に戻るね」

匠真は結局、俺に詳しい事も訊かずに薬袋を持って部屋から出て行った。その後お盆とコップを片付けに台所へ戻り、頭を冷やそうと冷蔵庫の麦茶をガブ飲みする。

あーあ、なんか全てにおいてやる気も情熱も消え失せちまったな……考えるのも面倒臭くなっちゃったから、明日は部活バツクレしてゲーセンか何処かに行くとするかあゝなどと考えていたら徐ろにリビングのドアが開かれ、ゆっくりとはやてが入ってきた。

「兄ちゃん、明日剣道の練習終わって家に帰ってきたら何処にも行かへん?」

「あ? ああ……」

「ほんなら久々に図書館まで付いて来て欲しいんやけど」

「ああ……」

「んで、その後“翠屋”に寄って行きたいんや。27日はタツ君の誕生日やろ? 那緒実さんからバースデーケーキの予約を頼まれてん」

「ああ……」

「……兄ちゃん？私の話ホンマに訊いとるん!？」

「ああ……」

「なんて言ったか言い直してみてや」

「ああ………図書館に行った後、翠屋でケーキの予約をするんだろ?」

「なんや……心配して損したわ。もし聴いてへんかったら“これ”でどついたらと思っと思ったのに」

はやては背中から俺が苦悩する原因となった“闇の書”を出して俺に見せる。こんな分厚い本の背表紙(しかも鎖付き)で殴られた日には病院行き確定だな。

「兄ちゃんがずっと私と“この本”の事で悩んどったなら、それは要らん心配やで。」

いつもの様に優しい顔付きで俺にそう言ってくる……けど、それじゃダメなんだ。でも力も才能も無い俺にどうしろと?

「……ほなダメ元で那緒実さんに『悪魔召喚師になりたい!』って言うてみたらどうなん?」

「……はっ」

再度悩み始めた俺に向かって予想の斜め上に行くセリフを言ってきた。コイツ何考えてやがるんだ!

「私は兄ちゃんとタツ君と3人で色々喋ったり遊びに行ったりするだけで十分やけど、それじゃ兄ちゃんは納得出来なさそうな顔をしようたからなんとなく言ってみただけや。」言っただけタダやでー!」

「お前なあ。それは匠真に言っつてやってくれよ……あいつは身体が弱いのを除けば完璧だろ。あんな将来イケメンになるのが確定している様なヤツこそ悪」兄ちゃんのチキン!」

「兄ちゃんはある日、地下室に行く前になんて私に言っつたか覚えてる?」此処でやらねば男が廢る!」って言っつたんやで。周りを見返すんならそれくらいやらなアカンで」

まさか俺より6歳も下(6月の頭で9歳になるから実質5歳下)の子に説教されるとは思いもしなかった。確かにそうだ。今まで現状から抜けだそうとする格好だけつけて来たけれど、実際は何一つとして行動に移して無かった。始まる前から無理だと諦めていたんだ……

「解った解った。少し考えさせてくれよ」

「ホンマやな? 怖気付いて言わんかったら今度こそ」これ」でどついたりからな!」

「ちょ、それだけは勘弁……っつてもうこんな時間かよ。寝ないと部活に遅れるな。」

「解ったわ。ほな兄ちゃんおやすみな」

「おう。おやすみ」

はやてがりビングから出て行くのを見届けると、麦茶を飲んだグラ

スを洗って部屋に戻り、部活の準備をしてベッドに入る。なんだか心の支えが少し取れかかった気がしてなんとなく眠りにつけそうな気がした。

次回に続く

第6話 図書館へ

「胸おおおおおおおッ!!!」

「そこまで!どうした相原?昨日より少し動きが良くなったぞ!」

「……ふう、そりゃどうも」

はやてに説教されてから一夜明けた。今日は午前中は剣道部の練習があるのだが、学校の体育館が他の部の練習試合で使えないために近くの市民体育館に来ている。あの事があってからというもの練習に身が入らず何もかもがボロボロだったけれど、今日は何故か身体全体の動きが良くなった気がする。

「3年になってから副部长として、ようやくマトモな打ち合いを見せてくれたな。後はこれがどんな状況でも出来るかが中体連までの課題だ。いつまでも“本番に弱い”だなんて言われぬようにしろよ」

「はい!」

久々に顧問の先生からお褒めの言葉をいただく。面と小手を外すと後輩が、

「先輩お疲れ様です!飲み物持ってきたんでどうぞ」

「ありがとうよー」

近付いてきて手に持っていたスポーツドリンクを渡してくれた。すると先生が俺の方を見て、

「よし相原、少し休んだら最後に高倉と部長・副部長対決でもしてもらおうかー!」

「ええ〜流石にソレは無いでしょうよ〜」

「今度の大会は高倉が次鋒でお前を大将にする予定だ。あいつは海鳴あたりでは5本の指に入るくらいの実力なのは誰もが知ってる事、敢えて次鋒に置くことで相手にプレッシャーをかけられる」

「ちょっと待って下さいよ。俺が“本番に弱い”って事知らない訳無いでしょう!」

「中体連までの期間でお前のその弱点を克服させるって事もある。それにお前には地力があるんだ。その力を見込んでの大将だ。相原、解ってくれるな?」

「はあ〜……どうなったって知りませんからね?」

先生と俺がこんな会話をしていると、隣に剣道部部長の“高倉健太郎”が来て声を掛けてきた。

「相原、俺が勝てばお前が当たる事はないんだ。余程のことがない限り大丈夫さー!」

「健さんや……それ思いつきりフラグだって」

「フラグとは押し折るもの!さあやるつか!!」

結果だけ言つと、瞬殺だった。健さんは胴や小手を狙いに行く事が多く、その動きに気を付けていたら面を食らわされてしまった。本当

に面食らって啞然としたよ全く！（因みに面食らうは本当は「麵食らう」と書いて「橡麵棒を食らう」の略なんだぜ!!）

「今日の練習はこれまで！来月頭には大会があるからそれまでに各々の弱点や悪い癖を少しでも克服・修正するように。解散!!」

「気を付け！ありがとうございます!!」

「……ありがとうございます!!」「……」

シャワールームでシャワーを浴びた後、はやてと図書館に行くために直ぐ様帰宅しようとする。すると数人が寄ってきて、

「おい相原！今日暇だったら帰りにゲーセン行かね!？」

「悪い。今日用事があるんだ。」

「また「義妹ちゃん」とどっか行くんだろ？このシスコン野郎!？」

「うるせえわ！弟の誕生日が近いからケーキの予約しに行ったりするんだよ!!」

「はいはい解った解った。せいぜい仲良くなあ〜」

「……」
「……」
「……」

クラスメイトや部活の仲間から、はやてと俺が一緒に図書館や買い物に出掛けている所を度々見られて以降、何故か「シスコン野郎」と呼ばれるようになる。最初はもの凄く嫌で神経質になった時もあったけれど、はやてが車椅子に乗っている事が次第に皆へ知られてくるのと、「嫌味とも取れる励ましの言葉」を掛けて貰うようになった。以

降は話をする時の一種の“お決まり”になっている。

よし、さーて帰りますか！

今日は久々に兄ちゃんとお出かけや。私は時計を何度も見ながら帰りをまだかまだかと待ちわびる。

「……………何時帰ってくるんやろ」

「それもう一回目だよ？」

「じいんとじいずつとウジウジしとって構ってくれへんかったから、ホンマに楽しみなんやもん！」

「そついえばお昼ご飯はどうするの？」

「朝ご飯の残りの豚汁もあるし、ご飯も冷凍してるのがあるはずやから、後はお漬物とか煮物で十分やろ？」

「張り切りすぎて無理はしないようにね？」

「タツ君だって人の事言えへんとちゃう？」

「……………僕は今日は家にいるつもりだから大丈夫だよ」

「ただいまー」

「あつ、兄ちゃんお帰り〜！」

「お帰りなさい。僕が迎えに行くからはやてちゃんはご飯の準備をしてて」

「ほな頼むわ〜」

タツ君がリビングを出て玄関に行くのを見ると、私は台所で鍋に火をかけたつご飯を電子レンジで解凍したりし始める。鍋の中の豚汁をおたまでかき混ぜてると、戻って来たタツ君は解凍できとるご飯とお漬物 煮物を盛ってテーブルに並べてくれる。そうしていると着替えた兄ちゃんが入ってきた。

「昼飯も豚汁とご飯か」

「なんや兄ちゃん。嫌やったなら食べさせへんで？」

「俺が何時嫌だと申したか!？」

「2人とも冷めるから早く食べようよ。いただきますー！」

「いただきますー！」

「いただきます」

昼飯を食い終わると早速出かける準備をする。図書館でははやてが本を探している間、俺は勉強をしていることが多い、勿論高くて届

かない場所にあるものなんかは呼ばれたら取ってあげているけれど、高校受験が近付いている事もあってそっちに集中して気付かない事もこれからは出てくるかもしれない。

「兄ちゃん準備できた？」

「おう、何時でも出られるぜ」

「気を付けてね」

「したっけ行ってくるわー」

「ほな行ってきまーす」

図書館は歩いて3、40分位掛かっていたけれど、最近は低床のバスが増えたこともあってバスを使って行けるようになった。時間に余裕があつたんで1つ隣のバス停まで行くと、そこにはやてくらの年頃の女の子が既にいた。

「あーはやてちゃん。こんにちは」

「おお〜すすかちゃんや〜！こんにちわ〜」

はやてが「すすか」と呼んだ少女は紫色のウェーブがかつた髪で、日本人とは思えない紅い瞳をし、どことなく不思議な雰囲気纏っている。少女は車椅子を押している俺に気付くと、

「初めまして。あなたがはやてちゃんのお義兄さんですね？はやてちゃんから常々お話は聞いています。私は「月村すすか」と言います。どうぞよろしくお願いします」

「「ちら」初めまして！俺は相原晃祐です。はやてが何時もお世話

になつてゐたいでホントすいません」

「あれ〜兄ちゃんとすずかちゃんって初めて会つたんか？そんなはず無いと思つんやけどなあ」

「いやマジで初めてだし。ちょっと待てよ……。月村。てあのMOONLIGHT INDUSTRYの？」

「そつや〜」

「マジか……お前こんなお嬢様と何時の間に仲良くなつたんだよ!？」

「図書館で知り合つたんやでー」

「あの〜二人共？もうバスが来たんですが……」

「やつべいけねえー」

「おおきにー」

すずかちゃんに言われて気付いた俺は、急いで車椅子を押ししてバスに乗り込む。車椅子用の空きスペースに停めるとベルトで固定して一息ついた。

「そやけどすずかちゃんって、いつもめっちゃ凄い車で送り迎えしてもろつてるけど今日はなしてバスなん？」

「今日は私があがまま言つてバスに乗る事にしたんだ〜何時までもノエルやファリンに迷惑かけていけないし」

「んで今日もヴァイオリンの教室なん？」

「うづん。今日はお休みだから図書館に行こうと思って。はやてちゃんも図書館に？」

「そや。それにしても偶然やねえ」

「えっと、すずかちゃん。だっけ？お嬢様にこんな事お願いするだなんてアレだけど、俺来年高考受験があるから勉強しなくちゃいけないんだ。もし良ければ代わりにはやてが取れない高い所にある本を取ってくれると嬉しいんだけど……」

「そんな事気にしないでください。はやてちゃんと図書館で会うと何時もしてあげている事なんで大丈夫ですよ」

「ホントごめんね。よろしく頼みます」

「お任せくださいー」

はやては学校の友達が良く家に遊びに来ているのを見るけれど、図書館の繋がりで別の学校の子とも仲良くなれるのは天性の才能だと思う。しかも私立海鳴聖祥大学付属小学校(略して海聖小)という、俺ら市井の人間にしてみればお坊ちゃま・お嬢様の行く”山の手の学校”の子とだなんて、世の中人間の繋がりにするのは解らない部分も多いなあ。

「次は中央図書館前、中央図書館前です。お降りの方はお知らせください」

「それじゃあ降りましょうか。晁祐さん、お荷物お持ちしますよ？」

「いやいや流石にソレはマズいっしょ！それなら先に行って運転手に待って貰える様に言ってくれろ？」

「ほな、私が持っててあげよか？」

「ちょっと重いかも知れないけど頼むわ」

俺は鞆をはやての膝の上に乗せると、ベルトを外す準備をする。その直後バスが停まるとすずかちゃんはお願ひした通り運転手の所に先に向かい、俺が固定ベルトを外している事を伝えてくれた様だ。ベルトを外し終えると下り口に向かい、はやてが2人分の運賃を払うようになるべく衝撃が少なくなるように注意して車椅子を歩道へ降ろす。最後に振り返って3人で、

「ありがとうございました！」

「ホンマおおきに〜」

「ありがとうございましたー」

ドアを閉める時に運転手が笑みを浮かべ、はやてに向かって手を振ってくれた。やっぱこういうのって良いよな。何時までも忘れないうようにしたい。

俺は図書館の入り口のホールに来ると、車椅子のハンドルをすずかちゃんに託し小声で、

「俺ら4時くらいになったら別の場所に行くからそれまで頼むね」

「解りました」

「すずかちゃん、ほな行こか？」

2人は小声で話をしながら小説コーナーに向かっていった。本棚で姿が見えなくなるとラウンジの読書スペースに出て、ノートと教科書に参考書と筆記用具を取り出す。

「はあく今日はイイ天気だなあ。よっしゃやりますか！まずは英語からだ」

……勉強を始めて10分と経たずに頭を抱え込んでしまったのは此処で言う事ではない。

次回に続く

第7話 翠の道

勉強に没頭していると、マナーモードにしていた携帯のアラームのバイブレーションが作動して、もう4時になったことに気付く。

「あ、いけね。もうこんな時間か」

ラウンジの席から立ち上がって、机の上に広げていた道具一式を鞆に入れると、はやて達を探しに向かおうとするが、カウンターの前で2人が俺の事を待っているのに気付く。

「兄ちゃんニニヤニニヤ」

「ああ、待たせてごめん。ここで立ち話もアレだし出ようか」

3人で外に出ると、心地良い風が吹いている。梅雨前のこの時期は暑すぎもせず寒すぎもせず、ちょうどいい気温と湿度なんで個人的は好きだったり。

「はやてちゃんから翠屋に行くって訊いたんですけど、私もこれから翠屋に行くつもりだったので一緒にいいですか？」

「マジで？全然構わないよ」

「2人ともはよ行くでー！」

俺達3人は翠屋に行くまでの間、互いの家族についての事を話しながら歩いていった。すずかちゃんの家はやっぱり大企業のお嬢さんなだけあって、お付きの使用人がいたり猫をたくさん飼っていたり……と一般人の俺には考えられないような浮世離れた世界に住んでい

る事を思い知らされた。その事を素直な感想として告げると、

「私は晃祐さんやはやてちゃんみたいな生活の方が羨ましいです」

と返され、はやてには

「お互い様なんやって!」

と言われてしまった。なんか納得いかねーなあ……なんて考えていると横を黒塗りの如何にもお金持ちが乗ってそうなお高い車を通り過ぎ、少し離れた所で路肩に停車した。すると、中からはやてやらずかちゃんと同じ位の外国人の少女が降りてきた。その全身から醸し出す雰囲気は、まさしく強気といったものだった。

「すずか! アンタ何ちんたら歩いてんのよ!」

「アリサちゃん!」

すずかちゃんはその子の所に駆け寄って何やら話を始めた。その間に俺ははやてに向かって、

「……はやて。あの子も友達?」

「ううん。でもすずかちゃんが「アリサちゃん」って言っとったって事は、多分「アリサ・バニングス」ちゃんやと思う。私すずかちゃんの友達の話は色々と聞いたから」

「へえ〜。まあ見た感じからしていいとこのお嬢様なのは間違いないよな。」

「お淑やかなすずかちゃんと、強気そうなアリサちゃん……お金持ち

のお嬢様のテンプレやなあ」

「全くだぜ」

「こんな事を言い合ってる内に2人が俺等の所にやってきた。」

「はやてちゃん、友達のアリサちゃんだよ」

「アリサ・バニングスよ。アンタがすずかの言った“車椅子の子”？
すずかが色々世話になってるみたいね」

「八神はやてや！私もすずかちゃんから話は聞いたでー」

アリサちゃんという子は金髪で本当に整った顔立ちをしている。
お嬢様だけあって将来は引く手数多なんだろうな……同い年位なら
一目惚れしてるかも知れん。すずかちゃんも中々可愛いけれど外国
人ってのはポイントが高い。

「……で、こっちの冴えないヤツは誰？」

……前言撤回。なんだコイツ強気を通り越して傲岸不遜じゃねー
か！幾ら平民とはいえこっちは年上だぞゴルァ！！

「あ、アリサちゃん！この人ははやてちゃんのお義兄さんの晃祐さん
だよ……ゴメンなさい！アリサちゃんって結構優しい所もあるんで
すけど、初めて会った人にはキツく当たってしまうみたいで」

「（……兄ちゃん抑えてえな。年下の子にホンマに怒るなんて情けな
いわ）」

はやては俺が青筋立てて拳を震わせているのが解ったのか、小声で

なだめてくる。

「アリサちゃん！初めて会う人にそんな事言っちゃダメでしょ！」

「あたしは本当の事を言っただけよ」

「ア〜リ〜サ〜ちゃん〜ん〜!？」

「う……解ったわよ。謝れば良いんでしょ謝れば。ゴメンね！」

「チツ、わーったよ。俺は相原晃祐だ。よろしく」

彼女が俺に謝ってきた(反省しているようには見えなかったから内心更にイラツと来たのは秘密)んで、こっちは名前を名乗る。ふと車の方から誰かが近付いて来る気配がしたんでそっちに視線を向けると、燕尾服を纏った初老の男性がいた。

「すずか様……と、見慣れない方々ですがご友人の方でございますかな？」

「鮫島さん。車椅子の子は私の友達の八神はやてちゃん、後ろの方ははやてちゃんのお義兄さんの相原晃祐さんです。」

「はじめまして〜」

「……ごも」

「お初にお目に掛かります。私、アリサお嬢様の運転手を命じられている、鮫島と申します。以後お見知りおきを」

「鮫島……こんな所で立ち話もなんだしどうせだから翠屋まで車で送ってあげなさい〜」

「いや良いよ……すずかちゃんだけ先に行ってたら？はやてと俺はゆっくり向かうし」

俺はさっきのお返しとばかりに若干皮肉を込めた口調で言い放つ。
善意はあるんだろうけどなあ。

「兄ちゃん、その言い方はなんや？さっきの『冴えないヤツ』って言われたのまだ怒っとるん？」

……バレてーら

「……ま、アリサちゃんの善意に甘えたいのはやまやまんやけど、見たら解るよーに車椅子やし迷惑かけられへん。そやから私と兄ちゃんは遠慮しとくわ」

「あっ……う、ごめん」

「そんな謝らんくてええよ。全然気にしとらへんし」

はやてが車に乗れないことにやっと気付いたのか、アリサちゃんは困惑の表情を浮かべ俺の時とは反対に本気ですまないと謝ってきた。

「じゃあこのまま皆で歩いていこうよ？」

「……そうね。仕方ないわ！鮫島、時間が来たら電話するからそれまで家に帰ってなさい」

「承りました。皆様、道中お気をつけて」

「ええっ!?それで良いのかよ!少なくともお嬢様なんだから歩くのは色々と問題じゃねーの?」

「何?アンタはあたし達が歩いちゃダメだって言うわけ!」

「あのねえ、少しは自分の立ち位置ってのを考えたらどうなんだよ。それくらいの歳になったら少しは解るはずだろ?」

「晃祐さんのお気持ちも解りますが、私の両親もアリサちゃんのご両親も過保護にならないようにしてくれているんです。世間一般的なお金持ちのイメージには合わないんでしょうけど……理解していただけませんか?」

「こんな事しとったら翠屋閉まってまうで……」

「……はいはい。じゃあ行きますかね」

4人で翠屋に向かっていている間、俺以外の女の子3人は色々な話をして盛り上がっていた。10分程更に歩くと目的の翠屋が見えてきた。入り口の目の前に着くと突然アリサちゃんがドアの前に来て、

「ちょっと待って、あたしがドアを開けてあげるからその間に入りなれよ」

「アリサちゃん?おおきになあ」

「意外だなあ、我先にと入って行きそうな感じだけど。まあありがとな」

「じ、これくらい当然じゃない!あたしを何だと思ってるのよ……」

「ふふふ……アリサちゃんったら照れちゃってえ」

「そか〜アリサちゃんってツンデレさんなんか〜」

「照れてなんか無いわ！それにツンデレって何よ!?入らないなら置いてくんだから!!」

「ゴメンゴメン。ほなよろしくな〜」

アリサちゃんがドアを開けると、俺は車椅子の前輪を上げて中に入る。続けてすずかちゃん、最後にアリサちゃんが入ってドアを閉めた。すると目の前には信じられない光景が……

「桃子さ〜ん！マンゴープリンとタピオカ追加ねー。あ、それからタルトもお願い」

「母さん!!!」

「那緒実さん!!!」

「あら、2人ともどうしたの?」

「どーしたじゃないよ！何で母さんがここにいるんだよ!!!」

「いらっしやいま……ってアリサちゃんとすずかちゃんじゃない！ちょっと待ってね、今なのは呼んでくるから」

俺とはやてが母さんに唾然としてみると、店内にいたメガネを掛けた店員らしき女性がアリサちゃんとすずかちゃんを見て中に入ってしまった。その代わりに店長らしきガタイの良い優しそうな男性が出てきて、

「いらっしやいませ。何か「土郎君」2人に何か出してあげてくれな
い。」

「ん、そうですね。解りましたよ那緒実さん」

この男性が母さんの後輩だって？なんか見た目に似合わず全身からもの凄い貫禄が出てるんだけど……って事は悪魔召喚師関係の人なのか!?

「2人とも中に入って良いって!」

「それじゃあ私達はこれで」

「じゃあね。今度時間があったら遊びに行つてあげる! って別にあたしが遊びに行きたい訳じゃないんだから!!」

「へ……? ほ、ほなな」

「あ……? したっけな」

すずかちゃんとアリサちゃんは店の奥へと消えていった。きっと「なのは」という子がその友達なんだろう……って今はそんな事思つてる場合じゃない!

「母さん! だから何でいるんだよ!」

「そや! 那緒実さん今日は仕事でいないって言つとつたやないか!」

「その仕事が一段落したからいるんじゃない。それに匠真の誕生日も近いしケーキを予約しようと思つてたから」

「おいおい、それは俺とはやてに任せると言つてたたる!」

「あれ? そうだったかしら……」

「いい加減にしてくれよ母さん……」これじゃ意味がないじゃないか」
「そやそや〜」

「うーん。何かこの会話の流れ、どこかで聴いた気がするんだけど……ああー！」

突然スプーンを持ったまま右手を顎に当てて考え出した母さんは何かを思い出し、

「あら？ケーキの件については以前、お話したはずですよミスター。自業自得じゃなくて？」

「ミスターって何だよ！しかも自業自得じゃねーし!!」

「ほんでなんやねんその死亡フラグ的な節回しは!？」

「意味解んねーし……」

母さんの意味不明な言動と、はやての謎のツッコミにまた啞然とさせられる。

「今はお客さんがいないから良いけれど、普段は静かにしてくれんと助かるなあ」

「那緒実さん。追加のマンゴープリンとタピオカ、それとタルトね」

後ろから声を掛けられたんでビックリして後ろを振り向くと、さっきの男性と中に入っていたのとは別の女性が立っていた。い、何時の間……

「2人ともそんな所にいないで早くこっちに来なさいな」

母さんの声に呼ばれてカウンター席に座ろうとする。っとその前に、はやてのために椅子を退けてあげる。

「はい、君達にはチーズケーキとモンブラン。飲み物はカフェオレで良かったかな？」

「……ありがとうございます」

「おおきに」

「まずは自己紹介を。私は翠屋のマスターの“高町士郎”。こっちは妻の“桃子”だ。那緒実さんの学生時代の後輩にあたる」

「初めまして。パティシエしてる“高町桃子”よ」

「俺は相原晃祐です。母がいつもお世話になってます」

「私は八神はやてや」

俺にはチーズケーキを、はやてにはモンブランが出されたので「
□。うん、やっぱり翠屋のチーズケーキは最高だ。はやてを見ると幸せそうな顔をして頬張っている。」

よし、一息入れたから聞きたいことを訊いてみよう。

「で、母さん。この人達とはどういう関係？」

「だからただの後輩よ」

「嘘だ。絶対ただの先輩後輩じゃないね。はやてが店内に入ってきた時、士郎さんの表情が少し変わった気がしたから……それに母さんは大学なんて行ってないはずだ」

俺が言葉を発すると、士郎さんの眉間が動いた。すると何かを察したのか桃子さんは入り口に行って札をひっくり返し、閉店の準備を始めた。その直後、

「これから話す事はどうか内密に頼むよ。美由希！なのは達がこっちに来ないようについてくれ……」

「うん……解った」

「え？え？なんやどうしたんや!？」

場に緊張した空気が流れるとほぼ同時に閉店準備を終えた桃子さんが戻ってきた。

「士郎さん、那緒実さん。いいわよ」

士郎さんはそれまでの優しい眼差しから一変して刃物のような鋭い眼光を放ち、俺達に向かってこっぴど告げた。

「私は表向きこそ、この翠屋のマスターだが裏では那緒実さんと同じヤタガラスに所属している」

次回に続く

第8話 鴉の嘴

「私は表向きこそ、この翠屋のマスターだが裏では那緒実さんと同じヤタガラスに所属している」

「なっ……」

何となく予想はしていたけれど、土郎さんの全身から放たれるオーラに気圧されて何も言えなくなってしまう。

「私がここにいるのは、今月に入ってから突然海鳴市全域で不可解な現象が発生しているから、その調査の打ち合わせのためだったのよ」

「今回の現象は人の力では成し得ない何かの強大な力が加わっているとしたか思えない。そこで那緒実さんが解決のために駆り出されたという訳なんだ。それを引き起こしているのが悪魔であろうがなからうが、人々にとって危険な事には変わらないからね」

確かにここ最近、ニューズでも前日は何とも無かった道路が次の日には突然陥没していたり、学校の近くの神社の木々がなぎ倒されていたりといったニューズは眼にしていた。俺自身も内心、「これは只事じゃないな」となんとなく思っていたけれど、まさかヤタガラスが動く様なヤバい事態だったなんて思いもしてなかった。

「ほな、土郎さんもヤタガラスのメンバーっちゅうことは那緒実さんと同じ悪魔召喚師なん？」

「いや、私は謀報などといった隠密行動で悪魔召喚師のバックアップを行い、必要な場合は戦闘も行う要員の一人だったんだ」

「……だった？」

「士郎君は数年前に悪魔との戦いで重傷を負って第一線から退いたのよ。昔はもう忍者みたいに影分身や水遁の術、土遁の術もこなせる超人だったんだから」

「嘘はいけませんよ嘘は……と、まあ第一線から退く前から桃子は私がヤタガラスの一員だった事は知っていたから、翠屋をヤタガラスの情報交換の場としても利用させて貰っているんだ。正直済まないとは思っているけれど、外からごく自然に見える形で集まるにはこうするしか無かった」

「ヤタガラスってホンマに凄いやなあ……みんなのために命掛けて戦つとるやなんて正義のヒーローやなあ」

「そこ関心する所か!？」

感心するはやてにツッコミを入れつつ、頭の中で色々と考えを巡らせる。何故4月に入ってからその“現象”が起こっているのか、そして何故さつき士郎さんが“美由希”と呼んだ女性に“なのは”という子をつつちに来させない様に言ったのか……気になる点も幾つも出て来る。

「母さん、士郎さん。幾つか質問が有るんだけど良い？」

「良いけど答えられる範囲内ではか答えられないわよ？」

「じゃあ一つ目。母さんが調査しているって言う“現象”って、はや

ての闇の書が原因なのか？」

「あ……」

はやては一瞬困惑の表情を浮かべる。すると母さんと土郎さんはお互いに顔を合わせた後俺達に再度向かって、

「YESかNOかで答えれば、間違いなくNOね」

「本当ですか!？」

「ホンマなん!？」

「根拠としては、闇の書を狙っているのは情報提供者曰く”人間で構成された強大な治安維持力を持つ組織”との事だから、テロリズムの様な無差別攻撃なんて回りくどい事はしないで最初からはやてちゃんを狙ってくるはずよ」

「組織の目的はあくまで闇の書とはやてちゃんの身柄。警察や軍のよくな構成の組織ならば、前もって何らかの通告なりなんなりしてきてもおかしくはないな」

「ほっ……良かったわ」

はやてはそれを聴いて胸を撫で下ろす。俺も気が気でなかったからひとまずは安心した。

「私達は今回の”現象”を暗黒召喚師ダークサマナーが使役する悪魔が起こしたものだと考えてる。暗黒召喚師ってのは簡単に言うと悪の召喚師ってところね。人々を脅かす危険な存在よ」

「晃祐君、はやてちゃん。もしその現場に遭遇したら迷わずに逃げ
るんだ。そして安全を確保したら私か那緒実さんに連絡してくれ」

「……解りました」

「了解したで〜」

まず1つは解決したな。それじゃあ次だ。

「じゃあ次の質問。これは土郎さんへなんですけど、土郎さんと桃子
さんの他にもう一人女性の店員さんがいましたよね？それとなのは
ちゃん……ですっけ？おそらく娘さんだと思っんですけど、店員さん
には聴かれても良くて娘さんにはマズいって事はあの人もヤタガラ
スの一員なんですか？」

土郎さんは俺の質問を聴くと、俺達が翠屋に来た時の様な温和な表
情に戻り、

「ああ、さっき店内に出ていたのは高校に通っている長女の美由希な
んだ。それで君の言っているのはが次女になる。それと今はいな
いが大学生の恭也という息子もいる」

「じゃあなのはちゃんは上の2人と大分歳が離れてるんですね……っ
て母さんの後輩なのに一番上が俺より5つも上とか!!」

「全然親子に見えへんやん!!」

「うふふふふ……やっぱり2人ともビックリするわよね〜」

「アハハ……あまり詳しいことは“家庭の事情”という事で話せない
んだが、恭也と美由希にはそれぞれ高校生になった時に正直に打ち明
けたんだ。それに対してなのははまだ小学3年生になったばかりだ

けど頑固者で視野も狭いし、あの子は何かと良い子振る所があつてね。それが上の2人同様高校生になるまでに改善されれば打ち明けられるけど、万が一今のまま成長したら……と思うと、ね」

「なんか話だけ聴いとると、なのはちゃんってどっかの誰かさんにソックリやなあ〜え？ 兄ちゃん!？」

「おい！ 頑固なのは否定しないけど視野も狭くないし、なにより良い子振っちゃいないだろ!! 俺はどっちかつつーと」放課後に窓ガラス壊して回る」とか、「盗んだバイクで走り出す」タイプだぜ!？」

「晃祐っ！ あなたまさか……そんな子に育てた覚えなんて無いのに……グスッ」

「母さん!? 嘘！ 嘘だつて!! 例えだよ例え、メタファーってヤツ! 目え潤ませてこつち見んなつて!!」

「いや〜はやてちゃんの家は何時も賑やかそうで良いねえ」

「まあウチも色々あるんやけど基本こんなもんやねえ〜」

俺が母さんをなだめると最後の質問をする。

「じゃあ最後の質問。なんでヤタガラスは表立った行動をしないんだろう。今の所ニュースや新聞を見る限りじゃ」現象」で怪我人は出ていないみたいだけれど、いずれは出てもおかしくないし、悪魔が関係しているなら警察や自衛隊じゃ相手にならないでしょ?？」

「そつや、悪魔の存在は隠しとつても、どごーん!と出れば」怪獣退治の専門家」みたいでカツコええやん?？」

「それは無理ね」

「それは無理だね」

母さんと土郎さんは声を揃えて否定する。

「ヤタガラスは奈良時代や平安時代の陰陽師の組織、陰陽寮が派生して出来たものだ。陰陽師は表向き天文や時 曆 占といったものを司る役職だったが、裏では式神や呪術を駆使して魍魎魍魎 即ち悪魔と死闘を繰り広げていたんだ。その後時代が移っていつて陰陽寮は明治時代の始まりの頃に解体され、陰陽師自体公式的には姿を消してしまったというのもあって、今や千年以上秘匿されていた事を表向きには出来ないんだ」

「それに陰陽師ブームってのがあったでしょ？アレのせいでかの有名な安倍晴明の陰陽道の流れを汲む神社に一時期”陰陽道を学びたい”って言う人がけしかけたから、こっちも動きを抑えなくちゃいけなくなっただ変だったんだから」

「つつむ……やっぱり公には出来ないのかあ」

「そんなあゝ絶対ええと思うんやけどなあ」

「陰陽師にしる悪魔召喚師にしる非科学的なモノだから仕方ないのよ」

「現代では”心霊現象は全部プラズマだ！”って言い張る大学教授もいるくらいだから仕方の無い事だよ」

現代科学は人々に豊かな暮らしを与えると同時に、目に見えない存在を信じる心を失わせたんじゃないかと思ってしまった。今時、実は悪魔がいてそいつらを退治する連中がいると公表しても頭がイカれ

てるとしか思われたいし、俺も悪魔をこの目で見なかったら絶対に信じられなかったと思う。

「もう質問は無いかい？」

「すみませんありがとうございます」

質問が終わるのを見計らって桃子さんが店内に戻ってくると、皆で世間話で盛り上がった。すると携帯が鳴りだしたんで取り出してみると匠真から電話だった。俺は邪魔にならないように店の端に移って電話に出る。

「おう、どうした？」

『兄さん！皆が帰ってこないからって父さんが爆発寸前だよ！！』

「チツ……あのクソ親父……わーったよ、翠屋で母さんに会ったから買い物して帰るって言うって……」

『わ、解った！』

電話を切ると皆の元に戻り、母さんとはやてに帰る用意をするように告げた。

「はあ〜全く、あの人は自分で晩御飯ぐらい作れるでしょうに」

「いっつも俺は疲れてるんだ!!やもんねえ」

「晃祐君、実は崇さんとも知り合いなんだけど相変わらず頭が硬いのかい？」

「……ダイヤモンド並みですよ」

「そうか……もし崇さんの事で不満があったら私達が聴いてあげよう。力になってあげられる事もあるかもしれない」

「……すみません」

土郎さんと桃子さんに見送られ俺達3人は翠屋を出て、途中商店街で買い物をして帰宅の途についた。母さんはクソ親父の機嫌直しに晩飯をすき焼きにするといい、はやてもそれを聴いて大喜びしていた。夕焼けに染まる街と、夕焼けに染まる母さんとはやての顔を見てこんな平穏な日々が何時までも続いてくれたら良いと願わざるを得ない。でも、この夕焼けの街が数分後には夜の闇に包まれる様に、それが延々と続く訳がないとも思ってしまう事に嫌気が差す自分もいた。

そしてそれは数日後、現実のものとなってしまうのだった。

次回に続く

第9話 蠢く巨大樹

翠屋での一件から一週間経った。今日は土郎さんが運営しているというサッカークラブ「翠屋FC」の試合があり、母さんと匠真はその後のバーベキューパーティーの手伝いも兼ねて試合を見に行っている。俺とはやては勉強をするために家に残った。

俺が勉強を一段落させると、どうやらはやても終わったみたいで、いつも通り俺の部屋に来てRPGを始めた。俺ははやてがプレイしているシリーズは攻略本がなくても全部クリア出来るくらいやりこんでいるんで、椅子に座りながら色々アドバイスをしている。

「うがーユミ連れてかれてもつた〜！」

「お前もう嫉妬界に入ったのかよ!?結構ペース早いなあ〜レベルと装備は大丈夫か？」

「大丈夫や問題ないで！（キリッ …… ってこっからどないすればええ？」

「まずは街があるからそこを目指そう。1体分召喚できないから気を付けるよ」

「ほな行くでえ！」

はやてはどんどん先に進んでいくけど危なっかしい所は無く、出現した余裕で悪魔を倒していく。途中何回か悪魔会話に失敗して攻撃されていたけれど、この調子なら次の広い貪欲界もどうにかなりそう

「街」ついで〜」

「おう。とりあえず地図を埋めてみようか。ってストップストップ！
そのこの部屋に絶対入るなよ!!」

「なんで〜?」

「嫉妬界のボスを倒してから入ると“夢想正宗”が手に入るから今は
保留だな」

「そんなに強い武器なん?」

「複数回攻撃でSLEEPの効果だから最後まで大活躍するぞ！普通
は剣合体で作らないといけないから面倒臭さを考えるとここで手に
入れたほうが早いしな」

「おお〜！正宗って名前も強そうやし、兄ちゃんそんなん言っなら言
う通りにするわ」

俺はコンポにヘッドホンを繋げ、音楽を聴きながら数日前に本屋で
買ってきた“世界の悪魔図鑑”を読み始める。少し経った後、はやて
はターミナルでデータをセーブしてゲームをやめた事に気付いた。

「どっした?」

「今日はもうええわ〜。それよりさっきから何読んでるん?」

「ああ、「コレだよ」

「“世界の悪魔図鑑”なあ………やっぱり兄ちゃんも悪魔の事とか気にな
るんか?」

「首を突っ込んじゃった以上は見てもめ振りもできないしなあ。それに「お前との約束」も一応守らないといけないしさあ」

「へえ〜兄ちゃんも考えとるんやなあ。あ、ヘッドホン外してええよ。それと私も一緒に見てええ?」

「解ったよ。他に「世界の神図鑑」とか「天使図鑑」もあるから一緒に見よう」

はやてをベッドに座らせた後、ヘッドホンジャックをコンポから抜き3冊の本を持って隣に座る。ちょうど「悪魔図鑑」のケルベロスのページを開いていた所なんで、そこから2人で見始めた。

「ケルベロスって三つ首なんやね〜」

「俺らが地下室で見たのもケルベロスだったみたいけど…」

「アレって首ひとつしか無かったやないか」

「人間と同じで悪魔も同じ種族でたくさんいるのかもしれないな」

「でも首が3つもあると全部性格が違ったら喧嘩しそつやねえ」

「ははは、そいつは違くないな!」

2時間程2人で本を見ていた頃だろうか、突然家が揺れだすと同時に机の上の携帯電話が鳴り出した。はやてを1階の廊下へ出して身を伏せさせると急いで部屋に戻り、携帯を取って再び部屋から離れはやての隣まで移動し身を伏せて電話に出る。

『兄さ……! 兄さん大丈夫!?!』

「どうした!？」

『今何処にいるの？た、大変な事が!!』

「はやてと家にいるけどとにかく落ち着「タツ君どうしたん!？」おい!？」

『はやてちゃん？今外に キヤー!!（ガシャン!!）絶対出たらダメだからね!!』

「おい何があつたんだ？タダの地震にしちゃおかしくないか!？」

「はやて、ちょっとテラスで外を見てくる」

「あ、兄ちゃん!!」

俺は意を決してはやてに携帯を託し揺れが続く中、2階の父さんの書斎に向かいテラスへと出る。すると……

「（!!）なんじゃありゃあ……」

目の前には某“光の巨人”に登場するような、とてつもなく巨大な植物が街一面に根を張り巡らせていた……

試合後のバーベキューパーティーも終わって皆が解散した後、母さんと僕は買い物のために歩いて商店街へ向かっていた。すると突然

地震が起きて巨大な植物が地面を割って出現し、辺り一帯はパニック状態になった。

「か、母さん…何アレ!?!」

「(…………っ!) 匠真いいわね? 絶対にここから動いちゃダメよ」

「母さんどうするの!!」

「私はあの植物みたいな奴を倒してくるわ。その間に晃祐とはやてちゃんが家にいるかどうか電話して頂戴。大丈夫よ、”絶対無敵の悪魔召喚師”と言われた私ですもの、あんなのに負けはしないわ!」

母さんは何やらハンドバッグの中から奇妙な道具を取り出すと、僕の前に置いてスイッチの様な部分に触れて離れた。すると光のドームが辺りを包み込んで割れたガラスの破片や飛んでき看板なんかから僕達を守ってくれた。

「これは…………?」

「結界を発生させる装置みたいなモノよ。大丈夫、瓦礫位なら絶対に壊れないから…………それじゃ行ってくるから。戻ってきたらお母さんにマンゴープリンプレゼントしてね!」

「母さんっ!」

僕に向かってウインクをすると飛んでくる瓦礫を物ともせず、まるで特撮ヒーローの様な身のこなしで躲しながら植物の方へを向かっていった。それを見届けると、恐怖心に負けないように自分を奮い立たせながら兄さんの携帯電話へと電話を掛けた……

「に、兄さんはどうしたの……ッ!?」

『兄ちゃんテラスに外を見てくるって行ってもうた!……って、タッ君大丈夫なん?』

「僕なら母さんの張った”結界”の中にいるから平気だよ。でも母さんが!!」

は、はやてっ、ヤヤヤバイぞ!!ば、化け物植物が街に!!

電話の向こう側で急いで戻ってきた兄さんの大声が聞こえる。

「はやてちゃん!兄さん!それよりも大変なのが母さんがアレに向かっていったんだよ!!」

『な、なんやて(なんだって)!!どうして止めなかったん!?!』

「母さんが”あんなのに負けない”って!」

はやて!俺母さんを止めてくるわ!!

ダメや!ほんな事したら兄ちゃんが危ないで!!

「兄さんダメだよ!母さんを信じようよ!!」

幾ら修羅場を潜り抜けてきた悪魔召喚師だからってあんなの無理に決まってるんだろ!

兄ちゃん落ち着いてえな！行ったとこで何も出来るわけないやないか!!

けどなあ！

「そつだよ邪魔なだけだよ！兄さんが首を突っ込んで2人にもしもの事があったらどうするの!?!」

……畜生!!

兄さんはどうにか諦めてくれたみたいだ。僕ははやてちゃんと二言三言言葉を交わした後、電話を切って空にそびえ立つ巨大植物を眺める。

「……………母さん」

匠真の元を離れて裏通りに入ると、遠距離攻撃用の“おおぐま星の弓”をCOMPから出して召喚する仲魔を品定めする。

(相手は巨大だから、こちらもある程度巨大な仲魔を呼ばないといけないか……でもフドウミョウオウは下手したら辺り一面を焼け野原にしかねないからダメね。)

シュウとアンリ・マンユにソーマがいれば充分ね。

「さあおいでなさい！私の仲魔達!!」

『秘神ソーマ、ここに……』

『ぶうるううあああああつ!!』

『静寂な世界へ……』

「アレを倒したいの！みんなの力を貸して!!」

『応!』

『戦の魔王のじいつりよくうう、とおくうと見せてやるっ』

『イレギュラーの存在、これを禁ず……』

「シユウは突撃で、アンリ・マンユは中遠距離から攻撃 但し二次被害を出さない程度にする事。ソーマは2体のサポートをしながら周囲に被害が拡がらない様をお願いするわね。私はアレのアナライズを試してみる。それじゃあ行きましょっか」

仲魔に作戦を伝えると巨大植物へ振り返って弓に矢をつがえる。
狙いをつけてそれを……放つ!!

(BGM : Battle Naomi)

私の放った矢は光を帯びて7つに分離して全弾が巨大植物の根本に命中すると、それを皮切りにソーマが2人に"タルカジャ"をかけ、それを受けたシユウが一気に突っ込んでいく。そして数メートル移動したアンリ・マンユは背中の触手を伸ばして地面に突き刺す。

『ぶうるううあああああつ!!』

『……貫つたぞ』

行く手を阻まんとする無数の根をシユウが一振りでもった端微塵にした直後、アンリ・マンユの触手が地面から幹に不意打ちを食らわせる。

(!?!?)

強烈な連続攻撃を喰らった巨大植物は2体を敵と認識した様で、根をまるで触手の様につごめかせて攻撃を始めたみたいね。よし、この隙に！

「ソーマ、あとはお願いー！」

『応!!』

COMPに搭載された数種類のアプリケーションを起動して移動を開始した。まず“テビルアナライズ”は当然の事ながら“NO DATA”が表示されたんで、その次の“MAGスキャナー”に切り替えてみると上級悪魔並の膨大な量のMAGが計測されていた。神社の神木とかは比較的MAGの値が高いけれどこんなゲージが振り切れそうな位じゃない。更に“バイオセンサー”及び“サーモグラフィ”を見てみると、

(幹の上の方から生体反応が2つ……これって子どもじゃないの！しかも巨大植物全体から出ているMAGの波長と、2人の内の一方のMAGの波長がほぼ一致する。これはマズいわね)

予想外の事実を知った私は作戦の変更を余儀なくされ、“口寄せの術”で急いで仲魔を呼び戻す。

『主よ、何か不測の事態でも起きたのですか?』

『何の用だ』

『チツ、せっかくう良い感じにい大暴れ出来ると思っていたのによっ』

「あの巨大植物の中に子どもが2人閉じ込められているわ。迂闊に攻

撃すればあの子たちの命に関わってしまう」

『そんなのお、俺らには関係ねえ事だろうがよう』

『シユウよ、それは違うぞ。清浄なる世の構築には未来を担う子の力が必要だ……』

『んだとおううっ!?!』

『お主ら、今は仲魔割れをしている所ではあるまい！して主よこれからどうするのですっ』

「……子どもたちを救う事が先決ね。シユウは今と同じ様に根を切り倒していつて頂戴。アンリ・マンユとソーマは道が開けたら私の指示に従って、子どもがいる辺りまで移動して。移動したらアンリ・マンユは子どもがいる部分の周囲を割り抜くように攻撃、ソーマは割り貫いて助けた子どもたちに結界を張って保護。その後は思いつきりやっちゃっていいわ」

新しい指示を与えて全員が散開しようとしたまさにその時、遙か向こうのビルの屋上に今まで感じたことも無い、何者かの“気”を感じた。

「全員待って！そのまま地上に降りて待機!!」

その言葉を発した瞬間、ビルの屋上から凄まじい光の奔流が放たれ巨大植物を貫いた。“イノセントタック”並のエネルギーを誇るソレは数十秒もの間に渡って放たれ続け、目を開けた時には目の前にそびえ立っていた巨大植物は跡形も無く消え去っていたのだった……

「……ハッ！子どもたちは無事なの!?!」

『ナオミよ……ソーマが無事保護したようだぞ』

「ふう……よ、良かったあ〜」

思わずその場へたり込んでしまう。それにしてもあんな光子砲を放つだなんて一体何を考えてるのかしら。コレは一連の事件に係ありそうね……気を付けないと。

「……もういいわ。全員戻りなさい」

仲魔を回収すると匠真の元に戻る。その途中、何者かがいたと思われるビルの方を振り返って、

（このままだと晃祐とはやてちゃんも近い内に巻き込まれるわね。早く何とかしないと海鳴市全体も今回以上に危なくなる）

私の胸の内に嫌な予感が残ってしまったのだった。

次回に続く

第10話 混乱の後で

巨大植物の一件から更に数日が経過した。海鳴の市街地の一部の機能はほぼ完全に麻痺してしまい、復旧の見通しも立たない様子。メディアは挙って海鳴市に突如出現した謎の巨大植物による被害を連日の様に報道している。

私はあの後、匠真と共に帰宅するとはやてちゃんに泣き付かれ、晃祐には「無茶し過ぎだつて！ 幾ら絶対無敵って言われても、世の中に絶対なんて無えんだよ!!」と怒られてしまった。話を聴くとどうやら3人にも「あの光子砲」は見えていたというのには本当に驚かされた。私の子だから晃祐と匠真に「葛葉の血」が流れているのは当たり前前の事だけれど、修行もせず悪魔や光子砲を見たというのには衝撃を受けたのだった。一方ではやてちゃんは、その身に間違いなく闇の書の影響が及んでいるのだという事も確信が持てたのだった。

「……土郎君、晃祐と匠真は予想以上に葛葉の血を継いでいるみたいなのよ」

「それは喜ぶべき事なのか悲しむべき事なのか複雑な所ですね……心中」察ししますよ」

「私がもし那緒実さんの立場なら、絶対に3人には後を継いで貰いたいとは思いませんね。でも恭也なら無理やり「俺が母さんの後を継ぐ！」とか言つてきそつですけど」

葛葉の里とヤタガラス本部に送る調査書のための実地調査を終えた私は、今後の打ち合わせのために翠屋に来ていた。あんな事があつたもんでこの所街に出ている人の数はごく僅かで、多くの人々が「また同じ事が起こるのではないか」という恐怖心に駆られている事が窺い知れた。そんな中でも翠屋は通常通り営業しているけれど流

石に客の影はなく、あからさまな開店休業状態だということが目に見えて解る。

「……きつと晃祐君も恭也と同じ事を言いそうですね。彼も責任感が強そうですね、はやてちゃんを間近で見ているだけに余計」

「でも晃祐が今のまま悪魔召喚師になると、間違いなく早い内に命を落とす事になるわ。なんでも独りで背負い込もうとする所があるし、いつも強がってるけどそれは精神的に脆いという事の裏返しではない。一方で匠真は晃祐に比べて年齢の割には柔軟な考え方が出来るけれど、身体が弱いからきつと長く保たないわ」

「那緒実さん、彼も来年高校生なんですからちゃんとした判断は出来るでしょうし、もう少し信じてあげましょうよ」

「基本的に2人が決めた事には反対はしないけれど、コレばかりは命が掛かっているから迷うのも仕方ないと思っているのよ。私の大切な子どもだし……」

重い空気が店内全体を覆う中、奥のドアが開けられはやてちゃん位の女の子が出てくる。

「お父さんーお母さんーすずかちゃんの家遊びに行ってくるのー……って那緒実さんこんにちはなのー」

「ああ、なのはちゃん。こんにちは（あの肩のフェレットっぽい動物……）」

「なのは、気を付けて行ってきなさいよ」

「車に注意するんだよ」

「は〜い！行ってきます!!」

なのはちゃんは元気良く出て行った……けれど、私は彼女の肩に乗っていた小動物がただの動物じゃない気がして、それを素直に2人に訊いてみる事にした。

「ねえ2人共、なのはちゃんの肩に乗っていたのってフェレットよね」?

「ああ、“あの子”の事ですね？あのフェレットは今月の初めになのはが怪我をしているのを道端で見付けて拾ってきたんですよ」

「何か“変わってる”と思わない？」

「まさか悪魔召喚師の勘ってヤツですか？確かに何となくそう思うんですけど、悪魔が化けているとかそんなんじゃないと思うんで大丈夫でしょう、きつと」

「アナライズしてみたの？」

「ええ……確かに悪魔とも人間とも違う“波長”が検出されたので、恐らく何者かがフェレットに擬態しているのは間違いないですね。だからといって危険な存在だとすぐに断定するのは良くないと思います。子どもを信じてあげるのも親の使命ですから」

「那緒実さん、なのははだってもう9歳ですもの。言えない事の1つや2つ位あってもおかしくありません。私も土郎さんもヤタガラスの事を話していないのは同じなんですし、何時かお互いの心のわだかまりが解ける日が来るのを待つ以外無いんです」

「解った。そこまで言っならもう私は何も言わない。でも万が一土郎

君でも手に負えない様な事態になりそうだったら連絡して頂戴ね」

「了解しました」

「桃子さんもお願いなね？ 土郎君は何かにつけて無理しようとするんだから」

「それはもう、重々承知してますよ」

なのはちゃんのフェレットの事は一先ず2人に任せよう。幾ら先輩とは言え、無闇矢鱈にしゃしゃり出るのは良くないもの。

「あ、そうだ！ 那緒実さん、今度の土日海鳴温泉で1泊して来ようと思うんですけど、一緒にどうですか？」

「あー……ごめんなさい。土日は珠 瑠に行って知人に会わないといけないの」

「じゃあ代わりに晃祐君と匠真君、それとはやてちゃんはどう？ それも難しいわね」何故です？」

「匠真とはやてちゃんが何時酷い発作を起こすか解らないし、晃祐は部活があるから」

せっかくのお誘いなのに申し訳ないと思う。でもウチは高町家と違って一筋縄でいかないくらい複雑な家庭事情があるから仕方ない。

「桃子、こればかりはどうしようもないよ」

「そうね。ごめんなさい那緒実さん」

「いやいや、じつじつそ本当にごめんなさいね」

その後2時間程翠屋で会話をして自宅へ帰るのだった。恭也君の彼女の事、美由希ちゃんの事、色々なことを2人から聞いた。つくづく高町家は幸せだな、と思う。

「……母さんが“アレ”に向かってから2、30分位経って、急に何処からか“ピンク色のビーム”が飛んできたんだ。そうしたらあつと一瞬間に消えちゃってビックリしたよ」

「ソレって那緒実さんの仲魔が撃ったんやないの？」

「そもそもそんなビームを撃てるのなんて悪魔以外ないだろ」

「それがどうも違うみたいで別の悪魔召喚師の悪魔でも無いらしいよ」
「？」

「ほな一体誰がやったんやろねえ」

「母さんでも解らない何者かの存在、正体不明の謎の巨大植物。それを含めた怪奇現象……本当に何が起きちゃまってるんだよ」

「まさかはやてちゃんの闇の書が」

タツ君が私の手元にある闇の書に目を向ける。幾ら冗談やからってそんなこと言ったら怒るでー！

「何アホな事言つとるんや！那緒実さんも土郎さんも闇の書は関係あらへんって言つとつたでー。」
「レ」でシバき倒したるか!?」
「そつだ匠真、もしそつだつたとしたらこんな回りくどい事なんてしないだろ！」

兄ちゃんが何か庇う事を言つとるみたいやけど、イラツと来とつたから闇の書を持って背表紙でシバき倒そつと振りかぶる。

「じ、ごめん！ちよ、ちよつとやめて！やめてつて死んじやうよ〜」

「タツ君がツ！泣くまでツ！シバくのをツ！やめへんツツ!!」

「おいはやて!?マジで死ぬから勘弁してやれよっ」

私とタツ君の間に兄ちゃんが割つて入つて来よつた時に、思わず振りかぶつた闇の書を振り下ろしてもうた。アカン!!
「アツーーーーー!!!!」

「兄iiiiいさああああああん!!」

ガスッ

「兄ちゃんっ！ホンマあ、ホンマ堪忍してえなあ〜」

「へんじがない ただのしかばねのようだ」

「もータツ君は変な事言わへんの！」

兄ちゃんは頭から煙を上げて倒れとる……エライ事になってもうたわくと、タツ君と2人で狼狽えとると兄ちゃんが徐ろに立ち上がって、

「はあやあてええエ」

兄ちゃんは突然私の両肩を鷲掴みにする。アカン、兄ちゃんにシバかれてまうー！

「お兄ちゃんは感動したぞツ!!」

「えっ?」

「何言ってるのさ!?!」

「はやてが自力で立ち上がれる様になったのに感動したツ!!」

私のせいで兄ちゃんの頭がイカれてもった!

「(ー)はやてちゃんははやてちゃん、闇の書を振りかぶった時の事をよく思い返してみて?」

タツ君に言われて思い出してみる……

「……………あ」

わ、私、自分の力で立ててもうた~~~~~!!

「母さんは『闇の書がはやての身体を侵食している』って言ってたけどそんな事無いだろ?偶然とはいえ、立つことが出来たのははやての

努力の賜物なんだよ」

「漸くスタート地点に“立てた”って事かな？」

「誰が上手い事言えと。って、はやて？」

私、私……

「うえええええん！良かったあ！ホンマ良かったあああああ！！」

「お、お!!」

「ただいま〜、って晃祐!?何はやてちゃんの事泣かしてるのよ!」

「ち、違うつて母さん！コレには深いイ訳がっ」

「兄さんの話を聴いてあげてよ!」

「問答無用!」

「ちよっ、まっ（ズルズルズル）」

「兄いいいさあああああああん!!」

いいぎゃあああああああああああああ!!!

お父さん、お母さん……私やっと立てたで……次は歩けるように頑張るさかい、天国から見とってや!

「……ほな、タツ君。兄ちゃんはどうしたん？」

「……兄さんなら多分、“地獄”に落ちたんじゃないかな」

「???’

次回に続く

第11話 神話覚醒(上)

4月27日早朝 相原家地下室

「…………おいでなさいケルベロス！」

『グルウアアアアアアッ!!』

東の空が仄かに明るくなってきた頃、私は地下室に赴き封魔管のケルベロスを召喚した。

『…………突然オレサマヲ呼び出シテ、一体何ノヨウダ』

「貴方の力が必要になる時が近づいているの。私に力を貸しなさい」

『中身次第ダガ、マア話ダケハ聴イテヤロウ』

ケルベロスに海鳴市が未曾有の危機に晒されている事、日を追って被害が拡大し尚且つ何者かによる罪無き市井の人々を巻き込んだ無差別的な攻撃に発展している事、謎の光子砲が放った第三勢力らしき何者かの存在についての事等を説明した。

そして最後に、私が不在の時に晃祐と匠真、そしてはやてちゃんの3人を代わりに“万が一”の事から守って欲しいということをお願いだ。それにいずれ晃祐か匠真が悪魔召喚師を志す様になった時、最低でも心から信頼出来る仲魔は1体は居た方が良い。かつて悪魔召喚プログラムの駆使して悪魔の軍勢や魔王ルシファーと戦い、ヤタガラスから“伊弉諾の再来”との異名をもって呼ばれた“あの男”の相棒がケルベロスだった様に……

『……フザケルナ！何故オレサマガワザワザガキ共ノ"オ守リ"ヲシ
ナクテハイケナイノダ!!』

「貴方は永い間封魔管に閉じ込められていて凄くストレスが溜まって
いるのでしよう。もし邪悪な悪魔が現れたとしたら大暴れ出来る
チャンスじゃない？」

『ガキノ相手ヲスルノガオレサマノ役目デハナイ！ソレナラ寝テイタ
方ガマダマシダ!!』

「あら、そんな事を言っているのかしら？子ども達はまだ年端も行か
ないけれど、修行も何もしていないのに悪魔が見えたり"何者か"の
光子砲が見えたりしているわ。特に2人の子どもは貴方の主 私
のお祖父様 の曾孫なのよ、将来有望だって思わない？」

『貴様ノガキガドウナロウガ知ツタ事カ、寝ルゾ!』

やれやれ、聞き分けの無い悪魔だ事。咄嗟にアンリ・マンユの封魔
管を取り出してケルベロスの眼前に突き付け、ダメ押しの一言を言い
放つ。

「貴方に拒否権は無いわ……残念ながらね」

ケルベロスを否応無しに従わせた私は、次に晃祐の部屋に忍び込
む。ドアの前まで来て寝ている事を"バイオセンサー"の脳波測定
機能で確認すると、細心の注意払って侵入する。目的は晃祐の鞆だけ
れど、途中で立ち止まって彼の寝顔を見る。

「ん、んう……それ俺のお……」

(ふふっ、もう中学校三年生になったのに寝顔は小さい頃と変わらない。これから貴方は大人になって行くけれど一体どんな道に進むのかしら？でも、例えどれだけの月日が流れても今までと同じ、真正直で思いやりの心に溢れている貴方で居てね……さて、日が完全に昇る前に目的を果たさないと！)

私は寝息を立てている晃祐を横目に、彼が休日に出る際に何時も肩にかけているメッセンジャーバッグのポケットの中に封魔管を忍ばせた。頼むわよケルベロス！

(ジリリリリリリリ)

「ZZZZ……(カシャッ)う、うん、今日もいい日や〜!!」

目覚まし時計が鳴って目が覚めると、私は上半身をおもつきし伸ばしてカーテンを開けた。うーん、今日の私の心みたいに雲ひとつない青空やね〜。そんで今日はタツ君の誕生日！自分の誕生日やあらへんけどめっちゃめっちゃ嬉しいねん!!何時もよりちょっと早く起きた私は、台所で朝ご飯の支度をおった那緒実さんにワガママ言うて兄ちゃんの部屋に連れてってもらって、まだぐっすり寝とる兄ちゃんを起こしに掛かる。

「ゆさゆさ(兄ちゃん！兄ちゃん！もう昼やで!!)」

「ZZZZ」

「兄ちゃん！今日はタツ君の誕生日やる！はよ起きてや〜！（ゆさゆさ）」

「ZZZZ」

身体を揺すっても兄ちゃんはちっとも起きてくれへん。ほなこうなったら！

「（にやにや）……何時まで経っても起きへん悪い子はコレでおしおきや〜」

「ZZZZ……ハッ！何か命の危機が迫った気が」うわわわっ！」「……はやて？」

突然兄ちゃんが目え覚まして身体を起こしよったもんやから、めっちゃビックリしてもうてベッドから落ちそつになってもうたわ!!

「な、なははは……兄ちゃんおはよーさん ほな早う着替えてや！お昼飯冷めてまうで〜」

「お、おう……って、お前が居ると着替えられないんだけどさあ」

「せやけど兄妹なんやから私は気にせえへんって」

「でもなあ〜」

「とにかく着替えてや！私後ろ向いて見いひん様にしとるわー」

「わ、解ったよ」

私がそっぽ向くと兄ちゃんは着替え始めた。ちよつと見てもバチ当たらんやろ?と思つて兄ちゃんの方に振り返るつとすると、

「(「うそ」「うそ」)……おい、何さり気なく見よつとしてるんだよ」

「てへ、バレたか」

「バレたかじゃねえよ!」

兄ちゃんが着替え終わるとおんぶしてもらて茶の間まで連れて行つてもらつ。茶の間に入ると既に崇さんの姿はとっくに無く、タツ君と那緒実さんが椅子に座つて私達を待つておつた。

「兄さん遅いよ!」

「悪い悪い」

「兄ちゃん中々起きてくれへんくてな」

「さあ3人共、早くご飯を食べましよう」

「ほな、いただきます」

「いただきます」

「いただきます!」

「しゅちゅちゅちゅま」

「しゅちゅちゅちゅちゅ」

「しゅちゅちゅちゅま!」

「晃祐、2人の食器を下げたら話があるからちょっと待ってて。匠真とはやてちゃんも」

俺が3人分の食器を下げ終わると、ソファアに座って母さんが話し出すのを待つ。

「晃祐、後で翠屋にケーキを取りに行つて貰うけど今日は3人一緒に行つて貰つわ」

「別に俺1人で行けばいい事だろ？それになんで匠真まで連れて行く必要があるんだよ。せつかくの誕生日なのに楽しみが無くなつちまうじゃないか」

「この間の巨大植物の件といい、何時危険な事が皆に降りかかるか解らないわ。この家だつて例外じゃない。万が一家の中に居て近くのあるのが現れでもして逃げ道が塞がれたらどうするの？それならまだ建物の少ない大きな公園に逃げ込んだ方がまだマシよ」

「兄さんは「ごぞ」といつ時にすぐパニックつて何をしでかすか解らないから、母さんはそれを心配して言つてるんだよ」

「びくびく……」

「一応匠真とはやてちゃんにコレを渡しておくわ」

言い返せなくなつて居る俺を横目に、母さんが2人に見慣れない道具を手渡した。

「那緒実さんコレ何？」

「コレってあの時の……」

「それは“コアシールド”っていう結界を発生させるマジックアイテムよ。飛んでくる瓦礫程度なら完全に防ぐ事が出来るわ」

「母さん俺には？」

「晃祐は3人の中で唯一健康体なんだし、なんて言っただって逃げ足が速いから問題無いでしょ？」

「ええ〜そんなご無体な〜」

俺は1人だけぞんざいな扱いを受けた事に母さんに対して不満の声を上げる。

「その代わり晃祐にはコレを預けておくわ」

「ええっ！スマホ!？」

「それは私が使っているCOMPのスペア。中には悪魔の出現率を感じる“エネミー・アピランス・インジケーター”と、生体反応とそれに関係する様々なモノを調べられる“バイオセンサー”に、空間中のMAGの濃度やMAGから放たれる一種の生命波長を察知する“MAGスキャナー”、そして様々な物体の温度を視覚化する“サーモグラフィ”……といった各種センサー系アプリが内蔵されているわ。それを使って、出来る限り“最悪の事態”を回避するのに務めるのが貴方の役割よ。使い方は普通のスマホと同じだから」

「わ、解った」

「おお〜何かホンマ凄い事になっとなるな〜」

「あと念のために、怪我をした事を考えて“魔石”っていうヤタガラ

スで使用されている特別な傷薬の様な物と、デイスポイズンやデイスパライズといった所謂バッドステータス治療用のアイテム一式も格納しておいたわ」

「それなら安心だな」

「油断は禁物だよ兄さん」

「そうそう、一応竹刀袋に“檜の木剣”を入れておいたから」

「“ぼっけん”って何？」

「木剣ってのは木刀みたいなもんだよ……でも木剣は流石に無いわー。もっとマトモな武器は無いのかよ？」

「ふふふ。タダの木剣だと思ったたら大間違いよ！ヤタガラスの構成員が訓練で使用する物で、ある程度の悪魔なら充分実戦でも使えるシロモノなんだから」

「凄いんだか凄く無えんだか良く解らねえし……ちよつと庭に出て素振りしてみるわ」

俺は竹刀袋から檜の木剣を取り出して実際に持ってみる。とても使い込まれた様子で、初めて持ったはずなのになんだか手に馴染んでいる気がする。ふと、柄頭の所に目をやると“N・S”のイニシャルが刻まれていたんで、気になって母さんに見せてみる。

「母さん、これって「それは私が使ってた物よ」」

「私の急性は白鐘だから、”Naomi Shirrogane”のN・Sね」

「白鐘」ってあの有名な「白鐘直彦」と同じやけど親戚なん？」

「あの人は私の叔父に当たる人で、晃祐と匠真のひいおじいさん
14代目葛葉ライドウこと「白鐘勝之進」の次男。直彦叔父さんつ
て実は15代目ライドウを継いだ人なのよ。詳しくは機会があれば
話してあげる」

「よし、じゃあ振ってみるか！」

庭に出て何時もの部活でやっている様に、檜の木剣を正眼に構えて
面 小手 胸と振ってみた。するとコレが「タダの木剣とは全くの別
物」だという事をすぐに思い知らされた。持った感じは一般的な木
刀と同じでずっしりとしているのに、振ってみるとまるで竹刀を扱っ
ているかの様に軽く振り下ろせてしまった。凄い！コイツあ凄いぜ
!!

その後も30分程軽く摺足や打ち込みをして身体を慣らし、シャ
ワーを浴びて外出の準備をした。

「よし、匠真もはやても準備出来たか？」

「うん」

「バッチグーや！」

「何も無い事を祈ってるけど、気を付けてね」

「ああ！それじゃ行ってきますー！」

「行ってきます」

「行ってきま〜〜す!!」

俺は肩に何時ものメッセンジャーバッグと竹刀袋を下げ、匠真ははやてを乗せた車椅子を押して家から出た。

……今日は本当に天気が良いな。家に帰ってくるまで何事も無かったら良いんだけどなあ。

同時刻 海鳴市高層ビル屋上

「さあ……行こう。アルフ」

「あいよ！シャクだけど仕方ないねえ」

次回に続く

第12話 神話覚醒(中)

4月27日午後4時 喫茶店翠屋

「匠真君誕生日おめでとう。サービスしておいたからね」

「うわあ〜桃子さん、ありがとうございます〜！」

「なになにタツ君?……おお〜!ケーキの詰め合わせやなんてホンマいいんですか〜?」

「匠真君達は特別だからね。他の子には言っちゃダメよ?」

「はい!本当にありがとうございます」

家から出た後、最初にはやてのために図書館と本屋に寄ってから翠屋に着くと、土郎さんから予約していたバスデーケーキを受け取った。その時桃子さんから匠真が何かを貰っていたんではやてと一緒に箱の中を除くと色々な種類のケーキが入っていて驚く。サービスと言っていたけども実際の所はどうなのかなーと思って土郎さんに訊いてみる。

「……で、本当の所ソレも合わせておいくら万円なんすか?」

「人の善意は素直に受け取っておくものだよ晃祐君」

顔は笑っていたけど目が笑ってなかった。かなり怖かったぞ!さすが修羅場を潜り抜けてきた強者は違っぜ〜って、それどころじゃなかった。

「そついや、家から出てくる時に母さんからCOMPとか木剣とか色々渡されたんですけど」

「ふむ、やはりか」

「やはりって何なんです？」

「実は最近、私も恭也と美由希に”出来る限り外出する時は木刀を竹刀袋に入れて持ち歩く様に”と言っているんだが、巨大植物の一件でCOMPを持たなければいざとなった時に対処し切れないだろうと思っていたんだよ。どうやら那緒実さんも同じ事を考えていたみたいだね」

「恭也と美由希は土郎さんから手解きを受けているから、ある程度は自分の身を守ることが出来るだろうけど、問題はなのはよね」

「確かはやてちゃんと同い年でしたよね？万が一何かに遭った時一番大変じゃないですか」

「私らと違って悪魔の事も知らないんやろうし身を守る道具も無いんです？」

「……そついった道具は有ると言えば有るけれど、何も知らないのはに渡すにはちょっと、ね」

幾ら真実を打ち明けていないからって、コアシールド位渡しておくべきじゃないのか？一応、俺は確認のためになのはちゃんが家にいるかどうかを訊いてみる事にした。

「で、なのはちゃんは家に居るんですか？」

「午前中から昼過ぎまで学校で、その後は塾に行っているはずだ。しかし4時前には帰ってくると言っていたはずなんだが」

「何時もなら帰りが遅くなりそうなら電話してくるんだけど……」

……何か嫌な予感がする。

意を決して外に出ようとすると、後ろからはやてに声を掛けられた。

「兄ちゃん！何処行くんや？」

「土郎さん桃子さん。俺ちよつとなのはちゃんを探しに行つてきますんで2人をお願いしますー！」

「あつ、兄さん！……すみませんケーキ預かって貰えますか？せつかく僕のために作つて貰つたんでダメにしたいくないんです」

「私らも付いて行くでー。私アリサちゃんとすずかちゃんの番号知つとるし、2人共習い事に行つてへんかったら探すの手伝つてもらわへん？」

俺は「足手まといだから来るな」と、口から出そうになった所をグツと堪えて2人が来ることを承諾する。COMPの中にコアシールドが入つてない事を思い出して、万が一の事を想定して2人にはなのはちゃんを見つけ次第、結界で身を守つてもらつ事にした。

「……仕方ないな。もし何かあつたらすぐに結界張るんだぞ？」

「そんなの言われんくても解つとるよー！」

「兄さんこそ無茶しないですよ？」

「晃祐君、匠真君の言う通りだ。何か起こって自分達の身の安全を確保したら、すぐ私か那緒実さんに電話する様に。あとこれを持って行きなさい」

「写真？」

「なのはの顔が解らなければ探し様がないでしょ？」

「そうですね……すみません。したっけ探しに行つてきます!!」

午後6時 海鳴市海岸

俺達は翠屋を出てから2時間経つたにも関わらず、未だになのはちゃんを見付けられないでいた。俺1人ならまだしも匠真とはやてが一緒にいる以上、余り手広く探すことが出来ないというのもあるし、小学生だから遠くには行っていないだろうという考えもあって、COMPのマッピング機能を使って翠屋から彼女の通う塾の間のおよそ3km圏内を重点的に探していた。

「ダメだ。ちつとも見付から無え」

「3km圏内ってこんなに広いんやなあ」

「ひょっとして誘拐されたとか……？」

「んなアホな事有るわけないやろ！それよりも帰らへん？6時過ぎてもうたよ」

3km圏内には今俺達のいる海岸が含まれていて、ひよっとしたら海を見に来ているかも知れないという事で来てはみたものの、期待虚しく不発に終わった。

「はやてと匠真は翠屋でケーキを回収したらそのまま家に帰ってくれ。俺はまだ探すからさ」

「父さんと母さんに怒られちゃうから兄さんも一緒に帰ろうよ」

「いいやここまで来たら後には退けないね」

「ほな那緒実さんには電話して」

俺ははやての言葉に従って、携帯を出して母さんに電話を掛けて事情を説明しようとした。その時、COMPから異常を知らせるけたたましい音が鳴り響いた。

「何や？何が起こったや!？」

「EAI（エネミー・アピランス・インジケーター）に反応が出てるぞー！」

「に、兄さん、アレを見てー！」

はやてと匠真の指差した方を見ると、臨海公園の方向に例の巨大植物が出現していた。万が一あそこになのはちゃんがいっだけ大変だぞー！

「2人共さつさと翠屋に行け！」

「兄さんダメだ！危ないよ！！」

「もし臨海公園にいたらどうする!？」

「せやけど私らじゃどうにもならへんよ。取り敢えず那緒実^なに連絡せな」

「例えなのはちゃんじゃなくても目の前に人がいたとしたら助けない訳いかないだろ！」

2人が何か言ったのも聞かず、俺は臨海公園へ全速力で走り出した。誰かを助けるのに理由なんているかよ！それに穀潰しだの何だのと馬鹿にした連中やクソ親父を見返せる！俺が……俺がやるんだ!!

兄さんが臨海公園に向かって走り去った直後、僕ははやてちゃんと相談して母さんに連絡をした。

『……2人共晃祐の後を追って臨海公園に向かいなさい。きっと晃祐は陰口を叩いている人達を見返そうしてるだろうから』

「何をやらかすか解らないと？」

『ええ。私も今からそっちに向かうから晁祐と合流したら抑える様に
言っておきなさい』

「うん…」

『勇敢な行動と無謀な行動は違うわ。くれぐれも気を付けて』

電話を切ると僕達も急いで兄さんの後を追うのだった。

午後6時20分 海鳴臨海公園

俺は臨海公園に辿り着くと、巨大植物から少し離れた防風林と遊歩道を隔てる生垣に身を潜めた。出現した巨大植物は前回のヤツと違って、幹に顔の様なモノがあって枝は腕の様に變形していた。まさにRPGに登場する“人面樹”を彷彿とさせる姿をしている。

周囲を見回し、“バイオセンサー”で生命反応が無いか探ってみる……すると、人面樹のすぐ近くにある柱状のモニュメントの上に黒いレオタードを着てマントを羽織り、手にはRPGの武器 ハルバードの様なポールウエポンを持った金髪の少女が降り立ち、下にはオレンジ色の毛並みの狼らしき動物が現れた。

(アレは……なのはちゃんじゃないな。狼みたいなのヤツは……MAG
スキャナーやデビルアナライズに反応が無いから悪魔じゃないか。
ドギツイ格好して何やるのってんだ)

竹刀袋から檜の木剣を取り出して状況を伺っていると、再び“バイオセンサー”に反応が出たんで目を向けた瞬間、辺りの空気が一変した。何かがここで起ころうとしているのを感じ、一旦深呼吸して心を落ち着かせる。そして再びCOMPに目をやると、匠真とはやてが近付いて来るのが解り、急いで匠真の携帯に電話をする。

『もしもし、兄さん何処に居るの?』

「(馬鹿野郎! 翠屋に行けつつただろ!?)」

『母さんに電話をしたら兄さんと合流しろって』

「(……チツ。お前達のいる所をそのまま真っ直ぐ進むと防風林があるだろ? その生垣の手前にいる。匠真は出来るだけ背を屈めて来い。あと俺を見付けても大きい声は出すなよ? 詳しい事は後で話す)」

『解ったよ』

電話を切つて再び人面樹の方に顔を向けると、フェレットらしき小動物と一緒に俺達が探していた少女が現れた。が、その手には赤い寶石が埋め込まれた“杖”を持ち、身には海聖小の制服とは似て異なる白に青いラインの衣装をまとっていた。

(なのはちゃん、だよな? あの姿は一体……)

なのはちゃんは靴から光の羽を出して跳躍すると、先程の金髪少女が“ハルバード”から金色の光弾を人面樹目掛けて連射した……けれど、バリアを張って防いでしまった。

おいおいマジかよ!? それなんて“魔法少女”だよ! こりゃヤバイ

金髪少女が何やら言葉を口にした次の瞬間、アスファルトを突き破って人面樹の根が2人に襲いかかったけれど、それを空中でいとも容易くかわし続けている。何アレ……ふざけてるの!?

「(ははっ、空を飛ぶとかチートじゃねえか)」

「(ええなあ〜私も空飛びたいなあ〜)」

俺とはやてがその様子を見てみると、匠真が体勢を変えようとした……その時!近くに投げ捨てられていた空き缶に匠真の腕が当たって、生垣からさっきの人面樹の攻撃でガタガタに崩壊した遊歩道へと転がっていった。「コレだけで済めばまだどうにかなったんだけど、

「(?!?) う、う、うわあああっ!!」

突然匠真が大声で叫んだ。何てことしやがる!と思いつつ良く見ると、よりによって匠真の嫌いなムカデ(ムカデやヤステ ゲジゲジみたいな虫が苦手)が生垣にへばり付いていやがった……マズい!!

『ぐ@¥ . j . 2 x お っ!!!』

ヤツはこっちに向かって猛スピードで根を延ばして来るのを直感した俺は、とつさに木剣とはやてを抱きかかえてその場から離れた。

「12、 1、……ね……………」

声を聞いて後ろを振り返ると、腰を抜かしたのか動けなくなった匠真が人面樹の根に囚われて失神したのが見えた。畜生ッ!!

「う、う、うわあああっ!!」

私とフェイトちゃんがジュエルシードで変化した魔物の攻撃をかわしていると、突然生垣の向こうから男の子の悲鳴が聞こえてきたの。すると魔物は根を凄く速さで延ばして行ってその子をつまみちやっただ!

「ゆ、ユーノ君! 結界の中に男の子が~~~~!!」

「なのは落ち着いて! ジュエルシードの事は後回しで良いから、先に魔物に捕まったあの子を助けよう。砲撃は使えないからまずは相手の隙を作るんだ!」

「解ったの!」……「ディバインツ! シューター!」

魔物のバリアに防がれるのを承知でレイジングハートから光弾を連射するの! 撃つべし! 撃つべし! 撃つべしなの~~~~!!

「(!!) なのはッ! 危ないッ!」

「へ? ……うわわわわっ!」

ユーノ君の念話につられて後ろを向いたら、フェイトちゃんのアーケセイバーがこっちに飛んできてビックリしちゃった! でもここで避けたらあの子に当たっちゃうから防御するしか!!

『 Protection 』

「……………何をするの」

「それはこっちのセリフなの！捕まった男の子を助けるのが先だよ」

「私はジュエルシールドを手に入れられれば他はどつなつても……………知らない」

フェイトちゃんのわからずや！もう許せないの!!

「うづおるめああアアアア!!!!」

「(?!?)」

『 じえ c + % z w i = - ! 』

「ぐはあっ!!」

誰かの叫び声がしたと思ったら、魔物の後ろから木刀を持った中学生位の男の人が飛び出して殴りかかったの!……………私達はその行動に驚いて動けないでいると、魔物がその人を根っこで吹っ飛ばし、生垣に叩き付けられた……………だ、大丈夫、なのかな??

「チツ……………つざけんじゃねえぞオラ!!」

男の人は立ち上がると、何時の間にか左手に小さな管を持っていて、それを魔物とフェイトちゃんの方に向けて公園全体に聞こえそうな声で絶叫した。

「俺に力を貸しやがれええええええええええつ!!!!」

次の瞬間、緑色の光が管から放たれるとその眩しさに私は目をつぶった。すると爆発音がして光が収まり、目を開くと……

『グルルアアオオオオオオオオン!!』

「お、お前はあの時の!」

『マタ会ツタナ坊主。オマエノカーチャンノ命令ダ、手助けシテヤロウ』

……白くてアルフよりも大きい、ライオンの様な“もの”がそこにはいたの。

次回に続く

第13話 神話覚醒(下)

匠真が人面樹に捕まったのを見た俺は、はやてを抱いて比較的安全(だと思っている)な場所に連れて行く途中、金髪少女が「八つ裂き光輪」みたいなのを飛ばし、なのはちゃんがそれをバリアで防いだのを横目にした。

「はやて、俺にもしものことがあったら母さんを呼んでくれ」

「……タツ君助けに行くん？」

どうにか人面樹にバレないように程近い公衆トイレの裏に逃げ込み、はやてを草むらに下ろすと匠真を助けに行く事を告げる。

「ああ、助けるのは兄貴の役目だろ」

「(なのはちゃんと金髪の子に助けて貰う事出来へんの?)」

「いや、金髪の子は匠真の事なんて最初から考えてない動きをしている。このままだと今以上にヤバい。それに、何時までも「穀潰し」だなんて誰にも言わせない!」

また来た道を元へ戻ろうとして立ち止まり、はやての元に戻ってメッセンジャーバッグを渡そうとするとサイドポケットに何かが入っているのが目に入った。

「(兄ちゃんそれって……)」

「(ああ、封魔管だな。母さん、最初からこうなるんじゃないかって解って……)」

「(せやけど召喚出来るか解らんやろ?)」

「(やってみなくちゃ解らないさ。もし俺にその才能が無かったら、その時はその時"だ……じゃ、行ってくる)"」

「(兄ちゃん!無事にタツ君連れて帰って来いへんかったら許さへんで!!)」

「(そうなる様に祈っててくれ!)」

再び生垣まで戻ると、今度は人面樹の真後ろ辺りに隠れる。これから"やるうとしている事"を考えると、胃がキリキリ痛むと同時に激しい動悸を感じて動けなくなってしまう位だけど 今はそんなことで立ち止まってる場合じゃない。

(覚悟……完了!)

なのはちゃんと金髪少女に人面樹が気取られた隙に、俺は奇声と共に生垣から飛び出した!!

「どおおおうううおるああアアアアア!!!」

『じえ c + % Z W い = -!』

「ぐはあっ!!」

人面樹の背後に一撃を加えると、不思議な事に木剣の切っ先が相手の身体（幹）に食い込んだのが目と手の感触で解った。しかし次の瞬間には一本の根が俺の身体を叩き付けて飛び出した辺りの生垣まで吹っ飛ばされる……

オエツツツ!!……絶っ……対え、アバラー本ヤラれたっ……でも、まだ!!

激痛に気を失いそうになりながらも、ジーンズの左ポケットに入れておいた封魔管を左手で持つ。すると管の“栓”と“本体”の僅かな隙間が仄かに緑色に光り出した。

天はまだ、俺を見離しちやいなかった

14代目ライドウの血を受け継いでいる事に感謝し、ニヤツつとほくそ笑むとゆっくり立ち上がってこう叫んだ。

「俺は、ただ匠真を救けたいんだ……俺に力を貸しやがれええええええええええっ!!!!」

封魔管の“栓”が捻れながら迫り出すと同時に、幾つもの緑色の光が目の中の地面に放たれ爆発した。あまりの眩さに腕で目を覆い、光が収まると腕を下げる。そこには……

『グルルアアオオオオオオオオ!!』

「(!!)お、お前はあの時の!」

『マタ会ッタナ坊主。オマエノカーチャンノ命令ダ、手助けシテヤロウ』

地下室で俺とはやてが遭遇した、あの“ケルベロス”が出現した。一瞬呆然としそうになったけど、気を取り直してケルベロスに言う。

「弟を助けたいんだ!力を貸してくれっ!!」

『グルル……難シイガ、マア任セロ!』

こうして俺の、人生初の悪魔召喚を果たすと同時に、人生初の命を賭けた“本当の戦い”の幕が切って落とされた

「ちょっとフェイトっ!此処にも使い魔を使役するヤツがいたってのかい!!」

「……あれは多分、アルフみたいな使い魔じゃないと思う。」

男性が左手の“何か”から光を放つと白い魔物が現れた。その魔物はアルフよりも一回りも二回りも大きく、首周りにたてがみを生やして一見ライオンの様に見えるけれど、顔の形状や鼻先までの長

さをよく見るとアルフと同じ狼である事が解る。

「俺はお前の事知らないからアイツを倒すのは任せるからな！」

『アオオオーン！オレサマオマエマルカジリ!!』

魔物が「白い狼」目掛けて根を叩きつけようとする、それを軽くあしらう様に前脚の爪で薙ぎ払った。すると根は文字通り八つ裂きになって千切れ飛んで行ってしまった。魔物は更に根を何本も延ばして襲い掛かるうとするけど、全てそれをかわされて胴体部分に噛み付かれてしまう。

『お&#;%@*っい
!?!?!?』

『グハア！……ウルルル……マルカジリハ……不味イ』

私がそれに見蕩れていると、アルフが念話で話し掛けて来た。

「フェイト……フェイト！何ポーっとしてんだい!!このままじゃジュエルシードまでヤラれちまいそうなな感じだよ!？」

「(ポー……ハッ!!)ごめんアルフ。とにかく私達も「フェイトちゃん」」

気付くと後ろに「あの子」が来ていた。私はバルディッシュを構えて威嚇しようとする。

「……一体何の用」

「あの人はきつと男の子の家族 多分お兄さんなんだと思うの。お兄さんとあの「大きいライオン」が男の子を助けるまで攻撃しな

いであげようよ　フェイトちゃんだって、もしアルフがあんな風になってるのに攻撃されたら嫌でしょ？」

また魔物の方を向いて、今度は男の人を見る。男の人は白い狼が作った隙を突くようにして、時折バリアに弾かれ吹き飛ばされながらも必死に木刀を振るい続けていた。動きは拙いしリンカーコアも感じられないから魔導師じゃなくて、この世界のごく一般的な地元住民なんだろう。

「アルフ……良い？」

「仕方ないねえ……シャクだけどその子の言う通りだ」

家族、か。……………母さん。

ケルベロスは人面樹の根をなぎ払い、俺が木剣で一撃を加える。たまに連携が乱れてバリアに吹っ飛ばされてアスファルトに叩き付けられるけど、その度に痛みはCOMPに格納している“魔石”を使って取り除く。隙を見てデビルアナライズでケルベロスのデータを確認すると、地獄の番犬らしく“ファイアブレス”を吐けるみたいなんだが、それはヤツが匠真を放してからじゃないと危ない。

「…んのやるおおお!!」

『ゲルアアアッ!!』

まさに一進一退の攻防。もし俺が母さんみたいに手慣れしている
のであれば、こんなヤツ苦労しないですぐにブツ倒せるんだろっけ
ど、生憎剣道の試合しか知らない俺じゃ無理だ。そんな中で唯一の救
いは、空中に浮いている2人とオレンジ色の狼が手出しして来ない事
か……後でお菓子でもあげないとない！

『危ナイゾ坊主！』

「(??)ぶっへええええつつ!!!」

俺の脇腹に根がクリーンヒットして一瞬意識が途切れる。でも直
ぐ様続いて来る激痛で再び意識が戻って立ち上がるうとすると、ケル
ベロスが俺に向かって叫んできた。

『“宝玉”八無イノカ!?有ツタラ今スグニ使工!!』

「お……おっ……」

覚束ない状態でCOMPを操作し、宝玉を右手に出現させると近く
にある石で叩いて割る。すると光が俺のズタボロになった身体を包
み込んだ。

(お?なんだか身体が軽くなった気がするぞ!)

光が消えると身体の傷も脇腹の激痛も嘘みたいに綺麗サツパリ消
えていた……コイツぁ……コイツぁ凄えぜ!!

『ぽろぽろ@#\$いいいい?!?!?』

へへッ……まさかの事態に人面樹も驚いて動きが止まってやがる
!今がチャンスだ!!

「行っけええええッ!!」

『八ツ裂キダ!!』

ケルベロスが跳躍して左前脚で匠真を捕らえていた根を切り裂くと、そのままヤツの胴体目掛けて右前脚を繰り出す!!

『p.j9ぶ6 !!!』

「どりゃあああああッッッ!!」

人面樹から開放されて真つ逆さまに落ちてきた匠真を俺は猛ダツシユで受け止めたがあまりの勢いにそのまますっ転んで生垣の中に突入してしまった。匠真を近くの樹によしかからせると急いで人面樹の状態を見る ヤツはケルベロスの鋭い爪にやられて悶絶している様で、今がトドメを刺す好機以外の何物でもない!

『今ダ坊主!』

「行っくぜええええ!」

生垣から再び人面樹の前に躍り出た俺は、両手に木剣を握り締めて駆け出す。来年高校に進学しても剣道が続けて行くつもりで秘密裏に練習していた一撃を放つ時が来た 狙うはケルベロスが傷を付けた部分唯一つだ!根の上方向に曲がって盛り上がった部分を駆け上り、一気に跳躍して溜めていた両腕を一気に前へ突き出す!!

「突きいいいいいい!!」

『 r × * ¥ d q う お @ ! ? ! ? 』

決まった!! そう思った瞬間、人面樹が胴体を激しく揺らしてまたしても吹っ飛ばされる……けど、ケルベロスが自分の身体を使って落ちるのを防いでくれた。それが最期の抵抗だったのか、最早ヤツに動く力は残っていないようだ。ふと、木剣を突き刺して崩れた部分を見ると、菱型の“宝石の様なモノ”が見える。アレが心臓部だったのか? …… まあいい。俺はケルベロスにファイアブレスを吐いて貰おうと、

「ありがとなー! よっしゃ、チリーっ残さずに焼き払っま、待ってください!!」 …… あゝん!」

何処からか声が聞こえたんでそっちの方を見るとイタチの様な小動物がいた。

『あの“宝珠”こそ公園の樹を魔物に変えた“原因”です! アレをどうにか出来るのは“あの2人”だけなんで、後は任せて貰っていいですか! ?』

「(コイツもしかべった!) …… 解ったよ。俺の目的は果たせたから後は任せるわ」

『はいーありがとございませす!!』

人語を話す“イタチ”は空中の2人に顔を向けると、なのはちゃんが大きく頷いた。すると2人の得物が変形し、

「ジュエルシード・シリアル　！封印っ!!」
「……ジュエルシード・シリアル、封印」

2人がそう言うのと人面樹が凄まじい光を放ちながら消滅し、宙に浮く“宝珠”だけが残された。

「なあイタチさんよ。コイツあ何なんだ？」

『……ごめんなさい。とんでもない危険物だという事しかお教え出来ません。』

「そっか……」

俺はそのまま地面に座り込んだ。ケルベロスにも宝珠が危ないのが解るのか、唸り声を出して警戒している。ふと、宝珠を挟んだ対面になのはちゃんが降り立ったのが目に入ってきた。

「君は高町なのはちゃん、だよな？俺は相原晃祐ってんだ」

「あっ……あの～。なのはの事知ってるんですか？」

「俺の母さんと君のお父さんが先輩後輩の仲でさ、俺やあそこで失神してる弟や義妹も良く翠屋にはお世話になってる」

「そうなんですか！って、よりによってなんでこんな危ない所に!？」

「ああ、今日は弟の誕生日でな。翠屋にケーキを取りに行ったっけ土郎さんと桃子さんが、”なのはちゃんが帰って来ない”って言うもんだから代わりに探していたのさ。したっけこの有様だ」

ふと背中に殺気を感じて振り向くと、得物を俺に向けて構える金髪

少女と狼がいた。それを見たケルベロスは俺の前に来て、今度はそいつ等に唸り声を上げる。

「あなたは一体……」

「つと、悪い。弟と義妹を連れてこないと」

『質問に答えな！タダじゃ済まないよ!!』

『……オマエラヲ、先ニ八行力セン!』

俺は何やら騒いでいる“狼”を尻目に匠真の所へ向かって行き、魔石を使って回復させる。その後、身体を何度か揺さぶるけど意識が戻る気配が無いので、先にはやての所に向かう事にした。おっと……その前に、

「俺には関係無い事なんだろう？それなら俺の事だって君等には関係無い事さ。君等の使う力の事もパンピーの俺が知った所で意味無いだろうしな。ただ……」

「ただ……?」

俺は金髪少女と狼の前で立ち止まり睨みつけて言い放つ、

「もし此处でこの“宝珠”を取り合うために喧嘩でもして周りに被害を出してみる　お前等二度と“泣いたり笑ったり出来なくしてやる”」

『アオオオオン!!』

彼女達がケルベロスの殺気全開の遠吠えにたじろぐと、俺はケルベ

ロスと一緒ににはやての元へと向かって行く……っと、忘れる所だった！

「あ、そうそう！先に義妹連れて来るから良い子にしてなよ！後でお菓子あげちゃうぜ！」

晃祐さんと“大っきいライオン”が何処かに向かって行くと、私とフェイトちゃん、ユーノ君、アルフの2人と2匹(?)が残される。

「え〜っと」

「えっと……」

私がフェイトちゃんに声を掛けようとしたら、偶然フェイトちゃんと声が重なっちゃった！

「先に良いよ？」

「あ、ありがと……ねえ、どうしよっか？」

『アイツ一体何考えてんだろっねえ〜。アタシ等の事睨みつけたと思ったら、走って行く時は笑って“お菓子あげちゃう！”とか……バカじゃないの？』

『取り敢えずあの人が弟さんと妹さんを連れて帰るまでは何も出来ないね』

「それがいいと思う……」

私達はジュエルシードの方を向いて、無言で眺める……そういえば何か大事なことを忘れてる気がするの。私は少し考えていて、ふとユーノ君を見た時に思い出した。

「そついえばユーノ君！結果はどうするの!？」

『あ……』

俺がトイレの影から這い出しているはやてと会った時、はやては安堵の表情を浮かべて迎えてくれた。一瞬同行していたケルベロスを見て表情をこわばらせたけど、敵意が無いと解るとたてがみでモフモフし、その後俺がケルベロスの背に乗せるといたく気に入ったのか、

「うーん！ケロちゃんの毛って硬そうに見えるけど、めっちゃモフモフで乗り心地も抜群や〜〜」

と、ご満悦顔だった。しかしケロちゃんっておい……

そして俺達3人は次に匠真を拾いに行く。しかし、人面樹のいた広場のすぐ近くまで戻って来ると、突然EAIとバイオセンサーに強烈な反応があり、警戒して生垣から広場を覗くと、

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ！大人しくジュエルシードを渡して貰おうか!!」

敵ついロンググートを着た、
「黒髪の坊主」が2人に武器を向けて
いたのだった。

次回に続く

第14話 時を統べる者(前)

「 時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ！大人しくジュエルシートを渡して貰おうか!!」

おい何だよあの坊主！人があの2人にアメのアソートパックをあげたらせつかくの機会だし、はやてと匠真を紹介しようと思ったのによ!!何なの？バカなの!?

「(うわあ〜兄ちゃんと違って頭良さそうな子やなあ〜)」

「(おいはやて！なんか聞き捨てならねえ事言った気いするなあ?)」

「(な、な、なんでもあらへんよ?)」

『(………気ヲ付ケロ。アノ坊主、アア見エテ只者デハ無イゾ)』

俺はケルベロスからはやてを降ろして、何時でも飛び出せる状態にする。何処の馬の骨だか解らねえヤツがしゃしゃり出て来やがって

……

「 まずは事情を説明して貰おうか?」

「フェイトオオオツ!!」

「フェイトちゃん!」

私はジュエルシートにあと少しの所で、執務官の放った魔法の直撃を受けて吹き飛ばされた………どうにかアルフが私の身体を受け止めてくれたみたいだ。目を微かに開けると視界がぼんやりと霞んでよく見えない。でも、執務官はデバイスを私に向けて魔法を放とうとしているのだけは解る。私達、もうダメなのかな………

(ん……うっん……僕は……気を失ってたのか)

確か人面樹に捕まったのは覚えているんだけど………あの後一体どうなっただろう? 身体を起こすと、足元に見慣れない石が砕けていた。

(これって母さんの言っていた魔石かな? だとしたら兄さんが……ハッ! 兄さんとはやてちゃんは!?)

中腰の姿勢で生垣から広場を覗こうとすると、直ぐ目の前でオレンジ色の狼が吹き飛ばされた"金髪の女の子"を身体を使って受け止めるのが見えた。彼女は相当強く身体を打ったのか、目を微かに動かしただけで殆ど身動きが取れないみたいだ。1メートル程移動して様子を伺うと、黒髪の杖の様な武器を持った男の子が彼女目掛けて今にもビームを撃とうとしているのが解った。

(あの女の子が危ない!)

僕は急いで女の子の前まで走って行った時　自分の身体がビームに打ち抜かれ、目の前が真っ白になるのが解った

(昏……「じゅんなせい……」)

「なっ!?非殺傷設定にしているはずな『グルルアアッ!!』　う、うわああああっ!」

今まで気を失っていた晃祐さんの弟さんがフェイトちゃんの前走りだして、クロノ君の魔法に撃たれちゃった……私は急いで撃たれた子に駆け寄ると、口とお腹から血が出て……しかもクロノ君は晃祐さんが呼び出した「白いライオン」襲われてるの!すると横に誰かが来たからまた振り向くと晃祐さんが居て、身体を抱きかかえると弟さんの名前を必死に呼び掛ける。

「匠真っ!しっかり、しっかりしろっ!!今魔石を使ってやるからなっ!」

晃祐さんはスマートフォンみたいな機械を操作すると左手に不思議な石が現れて、それを匠真君の上で両手で割るとお腹の傷が光りだしたの……傷薬みたいな石なのかな?でも、全然傷が治ってなくて、このままじゃ匠真君が死んじゃうよ!

「……………けんな」

「へ？」

晃祐さんが何かを言つと匠真君を横にして立ち上がり、

「なんて事しやがったんだテメエ……覚悟は出来てんだろつなあ!？」

「ぼ、僕は悪くな……いつ！そいつが勝手に出て来て撃たれ「黙れつ
!!」

晃祐さんはクロノ君を……ダメ！そんな事しちゃ絶対ダメなの!!

「止めてええっ！殺さないでっ！そんな事したら晃祐さんがっ!!」

「!!……ごめん……ケルベロス！」

『グルルル……運が良カッタナ』

晃祐さんが「白いライオン」ケルベロスの名前を呼ぶと、ケルベロスは素直にクロノ君から離れていく。ほっ……良かった！つて全然良くないのっ！匠真君の傷をどうにかしないと!!

「おい坊主 クロノつつたな？お前の力で匠真を治せないか!？」

「すまない。こついつた事は専門外なんだ」

「お前見た目からして黒魔導師っぽいもんな……まあいいや、この石は「魔石」っていう傷を癒す力がある石なんだけど、お前に何個か渡すから俺と同時に使ってくれ」

「……解つた。此処は君に従おう」

「 大変だよなのは! 」

晃祐さんとクロノ君が魔石を使って応急処置を行っていると、ユーノ君から念話が来て私はそれに応える。

「 どうしたのユーノ君? 」

「 結界を張ったはずなのに女の人が入って来た! 」

「 えええええっ! そ、そんな事って出来るの! 」

「 しかもリンカーコアが感じられないから魔導師じゃないみたいだ! 」

「 うっうっ…… 私達の事見られたらどうするの~~~~~!! 」

私が頭を抱えたのと同時に晃祐さんの携帯電話が鳴り出した。

「 あっ、もしも母さんっ? …… 臨海公園に来たって!? とにかく匠真が大変なんだ! 早く来てくれ!! 」

母さんから電話が来たんで何かと出ると、どうやら前もって匠真が電話をしていたらしく、臨海公園の入口付近まで来たという事だった。コレ幸いと思った俺は母さんを俺達がいる所まで電話で誘導するついでに途中ではやてを拾って来て欲しいという事も頼んだ。

そして数分後、

「匠真！どうしてこんな……」

「タツ君……タツ君!!」

母さんが車椅子に乗せたはやてと来ると、二人も匠真に声を掛ける。

「ふええええっ!? 那緒実さんが晃祐さんと匠真君のお母さんだったなんて……」

「……あらなのはちゃん!? ってそれは置いといて……どうしてこんな事に」

クロノが申し訳無さそうな顔をして母さんに近寄る。

「……僕が彼を撃ちました」

「あんたがっ！あんたがタツ君を！」よせ、はやて！「せやけどっ!!」

俺はクロノの言葉を聴いて涙を流しながら食って掛かるはやてをなだめる。

「あなたは……」

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンです。本当に「そこから先は後で聴くわ」……はい」

母さんはCOMPを操作して、宝玉とも違う宝珠を手に出現させた。

「母さん、これは？」

「コレがあのかの“地返し”の玉よ。瀕死の人間を蘇生させる力があるの。ただ蘇生させると言っても重傷の状態には変わらないからコレを使ったら直ぐ魔石を使わないと……あと晁祐、彼処で茫然自失としている狼さんにコレを」

「なっ……何時の間にジュエルシードを!!」

「ええええええっっ!!」

母さんがポケットに手をつ突っ込んで出した物は、さっきまでそこで浮かんでいたはずの“超危険物”の宝珠だった。なのはちゃんもクロノもそりゃ驚くわ……流石チート

「コレ触って大丈夫なのか？」

「大丈夫よ、多分ね。匠真の事は私達に任せて早く持って行ってあげなさい」

「多分って……解ったよ」

俺はクロノが“ジュエルシード”と呼んだその宝珠を恐る恐る受け取ると、急いで狼の元に行く。すると丁度その背中で気を失っていた金髪少女が目を覚ました所だったみたいだった。

「ほら。君はコレが欲しかったんだろ？」

「どうしてそれを……？」

『アンタ、何とも無いのかい?』

「俺の母さん、ぶっちゃけ言つとチートなんだよね。だから何をやっても不思議じゃないと言つか……あと約束通りお菓子もあげるよ」

俺は金髪少女にジュエルシードと、母さんから受け取っていたメツセンジャーバッグの中から、アメのアソートパックを取り出して渡した。

「あ、ありがとう」

「さあ、もう行きな。あの執務官だからって坊主は母さんが近くにいるから、もう君等に対して何も出来ないだろうっしな」

『「」の恩は忘れないよー』

狼がそう言つと、金髪少女を乗せたまま猛スピードで走り去って行った。さて、向こうはどうなったかな……

ハッキリ言つて何もかもが想定外だった……

非殺傷設定でスティンガーレイを放ったにも関わらず、フェイト・テストアロツサの前に走ってきた見知らぬ少年の身体を貫いて瀕死にさせてしまった事。

使い魔を使役する人間がこの管理外世界にも存在したという事。

2人の母親らしき女性がジュエルシードをいつの間にか回収していた事。

そのジュエルシールドをフェイト・テスタロッサに渡してしまつた事。

今日の前で起こっている「瀕死の少年が息を吹き返した」事。

「この世界は魔法やそれに関する技術の無い」遅れた世界」だと聴いていたけれど、僕達は「その認識」を改めないといけないのかもしれない。今手に持っている「魔石」もそうだ。人の傷を癒す事の出来る鉱石なんて、ミッドでは聴いた事も見た事も無い。

「皆ありがとう。傷も塞がったしコレでもう心配要らないでしょう」

「ふにやああああ。よ、良かったの~~~~~」

「え、えぐっ……ひっく……流石那緒実さんやわ〜!」

「さて……クロノ君と言ったわね? 時空管理局という組織の一員という事は、何処かに貴方の上司がいるのでは無くて?」

それを言われてアースラの事を思い出す イレギュラーな事態が続き過ぎてすっかり忘れていた!!

『クロノ! お疲れ様』

「あっ! 艦長……すみません」

丁度良いタイミングで艦長から通信が入って来た。

『それで、此処にいる人達に色々訊きたいからアースラまで案内してくれるかしら?』

「ですが、この少女は良いとして他の人達は!!」

『……それに事故だったとは言え、部下の非礼をお詫びしなくては
いけないわ』

悔しいけど、艦長の言う通りだ。

「……了解です」

僕は後ろに振り返ると、この場にいる全員に同行して貰う様に依頼
する。

「皆さん、艦までご同行願います」

「はやてちゃんとケルベロスには匠真を見ていて貰いたいから、私と
晃祐の2人で行きましょう」

「ええっ俺も？母さんだけ行けば」私だって晃祐の「やろつとした事
」をお詫びしないといけないしね「うっ」

「いえ、もう日も暮れて来ていますし一応医療設備もありますから
……」

『そうね。那緒実さんと言いましたか？お子さん達の身の安全のため
にもお連れしていただけませんか？』

女性は顎に手を当てて少し考える素振りをして、

「……解ったわ。但し、ケルベロスにはここで下がって貰いましょう。
それに 私だって「悪魔」なら使役出来るから問題無いわ」

と、この人……全身から出る雰囲気といい、重傷の息子を前にして

の冷静な対応といい、間違い無く只者じゃない。幾度と無く修羅場を
潜り抜けて来た歴戦の猛者だ。

女性は使い魔を使役している少年の方に顔を向けて軽く頷き、彼が
何か黒い管の様な物を出して使い魔に向けると、たちまち光になって
"ソレ"に吸い込まれてしまったのだった。

「よっつこ……おい何見てんだよ?」

その一部始終を見て唾然としていた僕は、気を取り直してアースラ
に転送指令を送る。

「(?!)準備は良いですか?アースラ、転送を!!」

そして僕達の身体は光に包まれた。

次回に続く

第15話 時を統べる者（後）

「準備は良いですか？アースラ、転送を!!」

「うおっ!! って、此処何処だよ!?!」

足元から光に包まれると一瞬にして俺達の目の前の景色が一変し、無機質な金属壁が四方を囲む空間に移動していた。

『此処は時空管理局の時空航行艦の中ですね……』

「ふええええ〜なんだか怖いの〜〜〜」

「大丈夫やって。何かあったら那緒実さんがどうにかしてくれるやろ？それに見とっただと思っけど、兄ちゃんもなんだかんだ言っただけで頼りになるからな〜」

何時の間にか俺の足元に來ていた“イタチ”が説明を始めようとした時に、なのはちゃんが困惑した表情で頻りに辺りをキョロキョロし、それを見たはやてが安心させようと言葉を掛ける……普通逆じゃね？何で魔法少女の方がキョロってんだよ。

『……話を続けます。時空航行艦っていつのは簡単に言っと、様々な“次元世界”を自由に行き來するための船の事です』

「次元世界 異世界の事か？」

『えっと……その認識で合っていると思います。普段皆さんの住んでいる世界と以前僕等の住んでいた世界、そして時空管理局の本局がある世界は全て“別々の次元世界”なんです』

「うーん……時空管理局って言うんだから、時間を超える」と思ったんだけど、なんか違うっぽいなあ」

クロノが先に歩いて行ったんで、匠真を背負った俺とイタチは言葉を交わしながら、その後を追うように歩き出す。

『さ、流石にそこまでの能力は無いと思いたいですね……それで、様々な次元世界が干渉する出来事等を文字通り“管理”するのが彼ら時空管理局の役目です』

「へえ〜。アイツ、俺より年下っぽそうなのにもう働いてんのか。まあお前さんの言う様に沢山の世界が有るなら、その世界の分だけ慣習とかも変わってくるだろうしなあ」

ある程度自分なりに解釈は出来たと思う……と、前に行くクロノの足音が聞こえなくなっただけで視線をイタチの方から前に移すと、立ち止まって此方側に向き直っていた。

「……向こうの方々……いい加減僕に付いて来ていただけないでしょうか？」

「じゃあああ!!ま、待ってよ〜置いてかないで〜〜〜〜!!!!」

声に釣られて俺とイタチが後ろに振り向くと、向こうで未だにキョドっていたらしいなのはちゃんが我に返って、イタチが俺と一緒に先に行ってしまったのにショックを受けたのか小走りで俺等の所まで向かって来る。そしてなのはちゃんの側で見たいらしい、母さんとはやては苦笑いを浮かべながらゆっくりと此方に向かい出した。

「へ……?」

「ユーノ君って……嘘っ!？」

なのははこの船に転送されてきた時以上にあたふたし出した……
執務官は、

「……おい君達！もう良い加減艦長を待たせる訳にはいかないんだ！
早くしてくれると助かるんだが!？」

どつやらど立腹らしい。それを見たなのはがシュンとした時、

「まあまあ別にそこまで言わなくて良いじゃないの。貴方が自分の責
務を全うしたい気持ちも解るけれど、まだこの子も小さいんだから。
こつという状態にさせたらちゃんとして事情を訊く事も出来なくなるので
はなくて?」

「確かにその通りだな」

「ホンマや。少し位待ってくれたって逃げへんのに」

「うっ……ま、まあ此方へ」

那緒実さんに正論を言われた執務官は付いて来る様に言っのが精
一杯だった。

私達が長い廊下を歩いて突き当りの部屋に入ると、そこは柵に幾つ

もの盆栽、床は一部畳敷き。そして鹿威しに茶道用具が置かれた、和風なんだけど何処か奇っ怪な部屋だった。目の前には私よりも遙かに若く見える「緑髪の青い制服を来た女性」が笑みを浮かべながら正座をしている……この人が艦長ね。

艦長は一見すると温和に見えるけれど、その見た目と違って相当な実力者を感じる。「口に蜜あり腹に剣あり」と言うから用心しなくてはいけないわね。

「まあ、お疲れ様！皆さんどうぞ楽しんでください。それと怪我をした子はメディカルルームに転送しますけどどうなさいます？」

「いえ、そこまでしていただかなくても大丈夫ですわ。何処か横に出る場所でもあればそれで充分です」

「あらそう？それじゃ、簡易ベッドがあるのでそれをつかってくださいな」

「……ごいそ」

私と晃祐は簡易ベッドの上に匠真を寝かせて、その横にはやてちゃんを動かした。

「あら？貴方がたも此方にいらっしやいませんか？」

「いいえ、私達はここで構いませんわ。息子の事もありますし……それで、私達とその子達とのどちらからお話を？」

「そうねえ〜。と、その前に改めまして、私は時空管理局の航行艦「アースラ」艦長のリンディ・ハラオウンと言います。先程は執務官のクロノがご迷惑をお掛けしてお詫びのし様がございません」

「私は相原那緒実と言います。こちらこそ息子が怒りに任せて重大な過ちを犯すところでした……」ら！晃祐も謝りなさいっ」

私は晃祐の頭を後ろから軽く押して謝らせる。

「ちよっ、母さー……」めんなさい」

「此方こそ私の部下が弟さんを死なせかける事をしてごめんなさい……貴方が怒るのも無理ないわ。クロノも幾らいレギュラーな事態だったとは言え、”若さ故の過ち”で済ませられない事になりかけたのよ。解っているわね？」

「はい……」

「では艦長、続けて紹介しますね。今謝ったのが長男の晃祐。此処で横になっているのが次男の匠真、そしてこの子が私の家で引き取って一緒に暮らしている八神はやてちゃんです」

3人を紹介すると、畳の上上がった2人も口を開いた。

「わ、私は高町なのはですっ……」

「僕はユーノ・スクライアと言います」

「……それじゃあ紹介も終わった所で、先にこちらの2人からお話を訊かせて貰っていいかしらっ？」

艦長は2人から先に聴取を行う様だ。ユーノ君が話を始めたのを見計らい、私は2人の話を聴いている振りをしてしながら晃祐とはやてちゃんに囁く。

「(晃祐、はやてちゃん。聴取が始まったら2人共余計な事は言っちゃダメよ? 貴方は直ぐに熱くなるから余計な事まで言いかねないもの)」

「(じゃあ何て言えば良いんだよ?)」

「(公園に来るまでの経緯と、公園であった事の一部始終だけを言えば良いわ。悪魔については私がどうにかするし、相手が"管理局"と名の付く以上、最悪の事態を避けるのにヤタガラスの事について伏せなくちゃいけない)」

「(ほな何で?)」

「(悪魔召喚師だけならヤタガラスと関係無いフリーランスもいるから問題無い。もし此処でヤタガラスの存在を出して時空管理局から敵と認識されたら洒落にならないわ。それにあの艦長、ああ見えて結構な"狐"よ)」

故に現状で最も警戒すべきはあの人。この部屋に監視カメラやレコーダーが仕掛けられていても何らおかしく無い。ついうっかりで口を滑らせたらこちらの命取りになる……私は意識を前に戻して2人の話に耳を傾けるのだった。

「成る程。あのロストログアを発掘したのは貴方の一族だったんですね」だからこそ、僕が回収しよう」と……立派ね」

「良い心掛けだ。感動的だな……だが無謀だ！何故管理局に通報しなかった!？」

傍から聴いていた俺は、ちょっと気になった単語があったんで尋ねてみることにした。

「あ、あの……。話の腰を折る様でなんですけど、「ロストロギア」って何すか？」

「そうそう！私等にも解るよーに教えてください」

「それは……様々な次元世界の“失われた遺産”と言っても解らな
いっか」

あ、成る程！俺は頭の上に???を浮かべているはやてに、

「はやてはやて、アレだ。“オーパーツ”みたいなもんだよ。ナスカの地上絵とかストーンヘンジみたいな正体不明なモノの事……ですよね？」

「ああ、ああああっ！そか！そういう”どエラいもん”なんかあ」

はやては納得したみたいだけど、今度は管理局の2人が???となってしまう。おいおい……こんだけの技術があるならそれくらい調べる事なんて簡単に出来そうなのによお。

「ただ”謎なだけ”ならまだ良いさ。ロストロギアは使い様によっては世界に多大な悪影響を及ぼす事だって出来る。ジュエルシードの場合は、たった1個で都市ひとつをチリ一つ残さず消し飛ばす位の力を持っている可能性が極めて高い」

「マジで!? したっけアレを素手で手に入れた母さんは流石だな!」

「……」コホン。それでロストロギアは然るべき場所、然るべき方法で保存されるべき。これからは時空管理局が全権を持ちます。貴方達はそれぞれの世界に帰って元通りに暮らすと良いわ」

「……でも…」

どうやら2人は納得出来ないみたいだ。なのはちゃんが必死に食い下がるうするけど、クロノが2人を睨みつけて、

「今回の件は次元干渉に関わる事だ。民間人が手出ししてどうにかなる問題じゃない…」

続けて艦長が2人を庇う様に、

「突然そう言われてもなんでしようから、もう夜になってしまったし明日までに2人で話し合って決めると良いわ」

その言い草は無いだろう!?!と声を上げようとする、無言で母さんが俺の顔の前に手をかざした。抗議の意味で顔を見ると、”今までに見た事も無い位の鋭い目つき”で艦長の方を見ていたのだった。ひょっとして何かに気付いたのか?

「……ふう。さて、次は貴方達の番よ」

聴取が俺達の番になると、朝から現在に至るまでの行動を話した。その際、あの場に遭遇したのは全くの偶然であるという事を強調するのも忘れない。

「では、ジュエルシードで魔物に変化した悪魔にバリアジャケットも何も無しに、その木剣だけで立ち向かったのね？」

「当たり前じゃないっすか！俺は“変身”なんて出来ませんよ」

「しかし君も無謀な事をするな。幾ら使い魔を使役出来るからと言っても……」

「いや、悪魔召喚をしたのは今日が初めてだったんだ。もし俺に召喚が出来る才能が無かったら、万が一の事も覚悟してたしな」

「召喚するのにも条件が要るといっのね」

「では悪魔召喚については私の方から説明しますわ」

其処からは母さんが以前俺とはやてに説明した様に、悪魔と悪魔召喚そして悪魔召喚師についての解説を行った。途中で仲魔のソーマをこの場で実際に召喚して見せて、一同を驚かせたりもした。しかしその話に艦長とクロノだけで無く、なのはちゃんとイタチだった少年ユーノも熱心に耳を傾け続けている。

「現在の地球の技術では悪魔召喚プログラムをインストールしたCOMPを使う事で、素質の無い人間でも召喚が可能となっておりますけど、こつといった物が登場する以前は封魔管等といったモノを使い、自らのMAGを使って召喚していたのです」

「つまりかつては自身のMAGを自由に使う“素質”が無ければ、その悪魔召喚が出来無いし悪魔召喚師にもなれなかったと」

「じゃあ何故、貴方は息子さんにその“素質”が有るか無いかも解らないのに封魔管を持たせたんですか？悪魔召喚プログラム」とやらが有れば手を出す必要なんて無かったのに」

「いいえ。先程も言った様に、悪魔は使い魔と違い召喚師と相互協力の関係です。特にケルベロスみたいなパワータイプの悪魔は召喚師自身も行動を起こさなければ、こちらの言う事なんて聞いてくれません。それに私は悪魔召喚プログラムをインストールしたCOMPなんて持って無いし、私には必要の無いモノですから……でも晃祐なら必ず悪魔召喚を成し遂げると思っていたわ」

母さんの手が俺の頭に置かれ、優しく撫でられた。恥ずかしいなあ全く！でも悪くない。

その後も母さんの話は続き、漸く聴取が終了した。結論として俺達は“魔力が無いから脅威には成り得ない”って事で上層部には報告しないらしい。クロノが公園まで送って行くと言うので部屋から出ようとするど、

「皆は先に出てなさい。艦長さんに少し訊きたい事があるから……良いですね？」

「え？えええ」

そして俺が匠真を背負うとクロノを先頭に、母さんと艦長以外の間は部屋から出たのだった。

「それで訊きたい事とは？」

「艦長さん　貴女、ユーノ君はまだしもなのはちゃんまで味方に引き入れようとしているでしょう？」

私と艦長が2人きりになると、真意を確かめるべく比較的強い口調で切り出した。

「……………何の事かしら？」

「あら、とぼけたって無駄ですわよ？普通、本当に遠ざけたいなら”明日までに話し合って決める”だなんて言いませんからね」

「あの2人はまだ幼いんですよ。今直ぐ”此处で決める”と言っても、到底納得なんて出来ない年頃ですから、敢えて猶予を与えたままで事です。何故那緒実さんはそう思われたんですか？」

あくまでも白を切るつもりか……………私もナメられたものね。しかもさり気なく挑発までして来て、見立て以上の”狐”だね。

「……………まあ良いでしょう。それでは失礼させていただきます」

地球上でも9歳で働いている子どもは数多く存在している。一概に日本人としての倫理観を当て嵌めるわけにもいかない。そう思いながら部屋を出て、皆と一緒に転送室まで歩き出す。

今回私達にとっての収穫は、”あの人”の言っていた”組織”即ち時空管理局が”魔力至上主義”である可能性が高いと判明した点だろう。これは後々私達に有利に働くに違いないわね。

「 此処で良いだろう。なのはとユーノの2人はまた明日此処まで来てくれ」

「 解りました」

「 こちらの皆さんには」迷惑をお掛けしました」

私達が公園まで戻って来てクロノ君が一言一言口にする、「貴方達とはもう二度と会う事は無いでしょう。」と付け加えて去って行った。出来ればそうなって欲しいけれども、残念ながら近い内に今度は敵として会うであろうね。

なのはちゃんとユーノ君を見送って士郎君にフォローの電話をした後、晃祐とはやてちゃんに対して、

「 …… 2人共、 ” 覚悟 ” を決めて貰うわよ」

「 何だよ突然!？」

「 怖い顔してどうしたん? 」

「 遂に現れたわ。私達の敵…… はやてちゃんの命を狙う ” 組織 ” が」

次回に続く

第16話 決意の時

「敵？まさか、前に言ってた“組織”って……」

「……ええ。なのはちゃんと艦長のやり取りを聴いていて確信したわ。彼女達時空管理局の目的が、なのはちゃんとユーノ君が求めているジュエルシードの様なロストロギアならば、はやてちゃんの闇の書もその類に含まれていてもおかしい事じゃない」

「ほな、此処に来たっちゅうことは私が目当てなん？」

母さんの言葉に俺は耳を疑った。横にいるはやても不安そうな顔をしてるけど、母さんはそれをまるで無視するかのよう言葉が続ける。

「いや、それは無いわね。もし最初から闇の書を目標に定めているのなら、今さっきまで居たアースラの様な戦艦が艦隊を組んで現れていると思う。オーパーツの名前を晃祐が出した時にあの2人は全くその事について知らない素振りをしていた。あんな技術を持つている位だもの、オーパーツについては愚か“闇の書の主”位簡単に調べられると思わない？そう考えると時空管理局は“偶然此処に現れた”と考えるのが自然だわ」

偶然出沒したとは言え、此処に居座られて万が一バレた事を考えると……俺はその事について母さんに投げかけてみる。

「でもさ……さっきは大丈夫だったけどいずれはバレちゃうんじゃないの？」

「艦長は“魔力が無い”という理由で私達を危険視しなかった。つま

り万が一闇の書の封印が解けて内に秘められた“魔力”が覚醒しない限り、时空管理局は「こちらに手出しして来る事は無い……」と、思っ
て良いんじゃないかしら」

「したっけ闇の書が覚醒しようがしまいが、どちらにしろはやての命
に関わる事には変わり無いんだな……ふざけやがってー」

俺は沸き上がってくる苛立ちからメッセージャーバッグを地面に
叩きつける。

「兄ちゃん八つ当たりはアカンよ。で、那緒実さん。私等はどうすれ
ば良いん？」

「おい!?なんでお前はそこまで落ち着いてられんだよ!!」

「晃祐は少し冷静になりなさい!……はやてちゃんをウチで引き取っ
てから、ヤタガラスの技術班がMAGを使った代替手段で闇の書にエ
ネルギーの供給を行い、かつ暴走が起らないようにするための技術
研究を、时空管理局の存在を私達に知らせてくれた”ある人”の主
導で行なっているわ。でもこの状況じゃあ彼女達にバレルのが先にな
るか、代替手段が先になるかというのは正直微妙な所だと思っ」

「うちゅう事は、その研究が完成するまで静かにしとくしか無いんか
……なんかもどかしいなあ」

俺は心の中で行き場の無い怒りとやるせない気持ちがあぐちやぐ
ちやに混ざり合って、頭がどうにかなくなってしまっそうになった。その
時、背中まで気を失っていた匠真がもぞもぞと動き出したんで振
り向くと、

「う、う、う……あ、あれ……?僕、死んで……無い?」

「た、匠真ッ！」

「匠真！」

「タツ君！」

意識を取り戻した匠真は半ば呆然とした表情で俺達の顔を見回すと、生きている事を実感したのか声を上げて泣きだした。母さんは安堵の表情を浮かべ、はやては嬉しさの余り涙を流して喜んだ。俺も普段は憎い部分があるけれど、何だかんだ言って兄弟だ。嬉しく無い訳がなかった。

俺と母さんは匠真とはやてが落ち着くの待つと、夜も遅いと言う事でそのまま家に帰って匠真には到着後に、匠真が撃たれてから気が付くまでの一連の流れを話すという事にした。それと誕生パーティーは土郎さんへの報告も含めて翠屋で行うという事になった(どうやら母さんは土郎さんに電話した時にその事についても話をしていたみたいだ)。

翌日(4月28日)午後2時 喫茶店翠屋

「ほな行くぞ〜?.....1日遅れやけどタツ君誕生日おめでとあ〜」
「!!」

「!!!!!!」おめでと〜!!!!!!

「皆さん、ありがとうございます！」

クラッカーの音が店内で一斉に鳴り響く　翌日昼過ぎ、俺達は翠屋に行つて匠真の1日遅れの誕生日パーティーをしている。"昨日の今日"とは思えない位、場の空気は明るくお祝いムードで満ちている。この場には俺達相原家4人と土郎さんと桃子さんの他に、高町家の長男の恭也さんと長女的美由希さん、そして恭也さんの彼女ではやの友達のすずかちゃんのお姉さんだと言つ月村忍さんの8人がいて、各々が匠真に対して声を掛けている。しかしなのはちゃんはどうやらアースラに出向いたみたいで姿は見えなかった。

……そんな事をかく言つ俺は、独り窓際の椅子に座つてその光景を複雑な心境で見ている。

「やあ、初めまして晃祐君。何時も父さんと母さんが世話になってるね」

ふと横を見ると恭也さんが俺の横に来て声を掛けてきた。

「ども……此方こそ母さんがご迷惑をお掛けしてます」

「君の弟の誕生日だと言つのに浮かない顔をしてるけどどうしたんだ？」

「恭也さんは昨日俺達が遭つた事は聞いてるんですけどね？俺、匠真を助けるために初めて悪魔召喚なんてしちゃったんですけど……」

「弟妹を守るためには仕方無い事さ。それが年上の、兄貴の務めだよ。それに君は結果的にはあるけれどなのは達の事も守ってくれた。俺も美由希も感謝してるよ」

「なのはちゃんからも話を聞いてるんですね。でも俺は邪魔をしただ

けで「でも無益な戦闘は防げた」

「なのはと一緒に行ったと言っ」金髪の子「……なのはその子と友達になりたいと思っっているらしい。でも向こうは一方的に敵として認識して取り合っしてくれない……君の“勇気ある行動”は2人の今の関係を変えるには充分な行為だっと思っ」

俺は周りに悟られない様に窓の方に身体を向き直すと、恭也さんも椅子に座っ窓の方に身体を向けようとすると、突然背中配を感じて直ぐに振り返ると、そこには女性が2人立っていた。

「恭也あ〜？」

「恭ちゃ〜ん？」

「何こんな目出度い時にシリアスな空気全開にしてんのよ〜」

「ごめんね〜恭ちゃんの話に付き合っ貰っちゃって」

「いえ……俺の話に恭也さんが乗っくれたんで俺が悪いんです」

その後は忍さんと美由希さんも加えた4人で、内心非常に申し訳無いと思いなながらも昨日の話をした。

「はあ〜……ったく、晃祐君は深刻に考え過ぎじゃないかな」

「まあ、私も長女だから解らない事は無いわ　で、君はどうしたい訳なの？」

「正直、苛立ちだけが募ってどうすりゃいいか解らないんです。俺なんて特に秀でた才能もクソも無いですし」

「……うん。それがいけないんだと思う。晃祐君は自分自身を卑下し過ぎてる」

「君は大きな思い違いをしてるな……才能なんてのは努力で補えるのさ。人には得手不得手があるけれど、悪魔召喚や自分の身を顧みずに化け物に立ち向かうという精神は立派な才能なんだ。それに才能が無いというのは“ゼロ”なだけであって決して“マイナス”なんかじゃない。これから幾らでも伸ばしていけるもんだよ」

「そういつもんなすかねえ……」

「そういつもんだよ。恭也だって美由希ちゃんに比べて剣術の才能が無いって言われてたけど、それを努力でカバーして今までやって来たんだから！」

さも自分の事のように誇る忍さんを見て恭也さんは苦笑いを浮かべる。ああ、俺は近くに自分の事を認めてくれる人がいなかったんだ。俺ははやてが家に来るまで、あのクソ親父から穀潰しだの何だのって言われてボコボコにされてたから、性根がクソ親父に似てひん曲がった人間になっちまってる……正直言っつて羨ましくもあり妬ましくもある。そう思いながら俺は言葉を口にする。

「確かに今までは悪態をついたりネガティブな事を言ったりしてました、でも何時だかはやてに言われて気付いたんです。俺は何もかも始める前から既に諦めてたって事を。だからこのまま傍から黙って見てなんていられません。はやてが俺や匠真、そして相原家を必要としなくなる日が来るまで……俺はアイツを守りたい」

俺の言葉を聞いた3人は顔を合わせて微笑んだ後、俺に語りかけて来た。

「立派な理由じゃないの。私達はそれをバカになんてしない」

「もう晃祐君のやる事は決まってる様なもんじゃないの?」

「晃祐君は背中を誰かに押して貰いたかったんじゃないのか? なら俺達が君の背中を押して上げるよ。君は君の思った道を進めば良いさ。俺達は一応ヤタガラスの先輩だし、色々アドバイスをしてあげられる事も有るだろうしな」

一瞬、恭也さんの言葉に耳を疑った……ヤタガラスだって?

「まさか、3人ともヤタガラスに参加しているんすか?」

「俺と忍は正規の構成員、美由希は訓練生なんだ。俺も美由希も父さんから事実を聞いた時に父さんの代わりにはなれなくても、御神流の剣士としてやれることが有るんじゃないかと思って志願したのさ」

「私は2人と違って、月村家が代々ヤタガラスのシャーマン。つまり呪術師を輩出する家系だからどっちみち“影の家業”を継がなきゃいけないかった。恭也がヤタガラスに志願してくれたお陰で今でもこうして公私共にパートナーとして居られるのがとっても幸せよ」

「もう忍さんったらこんな時にノロケるのは止めてくださいっ!」

忍さんが恭也さんに腕を絡ませるとすかさず美由希さんが突っ込みを入れる……ま、まあ、末永く爆発おしあわせにしろ!!!としか言い様が無いな。

「……」
「ホンー! 兎に角、恭ちゃんの言った様に晃祐君が素直に思った通りの事するべきだと思っよ? 自分に嘘を付いたって自分自身のためになんてならないし!!」

「あ、ありがとございませす……皆さんのお陰で踏ん切りがつかました。俺、何処までやれるか解りませんけど、母さんに打ち明けてみたいと思ひます」

よし！そう決めたら帰る途中に言ってみよう……” 言っただけだからな!!

「兄ちゃん！こっち来いへんとケーキ無くなってまうで……」
!?

「兄さんっ！僕が全部食べちゃって良いのかなあ〜!？」

「おっ？今行くからちよっと待ってろっっ！」

俺ははやてと匠真の声を聞いて、急いでカウンターに向かう。すると皆がその光景を見て笑い出した。恥ずかしいという思いよりも、今の俺は恵まれた環境にいる事に対する思いの方が強かった。

4月28日午後5時 海鳴市路上

パーティーは最後、それまでの雰囲気と打って変わって”現状の再確認”と”时空管理局への今後の対応”なんかを話し合った。それが終わると解散になって私等は歩いて家に帰る事にした。そういやなのはちゃんとユーノ君は最後まで姿を見せてくれへんかった……

個人的にはめっちゃ寂しかったなあ。せつかく友達になれるかと思っと思ったのに。

「結局なのはちゃんは来なかったね……」

「うん……ホンマ残念や。すずかちゃんとアリサちゃんが来いへんのはヤタガラス絡みの事もあるから解っと思ったけど」

「ねえはやてちゃん。はやてちゃんはなのはちゃんが時空管理局に付いたと思っ……」

私がタツ君と話しとると車椅子を押しとる那緒実さんが後ろから声を掛けてくる。

「今なのはちゃんの頭ん中は、あのフェイトちゃんって子の事で一杯なのは解つとる……せやけどやっぱパーティーは1人でも多い方がエエし、これからの事を考えると“敵”になるなんて絶対考えとう無いわ」

「そうね……私も彼女と戦う事なんて想像したく無いもの。土郎君達のためにもそうなる前にどうにかしないとね」

「なのはちゃんに言って止めるように出来ないのかな？」

「匠真の気持ちも解るけど……それは難しいわね。もしなのはちゃんが時空管理局に付いてしまっていたとしたら、恐らく何らかの方法で彼女の行動が監視されている可能性もあるし」

私は那緒実さんの言葉を聞いて更に気持ちが沈んでもうた。横のタツ君を見ると辛い表情をしようと私とおんなじ事を思っとする事に直ぐに気付いた……ホンマ何とかならんのかな。

ふと前を歩いとった兄ちゃんが立ち止まってこっちに身体の向きを変えとった。何かあつたんかな？

「なあ母さん。俺、悪魔召喚師になりたいんだけど母さんは賛成してくれるか？」

「……兄ちゃん？」

「……兄さん」

「俺ははやてを守りたいんだ！あんな奴らに負けない力が欲しい!!もしダメでも“言うだけタダ”だろ!!」

兄ちゃん……あん時の約束を……

「晃祐？その言葉に偽りは無いわね!!」

「ああー！」

「解った！その心意気に免じて一応考えておくわ」

那緒実さんはまた私の車椅子を押して、兄ちゃんの横を顔を前に向けたまま素通りしていきおった。私が後ろを振り返ると肩透かし食らうて啞然としとる兄ちゃんの顔が見えた。

「ちよ、えっ？即答してくれないのかよっ!!」

「さうて2人共、今日の晩御飯は何か良いかしら？」

「お、おいー待ってくれよー!!」

私は上を向いて那緒実さんの顔を伺うと“何とも言えない複雑な

表情”をしとって、家に着いた後もその表情がずっと気になって夜遅くまで眠れへんかったのやった。那緒実さんは何て兄ちゃんに返すんやろ……

次回に続く

第17話 召喚師の道

俺が母さんに悪魔召喚師になりたいと決意を表明してから10日が経った。その間、母さんに「YESとNOどっちなんだ？」と問いただしても常にはぐらかされるばかりだった。でも今日の朝学校に行こうとした時になって突然、

「学校が終わったら一人で翠屋に来なさい」

と言って来た。なんで一人で行かなくちゃいけないだと思いな
がらも、母さんの言う通りに学校が終わるとそのまま翠屋へ向かう。

5月8日午後4時 喫茶店翠屋

「あら、晃祐君いらっしやい」

「どうも。母さんに言われて来たんですけど何か用事でも？」

「裏に那緒実さんがいるから入って行って良いわ」

「解りました。お邪魔します……」

遂に“答え”が得られるか!?と思うと、嬉しさと不安が入り混じった複雑な気分になる。俺は桃子さんの言葉に従ってカウンターの裏から高町家の住宅部分へ上がっていくと、リビングに母さんの土郎さん、そして恭也さんの3人がいるのが目に入って来た。

「晃祐君？学校帰りで済まないね。まあこっちに来て椅子に座りなさい」

い

「は、はあ……」

「そんな警戒する様な顔なんてしないでくれ。別に君が悪いことをした訳じゃないんだからさ」

土郎さんと恭也さんに言われるがまま席に座ると、目の前では母さんが俺に見向きもせず、テーブルの上に何個も並べられた“特大のマンゴープリン”を食べて今にも昇天しそうな位幸せな顔をしていた……おい、幾らマンゴープリンが好きだからってコレは流石にどうよ!?

「那緒実さん？ 晃祐君来ましたよ」

「母さん？」

「(はむっ……もきゅもきゅ)んぷんぷんぷん　ハッ!!」
めんなさい晃祐っ……」

「おいおい、母さんが俺に此処に来て行った癖にそりゃ無えぜ！」

母さんは俺に気付いて慌ててティッシュで口元を吹くと、

「「コホン……晃祐、此処に呼んだのは貴方も解ってると思うけど」この間の事か？」　ええ」

「翌日那緒実さんから晃祐君が“悪魔召喚師になりたいと言われた”と相談されて、恭也や美由希とも話し合ったんだが……」

「正直に言っわ。私は晃祐がそう言ってくれた事はとても嬉しかった
でも悪魔召喚師になるのは反対ね。“親として”は常に命懸け

の危険な事はさせたくないもの」

「私も那緒実さんと同じ様に基本的には反対だ。但し晃祐君の意識と今後の成長次第では任せても良いと思う」

やっぱりダメか。でも土郎さんから「これからの俺次第で変わってくる」という好感触な答えが返ってきたのは嬉しかった。そして恭也さんの方に顔を向けると話し始める。

「俺は2人と違って全面的にという訳じゃないけど一応賛成だよ。俺や美由希の様に幼い頃から本格的な「敵を倒す」術を修練してきていないし、何より実戦経験が無い。様々な経験をこれからどう積んでいって行くか、そして晃祐君自身がどれ等をどうこなして行くかによつては考えていってあげて良いと思うんだ」

恭也さんはやっぱり賛成してくれた……経験なんてソレ位どうにかしてやるよ！

「晃祐……」

「何だよ母さん？」

「親として」反対なのは今行った通り。でも「悪魔召喚師として」言えば、私も40歳を超えて身体に衰えを感じて来ている……だから土郎君の後を恭也君と美由希ちゃんが継いだように、私の後を継いでくれる後継者が欲しいのも事実なのよ？で、なんだけど」

母さんは徐ろにハンドバッグから拳銃の様なモノを取り出して俺の前に置いた。これは拳銃に見えるけど銃口がない……コレってもしかして。

「母さんに約束して欲しい事が有る。絶対に”自分の命を粗末にしない”って事。幾らはやてちゃんを守りたいからって自分の命を簡単に投げ出す様な事は絶対にしちゃダメよ？それに召喚師としての修練にカマをかけて学業や部活を疎かにしない事。自分から言い出した事なんだからどんな時にも決して弱音は吐かない事……今言った約束を絶対に守れる自信が有るのなら、その拳銃型COMP ”GUMP” を貴方に託すわ」

「母さん……っ！」

「……召喚師の道は貴方が思っている程生易しいものじゃない。もし少しでも手を抜いた事が解つたり諦めの感情が表に出て来たりした様だったら、その時は直ぐに”レ”を取り上げるから」

思ってもいなかった母さんの言葉に、心の底から嬉しさが沸き上がって来たのがハッキリと解つた……これは約束を最後まで果たす以外、俺に選択肢は無いだろうよ！

「勿論約束するよ。俺はへこたれないっ!!」

「晃祐君、あくまでも今からは訓練生以前の所謂”試用期間”という事になる。これからは普段の生活面と悪魔召喚師としての行動を那緒実さんが、悪魔等から身を守ると同時に攻撃する術は私や恭也が厳しくチェックし、最終的な結論を1年後に出すつもりだ」

「俺達は君の事を信頼しているけど、悪魔召喚師として一人の戦士としての信頼は別だ。これから将来、信頼出来るに足る人物に成り得るかどうかを試させて貰うからね！」

「はい！母さん、土郎さん、恭也さん……本当にありがとうございます!! ございます!! 俺、どんな困難に直面しても挫けない様に頑張ります!!」

私が晃祐に“約束”を言うと破顔して本当に嬉しそうな顔をしていた。こういう所は中学生とは言えどまだまだ子どもね……でも“頑張る”じゃダメなのよ？

「晃祐、今“挫けない様に頑張る”って言ったけど、頑張るじゃダメ。そこは“絶対に挫けない”って言わないと。努力するんじゃないって、そうして貰わないといけない”のよ？これから先悪魔だけじゃなくて時空管理局　つまり人間とも実際に戦わないといけないなくなる。つまり貴方は下手をすれば“人を手に掛ける”かもしれない」

私の「人を手に掛ける」という部分に士郎君と恭也君の顔が一瞬強張った。きつとなのはちゃんのことを考えたに違いない。

「ああ。解ってる……解ってるさ。はやてを守るためなら俺は何だってするぞ」

「そしてもう一つ。はやてちゃんを守るからと言って他の人の命も疎かにしてはいけない。今後ヤタガラスに入らないでフリーランスの召喚師をやるつもりなら別だけど、もしヤタガラスに入るつもりなら人々や街を出来る限り守る事も考えないと」

「そっか、そっだよな……」

晃祐は私の言葉を聞いて、ハツとした後それまでの表情とは一変して複雑そうな表情を浮かべる。流石にそこまで考えていなかったか

……まあこの歳でそこまで考えろって言うのも難しい事ではあるけれど。

「もし万が一…はやてちゃんと街の人のどちらかを選ばないといけない」事態になったとしたら、君ははやてちゃんを優先して構わない。私が在籍していた隠密部隊の様に、悪魔召喚師がカバー出来ない部分をカバーする部隊がヤタガラスには存在しているからね」

士郎君が晃祐の頭の中を見透かす様にフォローを入れると、若干表情が明るくなり直ぐに目つきが鋭くなる。そして強く頷き、

「覚悟するよ……母さん、さあこれから何をするんだ!？」

「じゃあ、まずは早速GUMPの説明と使い方方を練習しましょうか。戦闘術は今度の土日から……で、士郎君良いわね？」

「ええ。平日は私が、土日と祝日は恭也か美由希を付けます」

「話も決まった所で……父さんは店の方に出て良いよ。後は俺が……」

「……解った。那緒実さん、召喚の練習なら稽古場を使ってください」

恭也君に促されて士郎君はエプロンを付けて店の方に出て行った。私達はそれを見送ると恭也君の案内で高町家に併設された稽古場へと向かうのだった。

稽古場に移動してから1時間程度、母さんから渡された拳銃型COMPの機能や使い方の説明を受けた。このGUMPには悪魔召喚プログラムがインストールされているらしく、今現在の自分の状態だと封魔管よりもタイムロス無く召喚が出来るという。またメモリには8体分の悪魔が格納可能らしく、現在2体分のスペースが埋まっているから「残りの6体は自分自身の力で仲魔にしてみせろ」との事だ。他にも母さんから以前借りていたスマホ型COMP同様にセンサー類も完備している。しかし欠点として、悪魔召喚用に容量が取られているために「アイテム格納用のメモリがスマホ型COMPよりも少ない」という点があるとの事だった。

「で、悪魔召喚についてなんだけど、このGUMPは最新型で使用者の思念を読み取るセンサーの様なモノが付いていて、いちいち後ろのセーフティを外して画面とコンソールを出さなくても召喚師らしい仲魔を頭の中に浮かべてトリガーを引くだけで召喚が可能になっているの」

「でも今は何が格納されているか解らないから、普通にコンソールを操作して出さないといけないんだな？とりあえずやってみるわ」

俺はタッチパネルになっているスクリーンとコンソールキーに触れて使用者登録を行った後、悪魔召喚プログラムから可能な悪魔を見てみると2体の悪魔が表示された。

魔獣 ケルベロス/Neutral/相性：火炎吸収、氷結弱点
/魔法：リカーム/特技：ファイアブレス、かみつき、アイアンクロー、フォッグブレス、バインドボイス/???/???/???/???

妖精 ジャックフロスト/Neutral/相性：氷結吸収、火炎弱点/魔法：ブフ、ディア、マカカジャ/特技：アイスブレス、フロストパンチ/???/???/???/???

……
"???"で隠れて不明な部分があった。

「なあ母さん、この"???"って何だ？あとケルベロスって封魔管に入ってたヤツなのか？」

「"???"については今後の晃祐と仲魔の成長次第で明らかになるわ。それでケルベロスの方は晃祐の言う通り"あの"ケルベロスよ」

「よし。とりあえず呼んでみるか！」

まずは再びスクリーンに触れ、ケルベロスを召喚準備状態にしてトリガーを引くと、足元に魔方陣が描かれた後にその中央から光の柱が立ち上って、それも直ぐに消えて行った。その光の柱の中からケルベロスが現れたのを確認すると、続いてジャックフロストも同様に召喚する。光の柱が消えると青い帽子に青い襟巻き、青い靴を履いた"雪だるま"みたいな悪魔が現れた。

『アアオオーン!!………久々ダナ』

『ヒーホー！初めましてだホ〜!!』

「ひい、ほお
????」

『コイツの口癖ミタイナモノダ。気ニスルナ』

『そーだホ！気にしてたらあっという間に頭がハゲるホ〜』

「お、おっ………それでこっからどっすりや良いんだよ？」

召喚したのは良いけど、その先が解らなくて母さんに助けを求めた。

「悪魔召喚師と仲魔は基本的に”対等な関係”なんだから、晃祐が無理矢理命令した所で言う事なんて聴いてくれる訳が無い。これから先、共に戦う同士になるために”最初にやるべき事”は何かしら？」

俺が最初にやるべき事……そうか、向こうは俺の事を殆ど知らないんだ。

「俺は相原晃祐。駆け出しの素人だけど、皆の力を借りてどんな困難にも打ち勝つ事が出来る様な悪魔召喚師になりたい。これから決死の覚悟で努力を惜しまずやっていくんで宜しく頼みます！」

俺は2体の悪魔に名前を名乗ると同時に決意を口にした。

『マア、良イダロウ坊主……改メテ、オレサマハ魔獣ケルベロス』

『晃祐、オイラは妖精ジャックフロストだホ！』

『コンゴトモヨロシク……』

『コンゴトモヨロシクホ！』

この時、俺は遂に悪魔召喚師としての第一歩を踏み出した。“試用期間”とは言え、皆を絶対に失望させる様な事だけはしない……そう心に固く誓った。

次回に続く

第18話 戦士の道

翠屋で母さんからGUMPを渡されて2日。俺はその間、学校から帰ってくると夕食と風呂と勉強時間を除いては殆ど地下室でGUMPの操作を練習したり、召喚したケルベロスやジャックフロストとのコミュニケーションに時間を費やした。最初の2体の仲魔が「炎と氷の相反する属性を持つ」者同士で個人的には非常に心強い。

『オレサマハ所謂「パワーファイター」だから、魔法ナゾ」「リカーム」「シカ使エング重傷ヲ追ツタ時二八回復サセラレル事ガ可能ダ』

『オイラは力も魔力もソコソコだけど、オイラ必殺の「フロストパンチ」で相手をブツ飛ばすのが得意ホ！それに「ディア」で傷の回復も出来るし「マカカジャ」で魔力の底上げも出来るホ』

……てな具合で2体の特技なんかを教えて貰ったり、得意な戦闘場面や逆に苦手な相手を聴いたりして親交を深めると同時にこれから先待ち受ける「悪魔との戦い」に備えて様々な悪魔の情報も聴いては逐一GUMPのメモ機能に記録していった。

そんなこんなで今日は土曜日なんで「恭也さんと美由希さんによる初めての「戦闘訓練」がある。」

5月11日午後3時 高町家稽古場

「「んちわ相原です!!今日は一日ヨロシクお願いします!!!」

翠屋に入らずそのまま高町家の裏へ回って直接稽古場の前に行き、扉を開けると大声で挨拶をする。すると奥の方から恭也さんと美由

希さんが出て来た。

「やあ晃祐君。今日は短い間だけど宜しく頼むよ」

「じつじつはー宜しくね〜」

今日は午前中に部活があったんで、訓練が始まる前にストレッチを行おうとすると恭也さんがマッサージをしてくれた。どうやら高町家秘伝のマッサージらしく何時も後輩にして貰ってるマッサージとは全然違って気持ち良くて、それが終わって立ち上がるとなんだか身体が軽くなった気がしてその場で何度か跳躍した。

「お？部活の疲れがすっかり取れたみたいだに身体が軽い！」

「じつじつ！ちゃんとストレッチもしないとダメだよ？」

「あ、すみません！」

美由希さんの言う通りに入念にストレッチを行って準備万端！さあ、今日はどんな訓練が待っているんだ!?

「よし良いな。今日初めて実践的な訓練をやって貰う訳だけど、暫くは父さんと俺達とで内容は違う物をやっていくつもりだ。父さんは攻撃、俺達が防御や回避を重点的に教えていくからな。」

「はい！……でもなんで最初に防御と回避訓練から始めるんすか？」

「君は悪魔召喚師を目指すんだろ？攻撃は最悪仲魔にして貰えば良いから後でもどうにかなる。但し、敵から自分に向かって繰り出してきた攻撃は自分自身で対処しなくちゃいけない。だから先に防御と回避を身に付けさせようと思ったのさ」

「晃祐君には恭ちゃんの攻撃を竹刀で受け止めるかわして貰うからね。流石に最初は晃祐君がやりやすいように手加減をするけど、慣れてきたらスピードも上げて段々容赦無くなっていくから！」

マジか……何気に滅茶苦茶キツイんじゃないかねえの？

「大丈夫大丈夫。最初はひとつずつ基本動作から教えるから、そんな心配そうな顔をしなくても良いって！」

「す、すみません……」

そして訓練が始まると、初めに恭也さんと美由希さんでお手本を見せてくれ、その後に自分が実際にそれを真似てやってみる……という地味ながらも重要な事を只管に繰り返し、1時間程すると休憩する事になった。単調だけど凄く神経も体力も使う訓練に、俺の息も絶え絶えになって床にへたり込むと、恭也さんが何時の間にか持ってきていたスポーツドリンクを手渡してくれた。それを飲んで一息付くと、恭也さんと美由希さんは防御と回避についての重要性を語り出した。

「防御と回避は自分の命を救う重要な行動だ。剣道でも同じ事は言えるけど、実戦になると本当に自分の命を懸ける事になるから入念にやらないと冗談抜きで死ぬ事になるからな？」

「良く」攻撃は最大の防御」って言うけれど、それは戦争みたいな「多数対多数」の戦略であって個人の戦闘ではまずありえない事だから、その考えは頭の中から捨てちゃった方が身のためだね」

部活の仲間から事ある毎に「本番に弱い」って言われてるし顧問からは、

「相手に想定外の攻めに出ると直ぐパニックって足元を掬われたり、追い詰められるとヤケになって攻め一辺倒になってソコを突かれたりするからダメなんだ。常に落ち着いて攻撃を捌けるようになれ！」

と常日頃言われているけど、俺は「攻撃は最大の防御だ！捨て身でやればどうにかなる!!」と言い返して殆どと言って良い位全く聞く耳を持たなかった……でも「あの時の人面樹」との戦いで、それが間違いだったんじゃないかという事に気付かされた。魔石や宝玉が無ければ今頃は死んでいてもおかしくない。

「それはこの間の人面樹の件で身を持って知ることが出来ました。……俺はこの訓練を通じて得た事を剣道にも活かして、もう二度と「本番に弱い」だなんて言われない様になりたいです。本当の戦いに「次なんて無い」様に、一戦必勝の精神と技術を身に着けたい」

「立派だな。その心積りでこれから臨んでくれよ」

「良い心構えだねえ。きつとこの先も大丈夫だよ！」

休憩を切り上げると、引き続き反復して恭也さんと訓練を行う。訓練をやってて解つたのは「精神的にも肉体的にも疲労が出て来て、動きが鈍くなった時」が一番危ないという事だ。元々俺が短気な性格だからって事もあってか、少しでも焦りを見せたり疲れて動きを止めたりするようものなら、恭也さんは容赦無く攻撃を繰り出して来る。一方で美由希さんは俺の動きを見て、この短時間で「癖」を見抜いたのか俺が考えてもいない動き（しかも俺でも咄嗟に出来る様に工夫をしてくれている様子）を的確に、かつ解りやすくアドバイスしてくれる。そして1時間経って再び休憩する。

「恭ちゃん。晃祐君の動きを見てて思ったことがあるんだけど……」

「剣道が身体に染み付き過ぎていて動きに“癖”があるんだろう？」

「……“癖”、ですか？」

「ああ……晃祐君は剣道をどれ位続けているんだい？」

「えっと、小学校の2年からやってるんで、もうかれこれ8年になりますね」

「長年続けている事で“癖”が身に付くというのはある意味いい事だけど、本当に戦闘を行う事になるとそれは返って悪影響を及ぼす事にもなりかねない。この際、剣道の動きは全部頭の中から全部取っ払ってしまうのが良い」

剣道の動きと取っ払うって……そりやかなり難しいなあ。中体連も近いし動きを覚えて変に試合中に出たら審判に反則を取られるかもしれないし。

「今直ぐってのは難しいかもしれないけど、少しずつ少しずつやっていけば良いよ。中体連もあるんだろうし本格的な事はそれが終わってからだね」

「すみません……助かります。本当は今直ぐにでも本格的な動きを学びたいんですけど、やっぱり最後の中体連だし、一応副部長なんで結果も残したいんで」

その後俺達は夜8時まで練習を続けた。風呂場を借りてシャワーを浴びた後、帰り際に桃子さんから、

「晃祐君。ちょっと遅いんだけど今日は家でお夕飯でも食べていかな
い？」

と夕食の誘いを受けた。俺は躊躇して試しに母さんに電話をする
と許可を貰ったんでお言葉に甘えて一緒にさせて貰う事にした。

「わざわざご飯までありがとうございます。いただきます！」

「恭也、美由希。晃祐君の練習を見ていてどうだった？」

「……筋は悪くないと思う。学校が夏休み期間に入ったら集中的にや
れば秋頃には化けるかもしれないなあ」

「でも剣道の動きを身体が覚えちゃってるから、どうしても不意打ち
とかに弱いよね。一応恭ちゃんとは晃祐君の中体連が終わってるから、
本格的な動きを教える事にしたよ」

ふむ。2人が言うのなら努力次第ではどうにかなるか……しかし剣
道を長年やっているのであれば、迂闊に御神流を教えず一刀流に専念
させた方が良くかもしれない。私達と違って彼は悪魔召喚師だから
仲魔の協力が得られるだろうし、余計な物を教えない事にすべきだろ
う。

「そう言えば、なのはちゃんまだ帰って来てないんすね」

「ええ……」

晃祐君がなのはの事を訊くと、桃子さんは一言発すると表情が暗くなった。

「あの晩」、なのはが帰って来た後に全部聴かせて貰ったよ。まさかあんな強力な光子砲を撃てる程の「力」を持っていたなんて、正直に言つと信じられないし信じたくもない」

「……そして俺達の敵になるかもしれないという事も」

「あのね晃祐君。実はなのはから話を聴いた時、私達はヤタガラスの事を言えなかつたんだ……あんな大真面目な目をしていたら、例え誰が何を言ってもなのはは話を聞いてくれないだろうし、言える空気じゃなかつたから」

私の後に続いて恭也と美由希も言葉を口に出す。それを聴いた晃祐君も沈んだ表情になり、リビングに重い空気が漂う。

「さ、さあ！その事はその時になってみないと解らないんだから、早くお夕飯を食べましょう!？」

桃子さんは気丈だな。確かにその通りだ！恭也と美由希もハツとした顔をして、再び御飯を食べ出す。

「そうだね。晃祐君も美味しい物も冷めて美味しく無くなってしまつから早く食べるとしよう。それに帰りが遅くなつたら那緒実さん達も心配するだろうしね」

「は、はあ……」

私は夕飯を終えると晃祐君を車で自宅に送り届け、那緒実さんに恭

也と美由希から聴いた訓練の様子を伝えた後、途中スーパーに寄って買い物をして帰宅した。

なのは……お父さんは敵として対立するという事態にならない事を信じてるぞ……！

兄ちゃんが家に帰って来ると、私は部屋に来るように言った。そして那緒実さんと喋った土郎さんが帰ると、荷物を置いてスウェットに着替えた兄ちゃんが部屋に入ってくる。

「おう。一体何だよ」

「兄ちゃん兄ちゃん！初めての特訓はどうやった??」

私は兄ちゃんから特訓の内容を訊くと、めっちゃ疲れとるだろうに嫌な顔もせえへんで詳しく教えてくれた。兄ちゃんは晩ご飯中に恭也さんに「筋は悪くない」って言われたみたいで、私はホンマ嬉しくなった。

「そか〜良かったなあ……ほな、こっち来てくれへん?」

「ん?ベッドに移せば良いんだな?」

兄ちゃんは私を車椅子から抱え上げるとベッドに運んで座らせてくれた。そして直ぐに立ちうつとするけど、

「兄ちゃん待つてえな!ちょっと私の横に座ってくれへんか?」

「っとく、解ったよ」

兄ちゃんが横に座ると、私は兄ちゃんの肩に頭を預けた。すると兄ちゃんは驚いたんやけど、私の身体が倒れない様に動かさないでくれた。

「あ、あ、あ、どうしたんだよ!？」

「あ。兄ちゃんがあん時の約束を守ってくれて、私めっちゃ嬉しいんよ。今日こうして私のために特訓に行って夜遅くまで頑張ってきて……ホンマ、ホンマありがとな」

「何てこたあ無えよ。家族なんだから当然の事だろ？ 例え血が繋がってなくても、はやては紛れも無い妹なんだ。色々と重いモノを背負ってるのをただ黙って見てなんていられない。だから……」

「だから何なん？」

「俺、はやてが闇の書の呪いから解き放たれて、一人でしつかりと両足で立って生きていける様になるまで頑張るからな」

兄ちゃんはそう言つと、私の頭を優しく撫でてくれた……でもちょっと気になった事があったもんやから、言葉の真意を訊いてみる。

「うん……せやけど兄ちゃん。今、私が“一人で生きていける様になるまで”って言うたけど、病気が治ったら悪魔召喚師辞めようとか思っとるんとちゃっの……」

「ちあ、な……ひょっとしたら“続けたくても続けられない状態”に

なってるかもしれないし、俺自身の先の事なんて解らないさ。とりあえず約束した以上、出来る所まで出来る限りの事はやってみるわ。そのためにも全力で訓練をこなして行かないと」

「絶対兄ちゃんなら大丈夫やって！」

「ははは……ありがとうな」

「で、なんやけど明日日曜日やから久し振りに私と一緒に寝てくれへん？」

「……しゃーねーなあ」

兄ちゃんに無理言っって一緒に寝てもらた……やっぱ疲れとつたみたいで、直ぐに寝息を立ててしまった。兄ちゃん頑張ってえな！私も病気が治ったらヤタガラスに志願してみるつもりや。後方支援でええから少しでも兄ちゃんの事を助けたい……何時までも守られてるだけの私やないで？

5月12日午前1時 海鳴市郊外某所

「!？」

「ぢよっぴびひしたの!？」

「……2人共あれを見なさい。あそこに人が倒れてるわ！」

「アレは……女性？と、横に何かがあるわね」

「これは大型のカプセルみたいなモノみたい」

「彼」がカプセルを転がすとガラス張りの部分が表に現れた。中に液体と一緒に何かが入っているみたいだけど、中身が混濁して良く見えない。

「……………？」

「ちよっ、うわわっ！いきなり何やってんのよ!？」

「彼」がしゃがみ込んでカプセルにあったボタンの様な物を適当に押すと、ガラスが開いて液体が流れ出して内容物が顕になった。これは……女の子!?この女性は一体何をしていたというの!？」

「！」「!!」

「まったくどうしたの……ってそっちの女性は生きてて、こっちの子も反魂香を使えば助かる見込みがあるのね!？」

「彼」の言葉に「マダム」は驚きの声を上げた。助かるのなら助けないと！

「一刻も早く平崎の事務所に戻りましょう!!」

「そうね。この状態で悪魔に遭遇すると危険だわ」

私達はトラポートで平崎のターミナルに帰還し、急いで事務所に戻

ると2人を蘇生させて目覚めるまで魔石等を使って回復させ続けた。
女性も少女も衰弱していて予断の許さない状態だ……どうか無事に
目覚めて頂戴!!

次回に続く

第19話 Heaven Is A Place On Earth(前)

地球時間5月11日午後11時 時の庭園

「私は向かわねば！アルハザードで過去も未来も、そして“この子の命”も取り戻し今度こそ何者にも縛られない真の幸福を得るのよ!!」

私の足元が崩れ、アリシアの入ったポッドと共に玉虫色の虚数空間へと身体が落ちていくのが解った。上を見るとフェイトが何かを叫んでいるけれど、私の耳にはもう届かない。

「アリシア？今度はもう、絶対に離れない様に……」

私は残された魔力を使って、ポッドの元に寄って抱きしめる。解っているの……本当はアルハザードなんて存在して無いかも知れないという事なんて。でも、今更フェイトの母親面をすることは絶対に許されない。それに私が一緒に居れば、“あの連中”は必ずあの子の命を狙ってくる。“口に出せぬ存在”の名の下に許されざる命を許す訳が無い。

私はアリシアのため、フェイトのため、そして何より自分自身のために道化を演じなければいけなかった事に何の後悔もしていない。

(フェイト……どうにか何時までも元気で……)

意識が段々と朦朧になっていく。次に両目を開けた時は、アルハザードに居られたら……

めよ

(……………ん、うん……………?)

目覚めよ。彷徨えし魂を持ちし者よ

頭の中に声が響き、私は次第に意識を取り戻す。気付くと真つ逆さまに落ちていた筈の私達は宙に浮いているのが解った。すると目の前には金色の光に包まれ、緑色の衣装を身に纏い翼を持った巨大な人の形をした何かが現れる。

『 プレシア・テストロッサよ 』

「 貴方は何者……………」

『 私は “ 預言者 ”^{イライジャ} かつて天の歌を司っていた者 』

その存在は私に自らの事を紹介した。

「 その “ 預言者 ” が私に何の用かしら 」

『 ……私の “ 兄 ” やかつての仲間達は “ 裁き ” の名の下に、ありとあらゆる世界を邪な存在として破滅させ、自らの都合の良い世界へと作り変えんとしている。私はそれに反発したが故にこの空間へ幽閉された 』

「それが私と何の関係が有ると言つの？」

『私はずっとお前達人類をここより見続けてきた。お前の過ちも病の事もそして娘達の事も……お前の下の娘は例え世界の理に叛く”許されざる命”だとしても、この世に生まれて来た輝く一つの命だ。本来ならば看過出来ぬ邪悪なる行為であるが、今となっては最早何も言うまい』

預言者と名乗る存在の全てを知っているかの様な口振り、人智を遙かに凌ぐその威圧感に”大魔導師”と謂われたこの私が一瞬たじろいでしまった。だけど彼はそれを気にかける事無く言葉を続ける。

『私は様々な文化や考え方そして信仰等があり、それらがぶつかってこそ人類はより善い世界を作り出すことが出来ると考える。しかし強大な力を有する者が、その者達の理によって一方的に弱者を蹂躪する事は絶対に有ってはならないのだ』

「そんなもの今となっては私に関係の無い事よ。アリシアと幸せに暮らせるなら世界がどうなるかと知った事じゃ無いわ！」

『お前が下の娘を遣った世界には”闇に生きて闇を討つ者達”がいる。その者達の願いは唯一つ、”その世界に暮らす人々の安寧を乱さんとする不条理なる存在を討伐する事”だ。”大魔導師”と謳われたお前が”その者達” ”ヤタガラス”に力を貸し、次元世界を覆う悪意より人々の安寧と均衡を保つ一助となると誓うのであれば、今一度お前達が人間として全うに生きられる機会をもたらしやろう』

「機会……？まさか貴方、私の身体は愚か、死んでしまっているアリシアまで治すと言つの！」

『それはお前の選択次第　このままこの空間で実在するかも解らぬアルハザードに辿り着くまで延々と彷徨い続けるか、それとも私の提案を呑むか。もし私の言う事を聞くのであれば、今言ったと通りお前達を救おう。選択肢は二つに一つだ……さあ選ぶが良い』

……最初から一つしか答えの無い選択肢を選ばせるだなんて、本当にふざけているわね。

「　　なんだか馬鹿にされている気がしないでもないけれど、まあ良いでしょう。その話に乗らせて貰うわ。さあ、アリシアを蘇らせなさい。」

『良いだろう。それでは……』

　　預言者がポッドに手をかざすと光に包まれ、暫くしてその光が収まったけどアリシアが目を覚ます気配が全くと言って良い位感じられない。

「どっしたの!?まさか私を騙したというんじゃない　ぐっっ!」

『そう怒るな……身体に障るぞ。今の私の力では靈魂を肉体に戻すのが精一杯なのだ。では次にお前を蝕む病を軽くしてやるっ』

　　今度は私の方に手をかざすと、淡い光が私を覆う。発作で胸を押さえその場にうずくまっていた筈なのに、不思議とその苦しさが無くなって長年全身を支配していた気だるさと重さが、幾分軽くなった様に感じられた。

『　　じむ、これで良い』

私を覆っていた光が消えると、杖を軽く振るってみた。幾ら預言者

が力を失っているとは言え、ここまで私を回復させられるのだから、きっとアリシアもその内に息を吹き返すのだろう。

「ふう……貴方の力の凄さは理解できたわ。信用してあげても良いでしょう。さて、”第97管理外世界”にはどうやって転移すればいいのかしら？」

『心配は要らない……お前達の転移も私が行おう。転移した際にヤタガラスが検知出来る程度の反応を起こしてお前達が保護される様に仕向けるから大丈夫だ、問題ない』

預言者は両手を天に掲げると、再び私とポッドが光に包まれた。

『この者達に大いなる祝福を。では、さらばだ』

次の瞬間、私の意識は途絶えた。

5月12日午前8時 平崎市・葛葉探偵事務所

日付が変わって間もなく、海鳴市郊外の山中に空間転移の反応を検出して私とキョウジ。そしてマダム銀子の3人でそこに向かうと、紫色のドレスを着た30代〜40代位の女性とカプセルの様な物が倒れていて、キョウジがカプセルのボタンを弄ると中から5、6歳位の少女が出てきた。2人共衰弱していたけれど、助かる見込みが有る事が解って急いで事務所に引き返して1時間交代で持ち得るだけの魔

石等を使って回復させ続けた。(因みにカプセルから出てきた少女は全裸だったもんで、事務所に行くまで私のコートを羽織らせて到着次第バスローブを着させた)

そして私の2回目の番を終えると、最終手段として海鳴のナオミに連絡をしてこの場に来るように言い、店舗の方に出て到着するのを待つ……アイツの使役するソーマの力があれば!

「レイ?来たわよ!」

「ナオミ!?ホント朝早くにゴメンね!先ずはこっちに来てくれない?」

ナオミを連れて裏の仮眠室へ行くと、表の事務室に行っていたキョウジも丁度戻って来た所だった。

「!」

「あらナオミ!意外と早かったじゃないの!」

「お久しぶりね葛葉キョウジ。それとマダム銀子。早速だけど事情を説明していただけませんこと?」

「……………」

キョウジはナオミに転移反応に始まり現在に至るまでの一部始終を伝えた。その途中で私とマダムが補足し、出来るだけ解り易くかつ正確に説明をする。

「そついえばこの女の子、まだ大分幼いけれど先月末に海浜公園で見た女の子に本当にそっくりね」

「そっくり?」

「ええ……直に話したわけじゃないわ。でも髪の毛の色や顔立ちがその子 確か時空管理局の人間が言うにはフェイト・テスタロッサと言っらしいのだけど、姉妹にしては余りにも似過ぎている」

「カプセルの中に入れられていたというのも気になるわよね……」

ナオミとマダムの言葉に私の頭の中で“ある可能性”がよぎる。いや、でもまさか……この地球上で“その技術”は、最近になって漸く医療分野での利用が認められる様になったというの!?

「レイも同じ事を考えた様ね」

「……はっ!?!まさかそんな事って!」

「……??」

「マダムも私の報告書を読んでいただいたと思いますが、時空管理局は私達の予想を遙かに上回る技術力を保有していますわ。それに彼らの言う通りなら、数多く存在するという次元世界において“あの技術”が一般的に普及していたとしてもおかしくありませんもの」

ナオミの台詞を聞いても尚、キョウジには理解出来ないみたいで「全く話についていけない」という表情をしている……全く、長年探偵をやってきているのにどうしてこういつ時に頭が回らないのかしら!?

「キョウジにも解る様にハッキリ言っわね。私達はこの子がナオミの見た少女、フェイト・テスタロッサのクローンじゃないかと思ったの

「！」

「!?!?」

「……とりあえず真実はこの女性が目覚めた時に訊き出すとしましょう。今からは私が様子を見てますので、皆さんは帰宅して朝食をとるなりシャワーを浴びるなり睡眠を取るなりしてくださいな。もし晩までに目覚めなければ、最悪ソーマの力を使って無理矢理にでも起こさせますわ」

私達はナオミの申し出に甘えて一旦休む事にした。一体あの女性からどんな事を聴き出せるかしら……?」

3人が仮眠室から去っていくと、私はフェイトちゃんに良く似た少女が横になっているベッドの隣に行つて中腰になると彼女の頭を撫で、聞いていないのにも関わらず言葉を掛ける。

「もし貴女が意識を取り戻したとしても、真つ当な生活は送れそうにないわね……もしもクローン人間だとしたら、この世界にとって貴女は“許されざる命”という事になってしまう。そして下手をすればクローンの存在を許さない人間達によって、命そのものが危ない目に晒されるでしょう。だけど私達ヤタガラスは決して貴女の存在を否定なんてしないわ。貴女もまた、幸せになる権利を持った一人の人間なんだもの」

10分 20分程彼女の顔を眺めてから台所に行つてコーヒーを入

れ、再び仮眠室に戻りここに来る途中にコンビニで買ったパンをソファーに座って食べ、スマホにイヤホンを挿してラジオのアプリを起動させて2人の意識が戻るまでラジオを聴きながら様子を見守ることにした。その後5時間程経った頃、レイが事務所へと戻って来た。

「ありがとうナオミ……2人の様子はどう？」

「いいえ。相変わらずね……」

レイは私の隣に座るとペットボトルの烏龍茶を袋から取り出して一口飲む。

「ふう……。そういえば聞いたわよ！アンタんこの息子、悪魔召喚師目指すんだって？」

「ええ。今日は午前中の部活が終わったら午後から土郎君の所で戦闘訓練よ」

「引き取った“闇の書の子”といい召喚師志望の息子といい、アンタも悩みが絶えないねえ」

「でも充分幸せよ。私も頑張らなきゃって気持ちになるし、晃祐が自発的に召喚師になりたいって言うてくれたのは正直不安では有るけれど、とても嬉しかった」

彼女は何とも言えない顔をして私の方を向き、

「すっごい今更なんだけどさ……昔のアンタを知ってる身としては、本当に敵同士だったのか？って位変わったよね。以前は反吐が出るくらい嫌いで憎くて憎くてどうしようもなかったけど、今のアンタはヤタガラスの仲間とか以前に同じ人間として女性として尊敬出来

るわ!」

「ファントムソサエティの片棒を担いでいた暗黒召喚師」白鐘那緒実
「は、二上門の地下遺跡でアプスーと一緒に死んだわ。今の私はヤタ
ガラスの悪魔召喚師」相原那緒実「よ?あとついでに言っておくけ
ど、そんなに私を褒めたってなんにも出ないから!」

「ふふっ……………」

「あはは……………」

なんだかおかしくなって2人して笑い出した。かつての怨敵とこ
うして笑い合うなんて20年前じゃ到底考えられない事だ。"時間
が傷を癒してくれる"というのは正にこつこついう事を言うんだらう。
私が恩讐の彼方に見付けた物は、かけがえの無い家族と親友だった。

「ん。ふあ~~~~~っ……………アレ?」

(!!)

笑っていた私とレイの目の前でベッドの上の少女が目を覚まし、上
半身を起こして大きく伸びをする。私達は咄嗟に不審感を与えない
様、出来るだけ柔らかい表情を作る。少女は隣のベッドで横になっ
ている女性に気付くと、

「あっ!おかーさん?おかーさんっ!?……………きゃっ!!」

「ほら、無理しちゃダメだよ?」

少女はベッドから立ち上がるうとしてバランスを上手に取れず、ふ
らついて床に倒れかけた所を急いでレイが彼女の元に行って身体

を支える。しかしこの女性を母親と呼ぶなんて……見た目も雰囲気も全然親子らしくない。髪の毛の色が方や女性が黒、方や少女が金色という事もあるからかもしれない。

「おばさん誰？」

「私はキミと、キミのお母さんが林の中で倒れていた所を“偶然”見付けて、ここまで運んで来たんだよ」

「お、おかーさんはだいじょーぶなの!？」

私も少女の隣に行って片腕を持ってレイと一緒にベッドへ座らせる。

「貴女のお母さんとはとても身体が弱ってるから、起きるのはまだまだ時間が掛かるでしょうね。でも心配しないで。死ぬような事は無いから大丈夫よ」

「グスツ……よかったよう〜〜!」

彼女は安心感からか眼から涙を零して喜んだ。それが落ち着くまで待つて、改めて名前を名乗る。

「じゃあ自己紹介するね。私はレイ・レイホウ。ここ葛葉探偵事務所で助手をしているの」

「私はレイの友達の相原那緒実よ。よろしくね?」

「わたしはアリシア・テストロッサー!おかーさんのなまえはプレシアっていうんだ!!」

アリシアちゃんはレイが着させたとかわしき大人用のバスローブの袖をパタパタと動かして、その動きの余りの可愛さに笑みが零れた。

「うーん。何時までもその姿なのもアレだし服でも買って来るわ！ナオミはその子の面倒を見て。冷蔵庫の食料は好きに使って良いから」

「解った、お願いね。さあアリシアちゃん、お腹も空いてるでしょうしご飯でも食べましょうか？」

「うんーアリシアおなかぺこぺこだよー」

台所に行って私は自分と彼女の2人分のご飯を作る。途中マダム銀子と葛葉キョウジに電話をして、アリシアちゃんが先に目覚めた事と彼女に不審がられない様に、敢えて彼女の母親が意識を取り戻すまでは年端もいかない少女には“キツイ風貌”をしている2人には事務所には来ない様に伝えた。即席でパスタを作りパンをトースターで焼いて食器に盛り付けると仮眠室に持って行き、アリシアちゃんを椅子に座らせてバスローブの袖を折ってその細い腕を出してから私も席に着く。

「うわーおいしそーーー いただきますー！」

「お母さんには敵わないでしょうけど、どうぞ召し上がれ」

彼女の美味しそうに食べる姿を見て、再び自然と笑みをうかべてしまふ。でも内心ではプレシア・テストロッサが目覚めてからの事裡頭の中が一杯なだった……

次回に続く

第20話 Heaven Is A Place
On Earth(後)

5月12日午後2時 平崎市・葛葉探偵事務所

「『馳走様でした』」

「『ごちそうさまでした〜!』」

「ただいま〜」

私とアリシアちゃんは昼食をとり終わるのとほぼ同時に、レイが子供服と下着を買って事務所に帰ってきた。

「あっ!レイさんおかえりなさい〜」

「おかえりなさいレイ。昼食は?」

「外で食べてきたから良いわ。はいアリシアちゃん!おばさん達からのプレゼントだよー!」

レイは袋から子供服を取り出すと、それを広げてソファーに並べてアリシアちゃんに見せた。

「うわ〜どれもかわいいな〜 どうもありがと〜!」

「どつたしまして さあ、お母さんが目を覚まさないうちに着替えて驚かせちゃおう!」

「うんっ!!」

服を見たアリシアちゃんはヒマワリの花の様にはあつと満面の笑顔になると、レイに支えられながら更衣室に行き、10分程して着替えて戻って来た。彼女は白地にオレンジやピンクの柄の入ったTシャツに黄色のパーカーを羽織り淡い緑色のフリルスカートを履いていて、

「どうかな〜にあつて?」

「うん……明るいアリシアちゃんにピッタリだわ!」

「えへへっ」

「この服を選んだのは私なんだから、ついでに私の事も褒めてくれたって良いのよお〜」

「あー……サスガ、レイサンデスナー」

「ちょっとなんで棒読みになつてんの!!」

私はレイの事を放っておいて、アリシアちゃんの前に行って頭を撫でてあげた。

「お母さん、早く起きると良いわねえ〜」

「うんー絶対ビックリするよ!!」

その後は私とレイはソファでアリシアちゃんの話聴いた。2歳の頃に両親が離婚して父親の顔を知らない事、母親の仕事先である研究所に遊びに行つてはその同僚達に遊んで貰った事など……

このプレシア・テストロッサという人は、一見した感じだと気を失っていても尚、禍々しいオーラを放っている様に見える。しかし彼女の話では家庭と仕事を両立する“出来る女性”というイメージを抱いた。

「ところでおかーさんはなんであんなカッコをしてるの？アリシアはじめてみたよ〜」

「えっ!？」

「えっ!？」

「おかーさんは“けんきゅつじょ”ではたらいてたから、いつもはくいをきてたんだもんー！こんなおとぎばなしにでてくる“まじょ”みたいなカッコなんてしらないよ!!」

アリシアちゃんの言葉に私達は絶句する。どういう事なの……

「……アリシアちゃん。ちょっと訊きたいことがあるんだけど」

「なあ」

「ひょっとしてアリシアちゃんにお姉さんっているっ？」

「ううん……アリシアはひとりっこだよっ」

予想の斜め上に行く答えが帰ってきて更に絶句した……自身と母親の話の聴いていて、クローンにしては妙に“話が出来過ぎている”と思っていたけれど、これは想像以上に複雑な事態があったのかもしれない。

「ねえ。お母さんの歳って解るっ？」

「うー……んっ、たしか33さいだったかなあって、どうして？」

「いや何となく訊いてみただけだから……」（ナオミ、ちよっ）

「……解ったわ。（おばさん達ちよっとお話があるからいい子にしてなさいね？」

「う、うん」

私の隣に来たレイが耳打ちをして来たんで2人で事務所の方に行き、アリシアちゃんに聞こえない様、小声で話し始めた。

「（プレシア・テストロツサって衰弱しているのもあるだろうけど、3歳にしては妙に老け込んでると思わない？）」

「（そうね……私達と同じ位の歳と見て良いかもしれない）」

「（アリシアちゃんの話聞いていてしっくりこない部分もあるし……一人っ子ってのがそもそもおかしいよね）」

「（もしかしたら、アリシアちゃんがクローン人間だという当初の予想を改めないといけないかも知れない。コレは間違いなく裏があるわ）」

「（謎はアリシアちゃんとフェイトちゃんという、まるで“双子の様にそっくりな2人の人間”の関係性にありそうね……）」

私達は見えない“真実”に揃って溜息をつく。そもそもこの親子

自体、何処から飛んできたのかすら解らない。全てはプレシア・テストタロツサが目覚めるのを待つしか無いんでしょうね……

「あっ!!おかーさん!!!」

仮眠室からアリシアちゃんの大声が聞こえてきたんで、急いで戻ると運が良い事に丁度私達が目覚めるのを心待ちにしていたプレシア・テストタロツサが意識を取り戻した所だった。

「ア……アリシア……なの?」

「どーしたのおかーさん?なんかうまくあるけないけどアリシアはげんきだよー」

「あ、あぁっ……」

私は咄嗟にアリシアちゃんを母親のベットへと連れて行ってそこに座らせ、直ぐ様離れた。プレシア・テストタロツサは眼に大粒の涙を浮かべている事が離れた場所からでも解り、内心とても驚いてしまっ

「アリシア……私のアリシア……」ごめんなさい。本当にごめんなさいね……」

「どーしてないてるの?どこかいたいばしょでもあるの??」

むせび泣く彼女はアリシアちゃんの身体を抱きしめ、嗚咽混じりにひたすら謝っていた……しかし当のアリシアちゃんは、何故自分の母親が泣いているのか解らないみたいで頭の上にクエッションマークを浮かべている。彼女が落ち着くまで待っている間、レイは葛葉キョウジとマダム銀子を事務所へ呼び寄せ、私は事情聴取のために手

帳に質問項目をまとめる事にした。

5月12日午後4時 平崎市・葛葉探偵事務所

「ごめんなさい。みつともない所を見せてしまって……私はプレシ
ア・テスタロッサ。この子は私の娘のアリシアです。アリシアにこん
なに良い洋服を買っていただき、本当に感謝の言葉もありません」

「いえいえ、お二方に喜んでいただき光栄です。私は葛葉探偵事務所
の助手、麗鈴舫レイ・レイハウです。こちらが所長の葛葉キョウジ」

「……」

「私はマダム銀子と呼ばれている者よ。表向きはスナックの経営者だ
けど裏ではキョウジとレイのお目付け役をしているわ」

「……私は麗鈴舫の友人の相原那緒実です。以後お見知り置きを」

彼女の上半身をベッドから起こさせて各自名前を名乗り、早速事情
聴取を開始する。因みにマダム銀子が来た時、アリシアちゃんはその
姿と声に顔を引き攣らせて泣きそうになったのをプレシア・テスタ
ロッサがどうにかなだめすかせていたりする。

(BGM・葛葉探偵事務所)

「早速ですがプレシアさん。貴女が何故海鳴市の山中に倒れていたのか、何故娘さんがカプセルの様なモノに入っていたのかをお聞かせ願えないでしょうか？」

「そうですね。その前に……アリシア？」

「なあに？」

「これからお母さんは“とっても難しい話”をしなくちゃいけないの。お願いだから終わるまで隣の部屋に行っててくれないかしら」

「いやだったアリシアもここにいる!!」

「アリシアちゃん……これからする“お話”はアリシアちゃんには聞かせられない、とっても大変なお話なの。だからどうか隣の部屋に……ね？」

「アリシアだっておかーさんにききたいことあるもんっ！だからここにいる!!」

散々駄々をこねるアリシアちゃんに、ついにプレシアさんは観念したのか表情を険しいものにして語り始める……その内容はアリシアちゃんを除いた私達を驚愕させるものだった。彼女の話の要約すると、

出身は“ミッドチルダ”という次元世界で、時空管理局の本局もそこに存在している。

アリシアちゃんが言っていた通り、プレシアさんは元々新型動力システムの開発にあたっていた研究者だったが、ある時重大な欠陥を発見したものの上層部がそれを握り潰した拳句の果てに完成した動力炉は大事故を起こしてしまった。しかし上層部は時空管理局と結

託し、すべての罪をプレシアさん一人に擦り付けた。

大事故の影響で不治の病に冒されたものの、研究所より得た賠償金を元に“時の庭園”と呼ばれる、时空管理局の使用する魔法技術と同じ物で作られた移動式庭園を購入、更に地方での閑職にありながら“独自の研究”を進め、ある“成果”を造り出した。

臨海公園で私が晃祐を経由してフェイトちゃんに渡した“ジュエルシード”は、彼女がフェイトちゃんに集めさせていた物で、ジュエルシードは力を開放することによって持ち主の願望を叶える力がある。

巨大樹や人面樹等が海鳴市に出現した一連の“現象”はジュエルシードによるもの。“願望を歪んだ形で叶える”という事はプレシアさん自身知らなかった。

プレシアさんは時の庭園が崩壊した時に“虚数空間”という一種の亜空間の様な所に投げ出され、そこに現れた“預言者”と名乗る何者かによって、“ヤタガラスに協力する事を条件”に海鳴市山中に転移して来た。

他にも元时空管理局員だった“あの人”が、私達の前に現れた時に得られた数多くの“情報”が彼女の証言によって改めて裏付けられる事となった。

「ありがとうございます。お身体の方は大丈夫ですか？何でしたら休憩でも」

「いいえ。大丈夫です」

「……解りました。さて、此処からは私とナオミの個人的な質問です。ナオミお願い」

レイの言葉に、遂に来たか！と思って更に気を引き締め、質問を口にした。

「実は先程、アリシアちゃんから一人っ子だという事を聞いたんですが、実は以前フェイトちゃんにも会った事がありました……」

「何故アリシアとフェイトが似ているか……でしょう？」

「おかーさん。さっきからずっとおもってたんだけど、フェイトって……だれ？」

「アリシア良い？これからお母さんが話す事はきっとアリシアの訊きたい事だと思う。でもこの話を聴いたら、アリシアはきっと私の事を嫌いになるかもしれない……」

「そんなコトぜったいないよーアリシア、おかーさんのこときらいになんてならないっ」

「ありがとう　ではお話ししよう」

彼女の語り出した内容は、私とレイの疑問を解決させるには充分なモノだった。しかしそれは先程の話を遥かに凌ぐモノで、幾度の修羅場を潜り抜けて私達ですら身震いする戦慄の内容だった。同様に要約すると、

アリシアちゃんが生まれたのは12年前で、7年前の動力炉の事故に巻き込まれてアリシアちゃんは僅か5歳で死亡した。(即ちアリシアさんの現在の年齢は40歳という事になり、本来ならアリシアちゃんは匠真と同じ12歳になるはずだった)

事故後の“独自の研究”とは、管理局が秘密裏に行っていた人造生命体製作プロジェクト“F・A・T・E”の成果を応用し、4年前にアリシアちゃんの細胞を使って彼女と寸分違わぬ素体を造り上げ、その記憶を移したものの完全なコピーにならなかったために記憶

を消去し、プロジェクトの名前からそのコピーを“フェイト”と名付けた。

完全なコピーにならなかったが故に、最初はフェイトちゃんを人形扱いをして虐待していたが、ある時彼女の余りの献身振りと自身の余りの狂乱振りに気付いてしまい母親としての自我を取り戻した。しかし既にジュエルシードを収集させ始めた後だったため、引くにも引かれなくなって以前同様の扱いをし続けてしまった。

ジュエルシードを集めさせたのは、アルハザードでアリシアちゃんを蘇らせるためだった。

虚数空間で遭遇した“預言者”によってプレシアさんの病は軽くなり、アリシアちゃんも蘇生した。

「私は人間として、母親として最低な事をやってしまったんです」

「……………お気持ちは解りますわ。私にも子どもがいますから」

「!!
!!!」

葛葉キョウジが両手でテーブルを強く叩くと、プレシアさんの所に行って大声で怒鳴り散らし、罵声を容赦無く浴びせ掛ける……………確かに幾らアリシアちゃんのコピーが出来なかったからと言って、曲がりなりに一人の人間を“人形”扱いしたり虐待をしたりした事は許されるべきではない。それにしても大人気ない事をして…………

「おじちゃんやめてえ……………やめてよお……………っ…」

「アリシア……………」

アリシアちゃんが泣き叫び始めてハツとなった彼は、いたたまれない顔をして直ぐに仮眠室から出て行ってしまった。私は顔をベッドの方に戻すと、顔を涙でグチャグチャに濡らしたアリシアちゃんが、

「おかしさんもっ！」

パチン！

「……っ!?」

「なんでっ……なんでそんなことしたのっ！なんでフェイトのことをっ、アリスアの『いもつと』としてみてあげなかったのっ!!そんなの……ちっともうれしくなんかないよおっ!!」

ああ……アリスアちゃんはなんて優しい子なんだろう。まだ5歳だというのに自分のクローンを妹と呼ぶなんて。頬を平手打ちされて呆然としていたプレシアさんは我に返ると、胸元で泣き付くアリスアちゃんの頭を撫でてあやししながら語り掛ける。

「ごめんなさい……私は結局、自分の事しか考えて無い最悪な人間だったわ。これからは絶対にこういう事をしないし、もしフェイトに会う機会があったら今迄の事も謝るわ……だからもう泣かないで。この地球こそが天^{アルハザード}国だと思つ事にしたから」

「ひっく……ぐすっ……やくそくだよ?」

2人は小指を立てて互いに絡ませる。

「指切りげんまん嘘付いたら雷千回落すとす 指切った!」

「ゆびきりげんまんウソついたらカミナリせんかいおくとすっ
ゆびきったっ!」

親子の一連の言動に私はその光景が微笑ましくなり、自然と笑みを浮かべてしまう。レイも同様に笑みを浮かべ、一方でマダム銀子はヤ

レヤレという表情をしていた。

「では、貴方達の身柄は私達ヤタガラスが責任を持って保護させていただくわ」

「万が一時空管理局にお2人が生きている事を察知されては双方共に困りますので、暫くはご不便をお掛けしますがどうかご了承ください」

「ええ。アリシア共々宜しくお願いします。私に出来る事なら何だつて協力しますので」

テストロツサ親子の処遇は、時空管理局の脅威が去るまで平崎市内のヤタガラス支部で保護する事で決まり、プレシアさんは念のために、半年程支部附属の療養所で治療とリハビリを受けて貰い、また私の家に「闇の書」とその主が住んでいる事から、彼女には最初に闇の書関連の研究に参加して貰う事になった。因みにアリシアちゃんは現在、泣き疲れてぐっすりと眠ってしまっている。

「ふむ……那緒実さんの予想通り、管理局は暫く地球に居座りそうですね。もしその間に闇の書が覚醒し、中から「守護騎士」達も現れると非常に厄介な事になります」

「=守護騎士=とは……？」

「闇の書には『ヴォルケンリッター雲の騎士』という、闇の書を守る複数の魔法

生命体がプログラミングされているらしいんですけど、聞いた話によると騎士達は感情の無い戦闘マシンの様な存在で、闇の書によってもたらされた被害の大半は彼らによって引き起こされたものだそうです」

「それってとんでもなくマズい事じゃあ……」

「それじゃ当面の目標は闇の書の覚醒を阻止する事になるわね。"あの人"にも訊いて方策を練らないと」

「こちらにも闇の書を知っている人がいるんですか？」

「え、ええ……その方は元時空管理局の高官で、これまで私達に色々な情報を提供していただいていますわ。闇の書の主であるはやてちゃんを私の家に引き取ったのも、その方の助言が有ったからなんです。なんでも11年前の覚醒の際に部下を失ったらしいんですけど、上層部は事件後に遺族に何ら保険金を払ったりする事も無かったみたいで、全てその方が肩代わりに生活保障を行ったと聞きました」

「……それで管理局に嫌気が差して辞めたと。つくづく奴等はふざけた事をしますね」

その後もプレシアさんから管理局の腐敗した側面を聞かされた。はやてちゃんのためにも万が一武力衝突をした場合、あんな連中に絶対に負けてたまるもんですか！

次回に続く

第21話 根底にある"焦燥"

高町家で訓練を始めて4日が経った。土郎さんとの訓練は今の所、"ひたすら檜の木剣で木人を打ち込む"という単純なものだ。土郎さん曰く「中体連の試合も視野に入れつつ今一度、腕の動きを見直してより確実に、より鋭く強力な振りを修得する」との事だった。しかしながら打ち込む対象が硬い木人だけあって、2 30回位打つと木剣から伝わる衝撃で腕が痺れて来て、初回の訓練はマトモな事が出来ないまま終わってしまったという……自宅の庭で更に素振りをしていとイカンなあ〜

つてな事で、俺は授業が終わると、急遽部活が休みになったんで直ぐに稽古場へ向ったのだった。

5月15日午後3時 高町家稽古場

「こんちわ〜相原です!! 今日もヨロシクお願いしますっ!!!!
……………つて、アレ?」

何時もなら土郎さんが稽古場で待っていてくれるはずなのに、今日は誰も居ないみたいだ。

「こんちわ〜!! 土郎さん!? 恭也さん!? 美由希さん!? 誰か居ませんかあ〜……………!?!?」

俺は大声を張り上げて呼んでみるけど、一向に反応が無い。店の方が忙しいのかなあ? 一応そっちの方にも顔を出してみるか………と、思って稽古場を後にしようとする、足元に何時ぞやのイタチが立っていたんで、しゃがみ込んで言葉を掛ける。

「お？ユーノじゃねえか。何時の間に戻ってきたんだ？」

『どうも晃祐さん。僕は今朝アースラから帰って来たばかりです』

「アースラってえと……あの時空管理局の戦艦みたいなヤツか。故郷の世界には帰らなかったんだな」

『なのはがもっと魔法の事を勉強したいと言っていたので、暫くこちらでお世話になる事にしたんです……でもここ1ヶ月で恐ろしい位の成長を遂げてますから、多分半年と経たずに帰る事になるでしょうね』

「巨大樹をブチ抜く位のビーム」を撃てんのに更に成長したとかマジ無えわ……って、コイツに会えたら訊きたい事が有ったんだっただ。

「で、お前もなのはちゃんも時空管理局に味方するにしたのか？」

『一応僕達は、ロストロギアとそれに関わる事件の当事者ですからね。正直言うと、故郷の一族から管理局に関する良い話は大して聞いたことが無いので、個人的には余り関わりたく無いんですけど……』

「なのはちゃんがノリノリだよ」

『「ごく普通の生活」に戻るって考えは無いみたいですね。中学校を卒業したら管理局に正式に志願すると言っていましたし』

(「……こりゃ「敵」に回す可能性が高くなっちゃったなあ。俺達が戦って果たして勝てる相手なんだろうつかねえ」)

『どうしたんですか？気難しい顔をして……』

あ、やべえ。ついつい顔に出ちまったか！こついう所が俺の悪い所だよなあ。

「い、いやなんでもない。こつちの事さ！ハハ、ハハハハ……はあ……」

ユーノが小首を傾げて俺の様子を見ている。コイツ、歳の割にはかなりの洞察力があると見た。こりゃへ々な事を顔や口に出せねえなあ〜

『そついえば、どうして稽古場の方にいるんですか？』

「あ？……ああ。土郎さんは母さんが悪魔召喚師だって事、学生時代から知ってたみたいだよ。母さんの言付けで最近“色々”稽古をつけて貰ってたんだよ。元々剣道をやってるってのもあるけど、ちょっと“思う所”もあってな〜」

『“やっぱり”公園での件”ですか？』

「母さんの事見たろ？あんなにチートなのに、この間“身体の衰えを感じてきているからそろそろ後継者が欲しい”って言ってたんだよ。俺もあの時初めて悪魔を召喚しちまった手前、本気で母さんの後を継いで悪魔召喚師の道を歩んでみようと思ってるさ。来年高校受験があるけど、どうにか両立して訓練して行くつもりだよ」

俺は“真の目的”を隠しつつ本当にあった事を言った　嘘は吐いてないから問題無いだろ？そついや翌々考えてみたら、傍から見ただけ俺が“イタチに向かって独り言を呟いている”という、なんともシュールな光景に見えるんだろうな……と感じて内心苦笑いをす

る。するよ、

「ユーノくん！何処なの~~~~~!?」

「お、ほら「魔砲少女」が呼びだせ？」

『なんか……とっても違う「感じ」に聞こえたんですけど』

「気にすんなってば……オラ行った行った！俺の訓練なんぞ見たってクソも面白く無えぞ〜」

俺はユーノに「しっしっ」とやると、仕方なしになのはちゃんの方に向かって走っていった。どうやら土郎さんも全然出てくる気配が無いから、勝手に上がらせて貰って勝手に打ち込みでもやっているとするか！

「疲れている所すまない。なのはは稽古場の方に行って見て来てくれないか？きつと彼の事だから既に自主練習をやっているとは思っている。あと、一応スポーツドリンクでも持って行ってくれ」

「う、うん」

お店でお父さんとお母さんの手伝いをしていると、お父さんから稽古頼まれ事をされて、私はユーノ君を肩に乗せて家に戻り、廊下を歩いて行くと向こう側から叫び声と共に、「強く何かを叩く音」が何回も聞こえてきたの。稽古場の前に来ると襖を少しずらして中の様子

を伺つと、以前公園で会った晃祐さんが木刀を持ってお兄ちゃんとお姉ちゃんが練習に使う木人に向かってひたすら打ち込みをしていた。

「凄い真剣な表情をしてるね……」

「うん……ああ言うのが鬼気迫る顔って言うんだろっね」

晃祐さんは汗だくで息も絶え絶え、腕も痺れて木刀の振りが遅くなっても打ち込みをやめようとしなない。晃祐さんの姿を見てみると、魔法を使ってる私はなんだか申し訳無い気持ちになるの……

「 良いかいなのは。世界には晃祐さんみたいに、血の滲む様な努力をしても“遙か上”を目指そうとする人がいる。なのは魔法の素質は天才と言っても良い。けど、得てして天才というのは努力を軽視する傾向があるんだ。将来管理局で高官になつたとしても、あいつ人達の事を絶対に忘れちゃいけないよ」

「解つたの。絶対忘れないっ……」

木刀が床に落ちる音がしてまた中を見ると、晃祐さんが床にへたり込んで肩で息をしていた。私はスポーツドリンクを差し出そうと襖を開けて近付いて行く。

「くんには晃祐さん。コレ持って来たんでどうぞー！」

「んあ？くんちわなのはちゃん……ごめんな、勝手にやらせて貰ってるよ」

「いえいえ」

晃祐さんにスポーツドリンクを手渡すと、少し離れて私も床に座つ

た。

「そういえばどうして私の家で練習してるんですか？」

「あれ、ユーノから聴いて無いんかい？」

えっ？いなくなって探しに外に出たら庭の方から来たけど、ユーノ君あの時晃祐さんと話してたんだ……私がユーノ君を見ると、『その、ごめん』と言って晃祐さんから聞いた事を話してくれたの。

「なのはちゃんがアースラに行っている間にこっちだって色々あったんだ。俺の事で土郎さん達を責めたりしないでくれよ？」

「……はい。私が家に居ないと言える訳無いですもんね」

晃祐さんが大の字になって床に寝そべると、ふいふいと言って目を瞑って身動きしなくなる。

「あっ、あの……。あんまり無理しちゃダメですよ？」へろへろになって練習してても全く意味が無い……ってお兄ちゃんが前に」

「それ、恭也さんと土郎さんにも結構口酸っぱく言われているよ。でも何と言っか、早く戦士としての能力を上達させたいっていう焦りが出ちゃってなあ。解っちゃいるけどやめられないってヤツかな。ほら、俺はなのはちゃんと違って“ビームを撃つ才能”なんて無いから、命を張ってフルコンタクトの戦闘をしなくちゃいけないんだ」

「(ビームって……) あ、でもでも焦りは命取りって……」

「全くだよ耳が痛えぜ畜生！剣道部で“本番に弱い”っていつつも言われて、それが解ってるからこそ返って焦っちまうんだよなあ。どう

にか“死ぬ前”に修正してある程度冷静な判断が出来る様にしないと”

晃祐さんの“死ぬ前に”という言葉に私はハツとなる。バリアジャケツトのある私と違って、悪魔召喚師は戦争に行ってる兵士と同じで、常に“死”というモノと戦わなくちゃいけないだ……サポーターもしてくれるデバイスなんて無いし、全ては自分自身の判断だけで戦いを潜り抜けなくちゃいけないの。

「さて！また全身全霊で頑張るとしますかね!!」

そう言っつて晃祐さんは木刀を持って立ち上がり、再び木人に打ち込みを始めたのを私はそのまま後ろで黙って見てる事しか出来なかった。

「すまないねえ晃祐君……ってなのはもいたのかい？」

「あっ、お父さん！」

打ち込みを一旦止めて後ろを振り向くと土郎さんがいて、こちらに近付いて来ていた。

「すみません。勝手にやらせて貰ってますよ」

「いや、むしろ勝手にやっつて貰ってないと困る位だよ。これから先は

地獄の様な訓練が待ち受けているんだからね」

「はい…」

「よし、それじゃあ試しに出来る所まで打ち込みをしてみてください」

俺は言われた通り、打ち込みを行った……しかしここ数日の打ち込みで腕にガタが来ていたのか、20回を超えた辺りから右肘に激痛が走って、

ガタンッ！

「ぐっ……肘が」

俺の手から勝手に木剣が落ち、酷い痛さにうずくまって右肘を押さえる。すると何時の間にか土郎さんとなのはちゃんが俺の前に来ていた。

「だ、大丈夫ですかっ!？」

「ちょっと肘を見せてくれないだろうか」

俺は土郎さんに肘を見せると、

「晃祐君が打ち込みを始めてから数日、私は大して指導らしい指導をしないで見ていたけれど、今やっと50回も行かずに疲弊する理由がハッキリとしたものになったよ　君は一振り一振り全力で打ち込みをしているね?」

「そりゃあ……剣道なんかと違って常時100%の力を込めないと悪魔なんて倒せないでしょうよ。それでこそ“一撃必殺の精神”で臨

まないと逆にこっちが殺られちまいますって」

「太郎さんは俺の言葉を聞くと、急に顔付きが険しいものへと変わった。何か変な事言っただか？」

「それは大きな間違いだよ。君は恭也と美由希から何を教わったんだ？ 今君に必要なものは攻撃技術よりも防御・回避技術だぞ。冷静に敵の行動を見極めも出来無いクセに無闇矢鱈に仕掛けようとする事の方が命を捨てる可能性は高い」

「晃祐さん……やっぱり焦ってるの。牽制もしないで最初から本命の攻撃を繰り出すなんて」

「太郎さんはまだしも、なのはちゃんにまで言われるとか　っざけんじゃねえぞクソが!!」

「じゃあどうすりゃ良いんだよ!! 黙って後ろから見てるって言うのかよ!! 俺アそんなの嫌だね! 幾ら仲魔がいたとしてもトドメは俺が刺さないと無意味じゃねえかよ!! なんだ」俺が守ってる「内に入らねえぜ!!」　「晃祐君」

「少し、頭を冷やそうか……」

次の瞬間俺の身体は宙を舞い、頭から床に叩き付けられていた。

「ッ!!」

「気が付いたようだね」

意識を取り戻して辺りを見回すと、外はすっかり日も落ちて薄暗く
なっていた。

「土郎さん、俺は……」

「すまない。まさか頭から落ちて失神するとは思ってなかったよ。打
ち所が悪ければ半身不随になっていたかもしれない」

「「うっち」そ出過ぎた真似をしてすいませんでした……ダメダメっす
ね、俺」

打った頭と痛めた右肘を左手で触って確認しながら土郎さんに
謝った。すると俺の肩を軽く叩いて、

「晃祐君の気持ちも解らん訳でも無い……しかし君は自分自身を追い
込み過ぎていて、それが余計な焦りを生んでいる様に思える。確かに
緊張感も大事だけど少し心に余裕を持たないとダメだな」

励ましてアドバイスをくれているみたいだけど、俺は益々惨めな気
持ちになってしまう。

「余裕って……それじゃ手を抜いてるのと変わらないじゃないっす
か」

「余裕が出来る事で視野も広くなるし、戦いにおいても様々な作戦を
取る事だって出来る。君はその所を履き違えている様だね」

「したっけどござすりゃ余裕が出来るって言うんですか……俺、何かなんだかサッパリ解らなくなっちまいましたよ……」

すると土郎さんは、「ふむ」と言っ腕を組み考えだした。

「あ〜？」

「よし……こうなったら晃祐君には実戦で本当に死線を越えてもらうしか無いだろう。荒療治どころの比じゃないが自分自身の欠点も痛感出来るし、それを経験してからここで訓練をした方がより身に付く可能性が高い。それまで訓練は休みだ」

「……………は？」

突然何て事言い出すんだこの人は！ド素人の俺に死ねって言ってる様なモンじゃねえか!!

「バカは死ななきゃ直らない」とは違っが、私は人間というものは死ぬ間際が一番冷静になれるのだと思っている。あの時ああすれば良かった」という後悔の念が湧いて来て初めて、自身の愚かさ気が付くんだ。それに 人間死にそうになれば何だっける生き物だ。晃祐君に仲魔がいる事の「ありがたみ」を身を持って知るべきだろう。藁にもすがる思いで生きて再びここに来てみせる!!」

俺は土郎さんの強い言葉に、ただただ頷く他無かった。

次回に続く

第22話 First Battle (前)

5月17日午後5時 海鳴市某所

「ふう〜終わった終わったあ〜」

「アリサちゃんも発表会の課題曲ほとんど全部弾ける様になっただね
！」

「お疲れ様でした」

「お疲れ様〜」

あたしとすずかがバイオリンのレッスンを終えると、すずかんとこのノエルとファリンが外で待っていてくれた。何時もは鮫島が迎えに来るけど、今日は所用でここまで来れないから2人が代わりに迎えに来てくれたみたいね。

「それではすずかお嬢様、アリサお嬢様。参りましょうか」

「うん〜」

「はい」

「参りましょ〜」

ふとアタシ達の後ろに付いて歩く2人をチラ見すると、いつもすずかの家にいる時のメイド服じゃなくて私服だったのが気になった。どうしてなんだろう？

「ねえさすが、2人共何でメイド服じゃないの？」

「(実は私、メイド服の2人を連れて歩くのがちょっと恥ずかしくなっちゃって、”外を出歩く時は私服で来て欲しい”って言ったからだよ)」

……まあ、市井の人間にしてみれば、メイドなんて”そういう喫茶店”のイメージが強いだろっから普通に街を歩いてたっけギョツとするのは間違いないし、あたしにも何時でも燕尾服の鮫島がいるからずすかの気持ちも解らない訳じゃない。

そんな事を考えている内に何時の間にか駐車場まで来ていて、後ろにいたはずのファリンが車の後ろの座席のドアを開けてあたし達が乗るのを待っていた。ノエルもそうだけど、これくらい何時もの事だしもう慣れたからいちいち驚く事も無くなったわ。

「ちゅあむじゅんじゅんじゅん〜」

「ありがとうファリン」

「お2人ともシートベルトはなさいましたでしょうか？」

最後に助手席にファリンが乗り込むのを確認すると、ノエルは車のエンジンをかけて発進させた。でも今の時間はちょうど帰宅のラッシュで大通りはどこも混雑していたり、運悪く信号に引っかかったりして中々車が前に進まない。

「はあ〜ったくホントにツイてないわー……」
「レじゃあ何時まで経っても帰れないじゃないのー！」

「アリサちゃん落ち着いて。」
「レばっかりは仕方無いよ」

「あーもう6時ですよ。ちょっと急がないとマズいかもです」

「では、少々強引ですが車通りの少ない中通りに入って近道する事に致しましょっ」

ノエルがショートカットを提案して中通りに車を進めていく。その後、私はずるかやファリンと世間話をしてしていると突然急ブレーキが掛かって、危つく前の座席に頭をぶつけそうになった。

「ちよっ！なにやってんのよ危ないじゃないの!!」

「あうっビックリしたー!」

「どうしたのノエル？」

「申し訳ございません。今何かが目の前を横切ったので、ついブレーキを踏んでしまいました」

ひょっとして犬が飛び出してきたとか？だったらさっさと見付けて、二度とこんな危ない事をしない様に私がお説教しないといけないわね！なんて事を思ってるよ、

「飛び出してきたのって、ひょっとして猫だったりして？」

「違うって犬に決まってるじゃない！あたしが確かめてくるから待ってなさいっ」

「あっ、アリサちゃん私も行くよ!」

「ふ、2人共待ってよお〜」

路地に入り込んで少し歩き回っていると、塀の影に何かがあるのが

見えて、あたし達3人は驚かさない様に慎重に近付く……すると、ゴミ収集場に置いてある“大きなポリバケツみたいなヤツ”に、紫色をした“何か”が頭を突っ込んでその中のゴミを漁っていた。

「な、なんなのよアイツ……」

「猫でも、犬でも……ない？」

“ソイツ”はポリバケツから頭を出して地面に経つと、身体よりも大きい頭を細かく震わせながら左右に振ってあたし達を見た。

『ウルウアア……エモノいたぞおおー！』

そう何とも言えない奇怪な声で叫ぶと、曲がり角の塀の影から同じ姿をしたヤツがもう1匹現れて同じ様に、

『エモノ？うおれのエモノキタアアツ！！』

そう叫ぶと、2匹はジリジリとあたし達に向かってにじり寄って来て、今にも襲い掛かって来そうな感じだ……でも見た目からしてそんなに足も速そうな感じじゃないし、今の内に逃げればどうにかなりそうね。

「……ねえ2人共、コレひよっとしなくてもヤバいんじゃない？」

「は、早く逃げようよぉ〜」

「え？ええ、そうね！」

あたし達3人は、直ぐに元来た道を走って引き返そうとした……けど

『 ニガスカ！ニガスカ!! 』

後ろを振り向くと逃げ道を塞ぐ様に3匹目がいて、あたし達は文字通り"袋の中のネズミ"になってしまった。でも全ツ然ツツ！諦めてなんか無いんだから！

「嘘……そんな事って」

「こんなひ弱そうなヤツ等、体当たりしても逃げれば良いじゃない
行くわよッ!!」

「ア、アリサちゃん!？」

あたしはカバンの中から"いざと言つ時に"と、鮫島から渡されていた護身のスタンガンを取り出してスイッチを入れ、正面の"ヤツ"に全速力で体当たりを仕掛ける。

『 ウオ？ウルオアアアアッ
!?!? 』

「やったあー！さあお嬢様、早く行きましょう!!」

「う、うんっ!」

アタシの体当たりで吹っ飛んだ"ソイツ"がスタンガンの強烈な電撃ですぐに立ち上がれないみたいで、それを見たすずかとファリンはあたしに続いて車の止まっている方に向かって走り出した……

「はあ……はあっ……」

「ひい……ふう……」

「ふう……ふう……もうダメえ〜」

「ど、どうにか撒いたみたいね……」

「はあ……はあ……あれ？車が止まった場所と全然違うような気がするよ？」

あたしは近くの電柱に背中を預け、ファリンはしゃがみ込んで休もうとした時、すずかの言葉を聞いて辺りを見回すと元来た道と全く違う道でしかも路地の行き止まりに来ていた事が解った。もしこんな所で見付けられでもしたらタダじゃ済まないわね……

『……ケタ！ミツケタ！』

『ユルサン！ユルサン!!』

『エモノオオオ!!』

「へ？嘘お！もう見付けられたのっ!？」

「大丈夫ファリン？」

「あ、はい。お嬢……うわわわっ!!」

あたしがヤツらの方に身体を向けようとする、ファリンがフラついて立たせようとしたすずかと一緒に倒れ込んでしまった……全速力で走ったから疲れるのも無理ないけど、おかげで絶対絶命の大ピンチになっちゃったじゃない！

「2人共大丈夫なの!？」

「痛たた……捻挫しちゃったかも」

「はわわ……お嬢様申し訳ございませんですう！」

『イマダ！イケエエエ!!』

「あ！、アリサちゃんっ!!!!」

「…………ん？」

2人の方に走り寄った事が結果的に“ヤツらに背中を向ける格好”になったのをすずかの叫びで気付きすぐ振り返った時には、もう既に“ヤツ”らの内の1匹があたし達目掛けて飛びかかって来ていて、あたしはそれに対して全く身動きが出来ずに眺めているしかなかった……………

「い、イヤアアアアアアアアアアッ!!!!」

ヒュン!!

「面妖な怪物共め、そこまでだ!」

「へ…………？」

ハッ、と我に返ると飛び掛って来ていた“ヤツ”が、何時の間にか身体にナイフが突き刺さった状態で悶絶していた。それを見たあたしは声のした方に顔を向けると、塀の上で何本ものナイフを両手の指に挟んだノエルが立っていた。

「ノエル!」

「お姉ちゃん!」

「……無事ですか？アリサお嬢様!」

「あ……う、うん」

『ヨクモ……ヨクモ……ウルイイイ……シネエ！シネエエエ！』

悶絶していた「ヤツ」が立ち上がって身体に突き刺さったナイフを抜くと、他の2匹がそいつの横に並び立ち、塀の上からあたし達の前に飛び降りたノエルも「ヤツら」に対して構えを取る。

『クワセロ！クワセロオオオオ！』

『エモノオ！うおれのエモノオオ！』

「お嬢様達とファリンをやらせはしない……！」

「大丈夫なの？」

「ご心配要りませんるかお嬢様。私はお嬢様方をお守りするための様々な鍛錬を致しておりますので……例えこの命に代えてでもお嬢様をお守り致します。さあ……怪物共、このノエル・K・エアリヒカイトが相手だ……！」

「お姉様……」

『『『ウルウアアアアッ！！』』』

「相原、肘の具合はどうだい？」

「ごめん健さん。地区予選まであと1ヶ月だったのに迷惑掛けて……」

部活が終わって家に帰ろうと歩いていると、後ろから部長の高倉健太郎が声を掛けてきた。俺は肘を痛めているんで昨日から見学するだけという事になっている。こんな大事な時に穴を空けてしまうだなんて、つくづく俺自身の事が嫌になった。健さんが俺に追い付くと、2人並んで歩き始める。

「なあに、大丈夫さ。万が一予選に出られなくても試合会場に居てくれるだけありがたいよ」

「ホントごめんな……」

「で、ここ最近部活が終わったら翠屋の稽古場に行って、また練習をしてるって聞いたんだけど本当なのか？」

「ああ……それでこのザマだ」

俺はジャージを捲って、健さんに右肘のテーピングを見せる。

「相原……お前、周りに色々言われてるからって気負い過ぎるのもどうかと思うぞ？やる気は認めるけど、どうも空回りしてる様にしか見えなげ」

「昨日今日と見学してて良く解ったよ。普段の俺自身がどれだけバカだったかって事がさ」

“ 焦りは命取りになる ”、か。焦ったせいで剣道をする上で “ 命 ”

とも言える肘を痛めただけじゃなく、剣道部の皆にも迷惑を掛けちゃった事を激しく後悔する。でも返ってこっとなってくれたお陰で、見学しつつ頭の中で自分自身を冷静に見つめ直すことが出来た。健さんを始めとする他の3年生が俺の穴を埋めようと必死になって練習に打ち込む様子や、後輩達が度々俺の様子を伺いに来たりアドバイスを求めて来たりする姿に、初めて俺自身どれだけ周りが見えてなかったかという事に気付かされたのだった。

「相原。個人的な事を言うと、予選前までに十割とは言わない。でもせめて七割位までには肘の状態を戻しておいて欲しい。やっぱり団体戦には副部長のお前がいないと」

「……それは噛ませ犬って意味でか？」

「そんなバカな！お前は周りが言う程弱くなんてない。副部長に指名されたのも、先生や俺達がちゃんとお前の実力を解っているからさ
おっと、こっまでだね。それじゃあ」

「すまん。氣い付けてな」

大通りの交差点まで来ると、健さんは横断歩道を渡って向こう側まで行くと振り返って俺に手を挙げ、俺もそれを見て手を軽く振り右に曲がって家に向かって再び歩き出した。ふと何となく少し進んだ所の路地に入ってからGUMPを左手で取り出し、徐ろにコンソールを展開させた。

「?!？」

俺が右半面のスクリーンを見ると、普段は青く光るはずのEAIが赤く点滅していて、近くに悪魔の反応がある事を知る。でもこの右肘の状態じゃマトモに戦う事なんて出来ないだろうし、いっその事こ

は母さんと呼ぶべきなんだろうかと考えを巡らしていると……

い、イヤアアアアアアアアアアッ!!!

女性のものと思われる悲鳴が辺りに響き渡った。畜生！躊躇っている暇は無いつてのかわ……もうこうなったら一か八か左腕一本でやってやるしかない!!

俺はリュックを路傍に置いてGUMPを左手で取り出すと、物音を立てないように慎重に進んで曲がり角まで進み、建物の影から悲鳴の聞こえた方を伺ってみた。

『ウルイイイ……シネエ！シネエエエ！』

『クワセロ！クワセロオオオ！』

『エモノオ！うおれのエモノオオ！』

「お嬢様達とファリンをやらせはしない……！」

外国人女性が3体の頭でつかちでチビな悪魔と相対していて、その後ろ側には2人の少女が怪我をしてしまったのか、袋小路にへたり込んで身動きがとれなくなってしまっていて、その側でもう1人の少女が2人に付き添っていた。俺は暗がりにいる少女達を目を凝らして見てみると、その内の2人が髪型や顔つきから以前会ったすずかちゃんとアリサちゃんだという事が解った。それから再び建物の影に身体を引っ込めると、次にGUMPを開いてデビルアナライズを起動させて悪魔の情報を調べる。

幽鬼 ガキ/Chaos/相性：呪殺無効 火炎・衝撃・破魔弱点/特技：ひっかき 吸血

火炎弱点か……でもここでケルベロスを呼んでファイアブレスを

吐かせても、万が一かわされて辺りが火事になったら目も当てられないから、ここは敢えてジャックフロストを出すしかないだろうな。俺はアナライズを終わらせるとコンソールを閉じてトリガーに指を掛け、いつでも召喚出来る様に構え、気持ちを落ち着かせるために深呼吸をする。すると、

『』
ウルウアアアアッ!! 『』

ガキ共が一斉に奇声を上げて今にも飛び掛らんとしていた。やるなら今しか無え!!

「行けえ！ジャックフロストおおっ!!」

俺は建物の影から飛び出すと同時にGUMPを相手に向けて、渾身の力でトリガーを引き絞ったのだ……